
しんぽてえ！？

シロツメ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しんぽてえ!?

【Nコード】

N5183S

【作者名】

シロツメ

【あらすじ】

能ある鷹は爪を隠す。世の中には特異な潜在能力、シンギュラリティ・ポテンシャルを持つ人間がいるのだ。廃れた現代で遺伝子が突然変異したのか、はたまた大昔から存在していたのに隠していただけなのか。

普通とは違う能力を持った主人公の巧は、自分の身体を調べようと近寄って来る怪しい組織から逃げていた。一匹狼でコソコソ隠れながら、静かに商売をやっていたのだが、ある日やって来た妙な客と関わったのを境に、事態は急激に変わって行く。

ヤンデレメイドに売れないベテランホスト、爆乳ニューハーフ、関西弁のぽっちゃり女……奇人変人が寄ってたかってボケるわボケる！巧はツツコミ切れるのか！？

魔法なんなくても、現代だってファンタジー。お馬鹿チートコメデイのはじまりはじまり。

＊拍手にキャラ挿絵あり

シンギュラリティ・ポテンシャル

人間の能力が完全解明される日など、来るのだろうか。

もし異常な能力がある人間が、ふとした遺伝子の気まぐれで存在したとする。だが本人が「私を解明してください」と自ら実験体を買って出るなどするだろうか。常人との差が大きければ大きいほど、名乗り出るなんて有り得ないと思う。自分なら絶対に嫌だ。例えばそれが多くの他人を救う研究に役立つかもしれないとしても、だ。人間自分が一番大事。

特異な潜在能力。俺はシンギュラリティ・ポテンシャル、略してシンポテなんて勝手に呼んでるが、それをひけらかして目立った人間の末路なんてろくなことはない。超能力とか千里眼とか、昔から公に発表したら、すぐに科学者やらマスコミやら野次馬やらが寄って来て、検証実験したり煽^{おだ}てたり批判したり中傷したり、散々騒ぎ立てる。そして身も心もボロボロになって消えて行くんだ。

だから本当にすげえ奴は隠す。隠してたまに便利な時だけこっそり使う。もしかしたら周りが気付かないだけで、シンポテを持っている人は、すぐ近くにいてもかもしれない。

もし怪しい研究家が寄って来たら、言うべきキメ台詞はこの一言。

”俺の細胞は、何人^{なんびと}たりとも覗かせねえ！”

薄い間仕切りの向こうから、カチカチとキーボードを叩く音がする。不規則なその音をBGMに、パラリとページを捲^{めく}った。

読んでいるのは特殊能力を持った人間達の冒険物語。こういうファンタジーものは飽きない。

「よくまあ、こんなに色んなパターンを思いつくもんだぜ。それか、書いてる奴が本当に何らかのシンポテでも持ってるのかもな……」
漫画喫茶で独り、呟いた。

ここはフリードリンクで1時間ワンコイン500円。ちょっとした気分転換には手ごろだ。

「あ、いけねえ。時間だ」

俺は飲みかけのコーラを急いで流し込み、席を立った。

外はじりじりと照りつける太陽。空からとアスファルトの照り返しでダブル攻撃だ。だがそんなものは一瞬で終わる。俺の仕事場は目と鼻の先、漫画喫茶の隣にある古い雑居ビルだからだ。

【お好みの香水 調合いたします】

かまぼこ板2枚を並べて、マジックインキで書いただけの、貧相な看板。別にふざけてるわけじゃない。立派な物を掲げられない、列記とした理由はあるのだ。決して貧乏だから、というのじゃないぞ。いや、まあ金持ちでもないのだが。

「すみませーん」

ほら、独りでちんたら意味のない言い訳してるから、客が来ちまった。これでも一部では知られた香水屋なのだ。

「はい、どうぞ」

「まりさんっていうお店の先輩から聞いて予約した、ゆうなですけどお」

「ゆうなさんですね。ええ、ええ、伺ってますよ」

入ってきたのはキャバクラ嬢。最近お水系の客も増えてきた。彼女達の金髪盛りヘアと付け睫毛を初めて見た時は、少しばかり衝撃を受けたものだ。それでも話してみると、多少声がでかいだけの、普通の女の子だ。俺にとっては大事なお客である。

「あれ？思ったより若いんだあ。いくつ？」

今日の客は俺を見るなりそう言った。

「あー、よく言われます。22ですよ。」

「マージで？あたしとタメじゃん」

「はあ、そうなんですか。それで、今日はどんな物を作りましたか」

後の予約が突っかえてるから、その手のお決まりなやり取りは軽く流す。

俺の香水は効果観面だ^{てきめん}。そのため、周りには内緒の調合を頼んでくる客が多い。個人情報^{個人情報}の保護が叫ばれ始めてから随分経っているが、俺もその辺はきっちり守っていて、接客は1対1が基本。その代わり、ある事情のため、客にも俺の店の存在を不特定多数に喋らないという約束をさせている。要は、その約束が守れる知り合いにしか、口コミ^{くち}をしてはいけないということだ。

契約書もないただの口約束だが、ここに来る客は、案外それを守ってくれる。下手に店が有名になったりしたら、俺は忽然^{こっぜん}と姿を眩^{くら}ますからだ。まあ、約束が守られていても、口コミで評判が広まり過ぎ、やむなく店を引っ越したことは過去に3度ほどあるが。かまぼこ板の看板は、そういうわけなのだ。でかい看板なんぞ提^さげていたら、目立って忽然と眩ますどころじゃなくなる。

「あたしさあ、色気がないって店長に言われるんだ。だから売り上げが伸びないって。チョーむかつく」

「そうですか。色々大変なんですねえ。では相手に色っぽく感じさせるものがないんですか？」

「うんうん。あ、でもお、あんまりやり過ぎて変なオヤジに襲われたら嫌だからあ、ちょっとだけね。それから香りはピーチっぽいね。可愛い匂いにしてよ。」

色っぽくなりてえのか、可愛くなりてえのか、どっちだよ……。なんてことは包み隠して「お安い御用ですよ」と愛想を振りまく俺。

この商売始めてから、女の我俣^{わがまま}には慣れっこだ。

客をそのまま待たせて、俺は隣の小部屋に入った。中は別に大した物は置いてない。旅行鞆に詰め込めるだけの空容器^{から}と水、それか

らちよつとした添加物があれば十分なのだ。作業が客の目に触れなければ、別にダンボールで作った仕切りでも構わない。まあ、せっかく小部屋のある所を借りたのだから、勿体つけて使っているだけだ。

小さなロールオンタイプの容器に精製水を入れる。香水をスプレー容器にしないのは、客からの要望が多かったからだ。効果^{てきめん}靨面の香水を少量だけ使いたい時に、プシュッと出ちまうと量が調節できなくて困るらしい。

「匂いはピーチね。確かこの辺に突っ込んだ気が……」
鞆をガサガサと漁^{あさ}り、桃の香料を取り出す。それを精製水とよく混ぜ、容器の口の部分に人差し指を差し込んだ。

ふんっ……と息を止めて、指に力を込める。その間思い浮かべるのは、最近話題になっているグラビアアイドルの水着姿。ただし顔だけゆうなさんに変えた。そして対象を限定するために、男がぽうっと見つめる姿も想像に付け加える。すると、俺の体を駆け巡る何かが指先に向かって収束し、容器の中の精製水に流れていった。

「ちよつとだけ色っぽくって言ってたからな。こんなもんだろ」
指を抜き取り、俺は自分の絶妙な匙^{さじ}加減に満足した。

これが俺のシンポテだ。指から流れ出た”何か”は、香料やアロマオイルで簡単に紛^{まぎ}れてしまうが、多分俺の体臭だ。気に入っているTシャツと同じ匂いだからな。今は若いから良いが、年を取ったらオヤジ臭になって、商売しにくくなるかもしれない。

そしてここからは俺の想像でしかないが、頭でイメージしたことが体臭に乗って香水に移り、嗅^かいだ人間の脳に作用する。ゆうなさん用に作ったのは、男性ホルモンでも刺激するんじゃないだろうか。脳科学者じゃないから詳しいことは知らないが。ま、俺は体臭の遺伝子が突然変異したということなのだろう。

キャップの蓋^{ふた}を閉め、待たせていたゆうなさんの所へ戻る。心なしか、金髪盛りヘアギャルが魅力的に見える。今回作った香水の効果は、不特定の男に限定してあるから、蓋を閉める前にちよつと吸

い込んでしまった俺にも効くのだ。もっと強い効果を要求された時は、風邪ウィルスも防ぐようなマスクを付けてから作業に当たる。一時的な偽りのものとは言え、客に一々反応してたら身がもたない。まあそこまで強力なものを欲しがる奴はほとんどいないが。何事も程々が良いというのは、皆よく分かっている。

「お待たせしました」

「やったあ。ありがとうー」

「料金は一律10000円です。お気に召されなかった場合は、明日中に限り効果の変更、もしくは商品と交換で返金に応じさせていただきます」

手の中で簡単に握り込めてしまうくらい小さい容器でこの値段は、自分でもかなりぼったくりだと思うが、客は普通には出回らない怪しげな効果を分かっているから、高いとごねられたことはない。

「うんうん、分かったあ」

本当に聞いているのか疑わしいくらい浮かれたゆうなさんは、料金を支払うと大事そうに香水を鞆に仕舞った。

「ああ、ご存知だとは思いますが、この店のことはあまり広めないようお願いしますよ」

ニコニコしながら出て行く彼女の背中に念を押した。

売れないベテランホスト

今朝になってクーラーが壊れた。昨日までは何ともなかったというのにこんちきしょー。電気製品というものはいきなり壊れるから困る。

「こんちはー！」

威勢の良いこの声は客じゃない。修理に来た電気屋の兄ちゃんだ。

「どーもすみません、日曜なのに」

「いえいえ、クーラーが動かなくなっただんですよね？」

「そうなんです。あそこなんですけど」

そう言っただけで電気屋の兄ちゃんを案内する。

部屋の中は茹^くだるような暑さだ。扇風機じゃ都会の夏は乗り切れない。クーラーは任せて、俺は窓際に避難した。

兄ちゃんは首にかけたタオルで汗を拭き拭き、蓋を開けてしばらく中を調べていたが、やがて「うーん……」と唸りながら俺のところまでやって来た。そんなに酷い壊れ方なのだろうか。

「あのですね、これってかなり古い機種なんですよ。修理しようにも部品が製造されてないんです」

「マジですか……じゃあ……」

「買い替えしかありません。基盤や配管が寿命を超えちゃってますからねえ。例えば倉庫に部品が残ってたとしても、修理したら買うより高くつきますよ」

ここはクーラー付きで借りてるから、買い替えとなれば勿論ビルのオーナーが金を出すのだが……。新しいのが使えるのはラッキーでも、付け替えるまで何日このサウナ部屋で耐えなきゃいけないのだろう。

結局オーナーに相談しなきゃいけないから、兄ちゃんには出張点検料の2000円だけ払って帰ってもらった。

【クーラーが壊れました。団扇^{うちわ}持参でご来店ください】

とりあえず、今日の予約客にメールを入れておいた。

あぢい……。死にそうなくらいあぢい。卓上ミニ扇風機を顔面に向かって全力稼働させているが、焼け石に水だ。霧を噴射するタイプを選べば良かった、と激しく後悔する。ああ、人間は何故恒温動物なのだろう。変温動物になりたい。体温を自在に調節できるシンポテが欲しい……

こんな日の不幸な客は、売れないベテランホストのヨシオさんだ。ここに引越してきてからの常連客である。常連なのに彼がいつまで経っても売れないのは、俺の香水が一過性のもので、水商売で使っても、所詮きっかけ作りにしかないからだ。きっかけを上手くその後に繋げることができれば良いのだが、生憎^{あいにく}ヨシオさんにそんなスキルはない。

趣味の悪いガラガラしたねずみ色（シルバーとは言ってやらん）のスーツを来て現れた彼は、相当暑かったのだろう、入って来て早々に上着を脱いだ。スーツの下は白か黒のカッターシャツでも着ればまだ見れたものを、よりによって今日のチョイスは、オヤジの肌着を思わせる、ペラペラの白いランニングシャツだった。

「クーラーが壊れたと連絡があったが、機械というものは女性と同じで気難しいものだな。ハッハッハッハ！」

メールの忠告に素直に従い、ヨシオさんは持参した団扇^{あお}をパタパタ扇いで言った。

バブル景気崩壊で就職後すぐに首を切られ、そのままホストとなった彼は、インナーだけでなく口調もオヤジ臭い。今年で43歳になるのだからそれも仕方がないだろう。

「いや、古過ぎてもう部品がないらしいです。買い替えを薦められましたよ」

「そうかそうか。では気難しいのではなく大往生だったか」
またくだらない例え話を……。このオッサンはいちいち言うことが鬱陶しいのだ。ホストとして致命的である。

「……それで、お作りするのはいつものやつで良いんですか？」
さっさと仕事を終えて隣の漫画喫茶に避難したいから、話をぶち切り確認を取った。

「いや、今回は少しばかり変更するでしょう」
「はあ、どんな風に？」

やる気のない態度で一応聞くと、ヨシオさんはダツと立ち上がり、右手に団扇、左手に拳を握り絞めた。

「よくぞ聞いてくれたな巧君！ ホスト歴20年、リサーチにリサーチを重ね、やっと……やっと……、俺の魅力を理解できる年齢層を発見したのだ！」

リサーチを重ねて、ただ節操なく声かけまくっただけじゃねーか。
「それじゃあ、対象を変えるんですね？」

「そういうことだ。若い子は大人の魅力を分かっとらん。俺を理解するには、相応の人生経験が必要なのだ」

顔面に力を入れて語っているが、右手の団扇をパタパタさせているから台なしだ。

「次は熟女狙いですか？」

自分と同一年くらいの主婦に、へそくりでも使わせるつもりなのだろうか。

と、ここでヨシオさんは疲れたのか、扇ぐ手はそのまま、椅子に座り直した。あんなに興奮していたから俺より暑いだろう。卓上扇風機は貸さないが。

「いいや、この間初めてキャッチに成功したのは70代だった」
熟女通り越して枯女かよっ！ 年金狙いとは鬼かヨシオっ！

「……いやー流石にそれはちょっとマズいんじゃないですか？ お婆

ちゃんからお金引つ張るなんて」

「安心しろ。引つ張るほど飲ませられん。店でぽっくり逝^いかれたら敵^{かな}わんからな。金額ではないのだ。ハートなのだよ、ハート」

ヨシオさんは得意満面で、立てた親指を自分の胸に向かってトンツと突き立てた。

うわあ、コイツに説^とかれると全身に鳥肌が……

「富恵^{とみえ}ちゃん^{とみえ}は聞き上手でな、俺の話を聞いては優しい笑顔で包んでくれる……癒し系女子なのだ」

「ホストが客に癒してもらってどうするんですか」

「まあそう言うな。富恵ちゃんは高血圧を気にして焙^{ほう}じ茶しか飲まんから、はつきり言って金額^{すずめ}は雀の涙だ。そのかわり今度、老人会の友達を4、5人連れて来てくれるらしい。名付けて、”塵^{ちり}も積もれば山となる”作戦だ！」

「……山ほどの金額にはならないとは思いますがね」

年寄りに夜遊び覚えさせるなんて、風の前の塵^{ちり}になりやしないか、そっちの方が心配だ。

どうでも良いが、さっきからヨシオさんが扇ぐ団扇の風に乗って、ほのかな加齢臭が俺のところ^{ところ}に飛んできている。これは早々にクーラーを買い直してもらわないといけないな。

「山になるかもしれんぞ？最近のご老人は複数の老人会を掛け持っているらしい。富恵ちゃんが連れて来た4、5人が更にそれぞれ別の老人会から友達を連れてきて、その更に友達を……というように、俺は長期戦で考えている。」

「ネズミ講じゃないですか……」

その前に店内が婆^{ばあ}だらけになって、他のホストや若い客からクレームが来るだろう。

「急激に客が増えればそうなるかもな。だが長期戦と言っただろう？ご老人を相手にするには、演歌でも覚えながらのんびり構えていないといけない。この作戦が上手くいく確率は47%くらいだと計算している。それを58%に上げるために、巧君の香水が必要な

だ」

一体どんな計算で出した数字だ。

「要は半々弱の確率を、半々ちょいまで上げたいんですね？」

「相変わらず身も蓋もないなあ、ハハハッ。よろしく頼むよ」

お婆ちゃんに恋愛感情を持たせるのは酷だから、ヨシオさんとい
て楽しい気分になる程度にすることで話はまとまり、俺は別室へ移
った。

容器に精製水を入れ、彼がいつも選ぶネロリのアロマオイルを少
々。指を差し込みふんっ……と力を込めて思い浮かべるのは、中高
年に人気の漫談家。勿論顔だけヨシオさんにしておく。対象を年寄
りに限定するために、手を叩いて喜ぶお婆ちゃん達のギャラリーも
付け足しておいた。これで富恵ちゃんとやらは、何となく面白い人
と喋っている気分になるだろう。

出来上がった香水を渡し、ここを富恵ちゃんにも紹介してやろう
かと言うヨシオさんの申し出を、半ば脅迫気味に断って追い出し、
漫画喫茶へ涼みに出かけた。

ヤンデレメイド

とある漫画喫茶。

今日は小雨がしとしと降っている。こんな日はホラーものが読みたくなる。勿論シンポテ要素が入っているものだ。

主人公はある日突然除霊の能力に目覚め、バツバツと悪霊たちを切り捌く。おいおい、幽霊なんてあんな儂^{はかな}なもの、どんだけ乱暴に扱ってんだ。悪霊になった事情くらいあんだろうから、念仏でも唱えて穏やかに成仏させてやれよ。そんなことを思いつつも、キレの良い戦闘シーンは実に痛快だ。やっぱり念仏じゃ盛り上がりなか。ああ、俺の側にも可愛いヒロインが現れねえかな。

ひとしきり読んで満足すると、残りのアップルティを飲み干し、仕事場兼家の雑居ビルへと戻った。傘なんて必要ないくらい近い上に、このビルの1階はコンビニだ。最近めっきり行動範囲が狭くなったと思う。

おやつにスナック菓子とジュースを買ってから4階まで上る。当たり前だがエレベーターはない。俺の運動は、この黴臭^{かび}い階段の上り下りのみだ。勢いをつけて一気に駆け上がる方が、意外と楽だというコツまで掴んだ。

後少しで4階というところで、俺は異様な気配を感じた。さっきまで読んでいた漫画の悪霊が頭に浮かぶ。あの時は心の中で大口を叩いたが、俺に除霊のシンポテなんてない。よって、ホンモノの幽霊が現れると普通に怖いのだ。

意を決して覗くと、いたよいたいた、黒いロングヘアを垂らして、ドアの前にぬぼーんと突っ立った細身の女が。一応足はあるようだ。「あ、あのー……」

声をかけると、女の顔がギギギという錆びた音がしそうなくらいゆっくりした動作でこちらを向いた。

そこにはあるべき目も鼻も口もない……きゃーのっぺらぼう！

なーんてことはなかった。青白い不健康そうな肌色ではあるが、まあそこその顔立ちだ。造形だけで言えば、ご当地アイドルくらいにはなれるだろう。

「……ここで特殊な香水を作ってもらえるというのは……ほおんとおですかああ！」

「ひいいっ！」

振り返る動作からは想像できないくらいの速さで寄って来た女に、俺は危うく階段から転げ落ちそうになった。

「え、ええと、今日は予約入ってなかったはずなんですが……一体どなたのご紹介で？」

「聞いていただけますかああ？」

聞きたくねえ！聞きたくねえが、女はおれのTシャツをがちり掴んで離さない。

飛び込み客は基本的に受け付けてないが、仕方なく彼女を中へ入れた。クーラーは意外に早くオーナーが替えてくれた。空き室から持って来た、これまた部品のなさそうなオンボロの中古品で、電源を入れるとヴヴヴヴン……という、けっこう大き目の音が出る。ひよっとしたら前のやつより古いかもしれない。それでも冷えるから良しとしよう。

そして座らせた幽霊女から事情を聞く。

「……ワタクシ、電ひょうこ子といえます。まりさんからこのことを聞いたのです……」

まりさんとは、こないだ店の後輩を紹介した人だ。ということは、こいつもキャバ嬢なのだろうか。全く見えないが。

「ええと……では同じお店の方ですか？」

「面接に行ったお店にまりさんがいたんです……。でも店長が、店長が……ううっ」

勝手に涙ぐむ女。何だか幽霊の不幸話を聞いてやってる霊媒師になった気分だ。そこそこ可愛くても雰囲気怖過ぎるから、はっきり言ってハンカチを貸してやろうという気にもならない。

「……採用されなかったと？」

「いいえ。君にぴったりの所が姉妹店にあると言って、連れて行かれたのが……ヤンデレメイド喫茶だったのですうっ！」

「ヤンデレ……病^やんでデレるか。そんなメイド喫茶があったんだ。一体どんな客が付くんだか……」

俺は普通のメイド喫茶でいいや。

「……お客さんですかぁ？可哀想な子に同情しちゃいがちな人が多いです。意外といるんですよ、同情と愛情をはき違えてる男性はそういう人って、たいていその子が可哀想じゃなくなったらさっさと捨てて、新たに可哀想な子を探しますけど……」

世の中には色んな趣味の奴がいるんだな。でも俺は普通のメイド喫茶がいい。と2回言ってみたりする。

「ワタクシは元々自分を変えようと思って、あえて華やかな夜のお仕事をしようと思ったのですよ……。病^おんでるキャラばかりのメイド喫茶では……意味がないのですううっ!!」

をーいをいをい！と手で顔を覆^{おお}って泣く電子さん。素なのかわざとなのか知らないが、客でもない俺に可哀想でしょアピールをするあたり、ヤンデレメイド喫茶は彼女の天職なんじゃないかと思う。

とりあえず鬱陶^{うつとう}しいのでティッシュ箱を机に置いてみる。

ずびびっ！ずびびびっ！すびっ！と遠慮なしに本気で鼻をかまれ、どうやら可哀想アピールは素でやっているということが分かった。彼女の下瞼には、溶けたマスカラがにじんでいる。ますますホラーだ。

「ふう……。それで店長に抗議しに行ったんですけど、取り合ってもらえなくて……丁度その時店にいたまりさんと目が合ったんで、彼女に縋^{すが}りついたらここを紹介してくれたんです。魅力的になれる香水を作ってもらえて。」

縋^{すが}りつかれたのか、まりさん。災難だったな。だが紹介する相手は選んでもらわなきゃ困る。電子さんみたいな自分に酔うタイプは、総じて口が軽い傾向にあるからな。下手に香水の効果を気に入られ

て、あちこちで喋られたら敵^{かな}わない。

世の中には、シンポテに食いついて来る奴なんぞわらわらいる。面白半分で寄って来るならまだ蹴り飛ばせるが、本気で調べて利用しようとする奴らは厄介だ。

そういうのの大半は、「君の身体を解明すれば、多くの人々が救われるかもしれない！」なんて言ってくる。そんなの知ったことか。何で赤の他人達のために俺がモルモットにならなければいけない。どうせ俺の身体研究して新薬ができたとしても、それを使って助かった奴らは感謝するどころか、モルモットになった俺の存在を知ることもないだろう。まあその前に、様々な脳作用を体臭に込めて自在に操る、なんて俺のシンポテが、命を救うほど尊大なテーマの研究に役立つとは到底思えないが。

つい長く愚痴^{ぐち}ってしまったが、とりあえず今は電子さんを何とかしなければ。

「ええとですね、俺の香水は、付けたら魅力的に変わるわけじゃないんですよ。目の前にいる相手をその瞬間だけ錯覚させると言いましょうか……、とにかくあなた自身が病んでるように見せない努力をしなければ、ここの香水を使ったところで、いつまで経ってもヤンデレメイド喫茶からは抜けられませんよ」

とか言って、さりげなく諦めてもらう方向へ促^{うなが}してみる。キャバ嬢達に渡してのようなものを作ってやれば済む話だが、ヤンデレメイド喫茶で口^{くち}コミでもされたら、ここはお化け屋敷と化してしまいそうだ。

「そうなんですかああああ!？」

ひよおおおおおっ! とムンクの”叫び”みたいな顔をして叫ぶ電子さん。無理せずヤンデレメイド喫茶にしておけと言いたくなる。店長の判断は正しいと思うぞ。

ショックを受けた感じの彼女は、しばらくムンクのまま俯き、何か考えているようだったが、やがて上目遣いに視線を上げた。青白い顔とパンダ目マスカラが高^こじて、まるでTVの井戸から出て来そ

うな雰囲気だ。

「……この香水って、付けた本人にも効きますか？」

「ええ、まあ。そういう風に作れば可能ですが」

「じゃあ、自分の気持ちがウキウキ高揚するような物を作ってください！目の前の人に恋するような感じに！そしたら病んでるように見えなくなるでしょう！？」

成る程、店長や客の男に疑似恋愛をして、その場だけでも青白い顔色を何とかする気なのか。だがそうになると、結局は香水を作らなくてはならなくなる。

「誰彼構わず惚れるのは危ないと思いますよ。世の中、悪意と下心に満ちた男は腐るほどいますから。」

と、またまたさりげなく諦めるよう促してみた。

「……まあ！ワタクシの貞操を心配してくれるのですかあっ！？何て……おお優しいいいい！」

途端に電子さんがずいずいっと前のめりに寄って来た。

い、嫌な予感……

押しかけヒロイン

迫り来る貞……いや、電子さんひょうごから離れるべく、俺は座っていた椅子から飛び退いた。

「どおおおして逃げるんですかあああ!？」

「当たり前だろーがっ! お前鏡見てみろ! 店長がヤンデレメイド喫茶に行かせた理由がそこにあるっ!！」

電子(もう)さん”付けはしてやらん”は悪霊的な負の気をビシバシ放ちながら、じりじり俺を追い詰め非難する。もう穏便に断る余裕など吹っ飛んでしまった。ドアの前にいた時の妙な気配といい、普通じゃない。コイツ、本当は実体を持った幽霊なんじゃないか!？

「理由なんて分かってますよお。でももう香水は必要ないです。

さっきあなたにキュンとしちゃいました……。ワタクシ、今凄く気分が、高お揚おしてますうっ!！」

何故”高揚”の所からいきなり声が低くなる! 最後まで声を張れ! 余計におどろおどろしてるように聞こえるじゃねーかっ!

「んな簡単にキュンとすんな! だから鏡見ろって! 高揚してる割りには青白い顔のまんまだぞ!」

「まあ! それじゃ胸キュンが、足ありいなんだわああっ!」

頼むから後半声を低くしないでくれえ! 今度は貞子じゃなくて、お岩が「皿が足りないわあ……」って言うてるようにしか聞こえん!

とうとう俺は壁際まで追い詰められてしまった。女の電子相手なら力付くで突き飛ばせるはずなのだが、何故かそうはさせない異様な雰囲気を彼女から感じる。

「ふふふ……ワタクシ良いこと思いました。香水に頼らなくても、ここに居座れば……ずうっと胸キュンじゃあなあいのですかあああ!」

「やめろおおお! ヤンデレ幽霊に住み着かれたら不眠症になるだろーが!」

冗談じゃない。四六時中こんな恐怖を味わっていたら、俺がヤンデレ執事喫茶にでも転職出来そうだ。

その時ふと、圧迫されるような電子の存在感が和らいだ。

「……あ、あれ……？」

「大丈夫ですよ。ワタクシ、何でか分かりませんが、自由に気配を調節出来るんです。興奮するとさっきみたいに暴発しちゃいますけど……」

「え……、それってまさか……」

思いがけないネタばらしを聞き、俺はまじまじと電子を見た。青白い幽霊顔は変わらないが、逃げたくなるような恐怖感はない。

「他人が部屋にいると落ち着かないのでしたら、気配を完全に消すことも可能です。」

電子はそこで一旦、スカートのポケットから携帯用の拭き取るメイク落としを出し、目の下にべったり付いたマスカラを落とした。

「いや、背後霊みたいで余計に怖い……ってそうじゃなくてだな。気配を調節って、普通出来ないだろ。忍者なのか？ 山を飛び谷を越えやって来たのか？ でもお前はどんぐり眼にへの字口じゃないぞ」

「……何を言ってるのか分かりませんが」

「……ちよっと前に漫画喫茶で読んだやつアニメ版主題歌だ……」

いや、そんなことはどうでも良いんだ。お前、何者だ？」

訝しむ俺の視線を受け、電子は少し淋しそうに顔を逸らすと、ゆっくりした足取りで椅子に戻った。

電子は俺がさっき買ってきたジュースで一息つくと、スナック菓

子を頬張りながら、自分の妙な特技について語り出した。

「ぶありぼり……、ワタクシ、小さい頃から虐められ體質なのか、よく学校のトイレに入るたびに外からドアを押さえられて、”花子が出たぞ”とか言われてたんです。どんなにコッソリ入っても誰かが気付いて閉じ込めるんで、さっきあなたが言った、忍者みたいに気配が消せたら良いのについて思って、毎日ひたすら念じてたんです。」

「え……気配って念じて消せるもんじゃないと思うんだが……」

「ええ、でも小学生の頃でしたから、ニンニンニンってやってたら出来るって信じてたんです。そして……本当うに出来ちゃったんですうう！」

身を乗り出してきた電子を避けつつ、俺はスナック菓子を全部食べ切られる前に、袋を自分の方へそっと引っ張った。

「……それで閉じ込められなくなったのか？」

「はい。逆にワタクシが気配を消して閉じ込めり、虐めっ子が来たらいきなり飛び出して脅かしてやりました。」

「やっぱりヤンデレメイドになっとけ。それかお化け屋敷にでも就職しろ」

虐めネタを逆手に取って仕返したあすげえな。コイツのクラスメイトは、触れてはいけない奴に手を出しちまったのか。

「酷いです……。でもあなたに言われると何となく癖になりそうな感じが……」

「そらあアレだ。気のせいだ、うん。とりあえず話は聞いたが、俺は一人で細々とやって行きたいんだ。だから居座られても困る」

「まあまあ、そんなこと言わないでください。こういうひっそりと怪しげなお店を男の人がやっていたら、ヒロインが現れるのが王道でしょう？」

「確かにヒロインがいたら楽しいが、それは明るい美少女であって、青白い顔のヤンデレじゃない。」

俺は漫画喫茶で”可愛いヒロインが現れないかな”と思ったこと

を後悔した。考えたことが悪い方の意味で実現してしまうのは、世の中の基本的な事例である。

「ああ何て冷たいお言葉。ツンデレの素質がありますね。ヤンデレとお似合いですう」

「デレない！ お前にはデレないぞ！ 商売の邪魔だから、そろそろ帰ってくれ。」

どうやら電子もシンポテの持ち主みたいだが、今まで一匹狼でやってきた俺に、ヤンデレメイドは必要ない。そう結論付けた俺は、彼女の腕を掴んで引く張った。

「い、嫌ですう！ 最後までワタクシの話を聞いてくれた人は、あなただけなんですう！」

電子は俺に引きずられながらも抵抗した。

「……あ、そんな引く張らないで。お願いですよ、お望みなら本当に空気のようになれますからあ！ ヤンデレメイド喫茶で働いて、生活費もちゃんと入れますうう！」

「ヤンデレメイド喫茶で働きたくないから、胸キュンしたいんじゃないのかよ……。」

「そうですう！ 不本意ですがお金のために働いて、見事ヤンデレを卒業した暁には……あなたのお嫁さんにいいいい！！」

いよいよドアの前まで引きずられて来たからか、電子はうるさいくらいに騒ぎ出した。このまま追い出しても、ドアの外に居座られたら、他の客が逃げちまう。

「ようし、そこまで抵抗するなら、俺を嫌いで仕方なくなる匂いを嗅がせてやる……。お前もまりさんに紹介されて来たなら分かってるだろ？ 俺の能力は効果観面^{てきめん}だって。思い切り強力なの嗅がせて、お前がトンスラこいてる間に、どこか遠くへ逃げるとするか……」

「やだ、目が据^すわってますって。そんなことしたら、我に返った時、あなたの能力のことを怪しい組織に喋りますよ。いーんですかあ？」

「……お前、組織の人間か？」

俺は思わず電子の胸倉を掴んだ。つい力が入ってしまい、「うげえ

……」という声が聞こえた。

「ギブ！ギブ！……はあ、情熱的なんですねえ。ワタクシは組織の者じゃないですよ。人間離れた特技を持つ人達を探している怪しい組織は、世界中にありますし、日本にもいくつか存在します。一時期周りをウロつかれたことがあるんで、その時に少し調べました。と言ってもそれ以上のことは分かりませんでしたけど。あなたもウロつかれた経験あるでしょう？能力者同士、仲良く助け合いましうよお」

「お前の場合は助け合うと言うより下心が見え見えなんだ！」

「大丈夫ですう！ 相思相愛になるまで襲いませんからあ！ 置いてくれたら喋りません！ ワタクシ口は軽い方ですけど、いくらなんでも愛しのダーリンの秘密までは喋りませんよお！」

「愛しのダーリンとか呼ぶな！」

押しかけ女房になる気満々な電子。怪しい奴らにウロウロされたことがあるということは、コイツも間違いなく俺のようにシンポテを持っている。だが匿^{かくま}ってやろうという気にならないのは、青白い幽霊顔と、馬鹿にしてるのかと疑いたくなる程妙なハイテンションのせいだろう。

追い出せば怪しい組織に俺のことを喋^{すみか}ると言う。そんなことをされたら逃げるだけなのだが、新しい住処^{すみか}と口の堅い客を掴むまでが大変なのだ。まあ、シンポテを使った商売をしなければ、こんなコソコソする必要はない。だが香水屋を始める前に組織の奴らは俺の存在に気付いていた。普通のバイトをしても、すぐに嗅ぎ付けて接触して来るだろう。結局はシンポテに縋^{すが}って、その場しのぎの生活費を稼ぐしかないのだ。

ああ、欲しかったのは可愛いヒロインなのに……

オレンジジュースとカフェオレ

旅行鞆一つと寝袋しか置いてなかった作業部屋に、突然宅配便でベッドが届いた。俺の関知しない現象だ。だが誰の仕業かは容易に想像が付く。

「雹子^{ひょうし}、お前荷物取りに帰っただけだろうが。何でベッドが届く？」

宅配の兄ちゃんが帰った後、俺はこめかみに青筋を立てつつ、スーツケースを引っ提^さげて戻ったヤンデレ女に聞いた。

「ベッドも荷物ですよ。一人で運べないから業者さんに頼んだだけで」

「居座るのは昼間だけにしてくれねえかな……。親御さんも心配するんだろ？」

半ば諦めながらも、もう一度交渉を仕掛けてみる。

結局昨日は押し切られてしまったのだ。かなり不本意だったが、商売の邪魔をしないことと、恋仲ではないというのを弁^{わきま}えて行動することを条件として、まあ気の済むまでここを出入りする許可を出した。下手に突っぱね過ぎると、こっちが条件を出す前に、勝手に居座られる羽目になるからだ。それなら早いうちに譲れない境界線を決め、妥協案^{たきようあん}を出した方が良い。それにちよつと優しい？言葉をかけただけで食らいついてくるといふことから、雹子^{ひょうし}はかなり惚れっぽい性格と見た。ヤンデレメイド喫茶で客に優しくされたら、すぐに離れて行くだろう。そう踏んだのだ。

「大丈夫です。昨日帰ってから、好きな人と同棲しますって報告しました。そしたら心配どころか、”やつと雹子を恐れない男が現れたのか”って、父が泣いて喜んでましたよ」

「俺はお前の彼氏じゃないだろう。親父は誤解してんじゃねーか」

「嘘は言ってませんよ。勝手に誤解されただけです」

シレッと言った雹子^{ひょうし}は、さっさとスーツケースを作業部屋に運んだ。

「な……何なんですかああっこれは！」

作業部屋から叫び声が響き、俺はしてやったりと鼻を鳴らした。

「何って、当たり前だろうが。お前の立場はルームメイトだ。プライバシーを守るために壁を作っただけだ」

「そんなあ……これじゃ一つ屋根の下で王道、かつR指定なハプニングが起こせないじゃないですかあ！」

「お前が起こすのかよ！ やっぱり仕切って正解だったな」

電子が荷物を取りに戻っている間、俺はぼうっとしていたわけじゃない。ゴミ捨て場にあったダンボールを持って帰り、それを広げて組み合わせ、入り口から丁度半分に部屋を区切るように壁を作ったのだ。窓側はもちろん俺のテリトリー。窓なしの方は電子。届いたベッドをそっちに押し込むと、足の踏み場もロクにない。

「私の方、暗すぎますう……」

「蝋燭でも灯しとけ。その分家賃はまけといてやる」

しばらく不満げに頬を膨らませていた電子だったが、俺がそんなぶりっ子に乗らないと悟ると、渋々スイーツケースをベッドに上げた。

電子の荷物整理が終わり、俺達二人は昼飯を食っていた。さすがにベッドの上に閉じ込めたままは可哀想だから、いつも客の注文を受けている広い方の部屋で、一緒に食っている。俺は朝からダンボールの壁を作って疲れていたから、軽めにサンドイッチとオレンジジュースを、下のコンビニで買った。

「お前、よくそんな組み合わせを平気で……うわ、見てるだけで気持ち悪い……」

電子が選んだ昼飯は、カツ丼とカフェオレだった。それを交互に口へ入れるのだ。たまにカツ丼を飲み込み切る前に、甘ったるいカフ

エオレを流し込む。味を想像してしまい、俺は顔をしかめて彼女から目を逸らした。

「そうですかあ？ まあ確かに混ぜて美味しくなる組み合わせではないですけど。カフェオレが好きなんで、別にカツ丼と混ぜても気にしません」

「美味くなるわけじゃないならやるなよ……」

「食事の時はこれしか飲みません。お茶なんて味気ないですよ。

あ、そうだ、巧たくみさんが今持つてるオレンジジュースを飲んだ直後にカフェオレを飲むと、どんな味になると思いますう？」

聞いてくる電子の顔はニヤニヤしていて、ロクでもないことを考えていそうだ。とりあえず無視を決め込む。

「ええ、分かんないんですかあ？」

「……」

「答えはですねえ、カフェオレ飲む瞬間に”うっ”ってなった時の胃液風味なんですよ！ ほれほれ……」

「……ううっ！」

聞いただけでも気持ちが悪いの、電子は面白がって俺の鼻先にカフェオレをチラつかせた。今まで飲んでいたオレンジの爽やかな香りに、突きつけられたカフェオレの匂いが混じり、本当に胃液が込み上げてきた。

「あれ？ 匂いの特殊能力持つてるのに、匂い自体には弱いんですかあ？」

「ひよおおこおおお！」

ふざけたヤンデレ女の顎あごを、俺は怒りに任せてガッシリ掴んだ。

「うががっ！ いはい、はいれそ（痛い、痛いですう）！」

「……お前も……味わええっ！」

俺は空いた方の手で飲みかけのオレンジジュースを構える。

「ああ！ ほんあ、あんへはげひいかんへふきっふ（そんな、なんて激しい間接キスう）！」

「黙れ！ 胃液に塗まみれるがいい！」

そしてペットボトルのオレンジジュースを、間拔けに空いた口へ流し込み、間を置かず電子の手にあったカフェオレも同様に流し込んだ。

「うげらおわあ！むおげえ！」

顎を離してやると、口の中が胃液風味なのだろう、電子は意味不明な叫び声を上げて、のた打ち回った。気分は昨日漫画喫茶で読んだ、除霊のシンポテを持つ主人公だ。

「ふん……思い知ったか」

「ゲフゲフ……初キッスはレモンの味らしいですけど……初間接キッスは胃液の味なのですね……ぽっ」
こ、懲りてねえ……。強すぎるぞ、こいつ。

「……もういい。今後食事の時に胃液話は一切禁止だ。分かったな？それから、ここに居る間は、俺やお前の能力のことを、シンポテと呼べ。」

「し、しんぽてえ？」

「特異な潜在能力、シンギュラリティ・ポテンシャルの略だ。お前さっき、”匂いの特殊能力”って言っただろ？そうじゃなくて、匂いのシンポテと言えってことだ。お前の場合は気配のシンポテだな」
「……なんでまたそんなことを？」

不思議そうに聞き返した電子に、俺は胸を張ってニヤリと笑った。

「異能とか特殊能力とか、ありきたりな言葉を使うのはつまらねえ。ただのこだわりだが、ここは俺の住処で、お前は後から入ってきた新参者。ここのルールは俺が決める。今決まったのは、食事の時の胃液話禁止と、シンポテの活用だ。文句あるか？」

「まあなんて……俺様なお！　またキュンと、しいちゃあいましたああ！」

また妙なところでスイッチが入ったらしく、電子は青白い顔で寄って……いや襲ってきた！　慌てて逃げる俺！

「うわっすぐ興奮すんな！　気配がでかくなってるぞ！」

「そおれえもおるるですかあああ？」

「そ、そうだ！ 今すぐ気を静めろ！ 無になれ！」

ヤンデレ怨霊おんりようはそこでようやく気配を収めた。また壁際まで追い詰められた俺は、危機一髪だった。

「酷いですう。無になったら幽霊みたいじゃないですか」

「いや、今のはまんま怨霊だったぞ……。とにかく、今日決まったルールは3つ。言ってみろ」

「えっとお、ご飯の時に胃液の話をしないい、シンポテを使うう、やたらと興奮しないい、ですか？」

「そうだ……」

胸をなで下ろそうとしたその時、コンコンコンツとドアがノックされ、外に人の気配を感じた。

「すいませーん。」

聞こえた呼び声は、イントネーションが少し訛なまった女のものだった。今日の予約は夕方からだ。一体誰だろう。

「はあい、どちら様ですかあ？」

俺より先に電子が答えた。

「新聞いりませんかー？」

やっぱり微妙にイントネーションがおかしい。標準語を無理矢理使っているように感じられる。

「今主人が出かけててえ、分かりませえん」

おい、お前と結婚した覚えはねえぞ。何勝手に言ってやがるんだ。

「……そーですかー。ほなまた来ますー」

電子のセリフで危うく聞き逃しそうになったが、新聞屋の営業らしき女は最後に、完全な関西弁を使って去った。

「怪しいな……」

「え？ さっきの人ですか？」

「ここは標準語圏だぞ。関西弁の新聞屋なんて怪しすぎるだろ。頑張って標準語喋ろうとしてたみてえだが……」

「うーん、転勤してきたばっかとか？」

新聞屋の営業は地元の個人委託がほとんどだ。転勤なんて聞いたこ

とねえ。

電子はあまり気にしていないようだが、関西弁の女に、俺は思い当たることがあった。

関西弁の女

俺が高校3年の時のことだ。自分のシンポテに気付いてしばらくすると、実家の周りを怪しい奴らがウロウロするようになった。奴らは一様にサングラスをかけていたため近所でも怪しまれ、警察が配信する、街の事件や不審者情報のメールに載せられたこともあった。

しばらく無視していると、そいつらは俺に接触して来た。たいてい「君には面白い特技があるんだろう？」と言ってくる。俺は自分の中に目覚めた力のことを、家族にさえ話したことはない。なのに奴らは知っていた。怪しいったらありゃしない。当然しらばっくれた。

他にも道端でいきなり「無料で人間ドッグを受けてみないか？」と言われたり、「献血しませんか？」と献血車なしでいきなり注射持って来たり……。それも人は違えど皆サングラス野郎なのだ。酷い時は堂々と「君の細胞を研究したい！ 人類の発展に貢献したまえ！」と迫ってくる奴もいた。馬鹿としか言いようがない。せめてもっと怪しくない身なりで来いよ。

そんな馬鹿サングラス達を、シンポテで追い払いながら暮らしていた、ある日の学校帰りのこと。

部活ですっかり遅くなり、日の落ちた薄暗い道を歩いていると、後ろから足音が重なって聞こえた。パツと振り向くと、小柄で帽子を深くかぶったサングラスの奴がサツと電柱に隠れ……。ようとしたらしいのだが、少し太っているために隠れきれいでなかった。

マヌケな姿に呆れつつも、家路を急ぐ。するとまた足音が重なって聞こえ、振り向くとまた電柱に隠れ……。ようとする。また馬鹿なサングラスが現れた、とうんざりしながらも、痴漢に狙われた女ってこんな気分なのかなあと思った。

それが4度続いた時、俺は急に走り出した。あんなマヌケに、ち

んたら付いて来させてやる義理なんてない。相手は小太りだ。全力で走れば撒^まけると思ったのだ。

だが予想に反して小太りの足は速かった。足音がどんどん近づいて来る。こうなったら迎え撃って、強烈に眠くなる匂いでも嗅がせてやろう。そう思い、公園に差し掛かった時、俺は意を決して再度振り返った。

すると小太りサングラスは急ブレーキで足を止め、あろうことか電柱より細い街灯に身を寄せたのだ。

「んなもんに隠れきれぬわきゃねーだろっ！ てめえのサイズ考えろっ！ ナメてんのかコラッ！！」

俺は叫んだ。突っ込まずにはいられなかった。

ツカツカと小太りサングラスに近づき、その襟首^{えりくび}をむんずと掴む。「や、やっぱそーなるやんなあ……」

そいつの声は、若い女のものだった。しかもこの辺では滅多に聞かない関西弁。俺はTVでしか聞いたことがない。

「ドタバタ下手くそに付け回しやがって。俺に何の用だ？」

「話す、話すから手え離して！ あ、シャレのつもりちゃうで？」

……あぐっ……苦しいっ！ ごめんて、ごめんやて！」

つまらんことを言うから襟首をねじってやると、女は即行でギブアップした。

「はー死ぬかと思^{おも}たわ……」

サングラスを取った女は、俺より少し年上に見えた。目が大きくて、不覚にも、小太りなりにちよっと可愛い、なんて思ってしまった、それを頭の中から振り払う。

「それで、何の用なんだ？」

「あ、その前に、あたしこ^もんいう者です」

出された名刺には、こう書かれていた。

【秘密結社 富利異盟損 営業課 田ノ中七佳】

「秘密結社……何だ？」

”富利異盟損”って読めます」

「おい……實在の団体パクッて当て字かましただけじゃねーか」

勿体振って秘密結社とか付けてあるから、余計に腹が立つ。それに営業課って何だよ。秘密結社が営業なんてするもんか。

「かましただけちゃうわっ！　ちゃんと意味があんねんで。富を利したい異能者は、盟……仲間にならんと損すんでえって。どやっ！」

「威張るな！　いつか本物に消されるぞ。……まあそれは置いておこう。お前の名前が、田ノ中……ななか？」

「田ノ中七佳。……ま、待ちいや、本名やで！　文句ならシャレで付けた親に言うてえや！」

ふざけた名前に、俺が再び襟へ手を伸ばすと、女は慌てて首をガードした。

田ノ中七佳^{たのなかなのか}って……なのかって何なんだよ。自分の名前を確認してんじゃねえ！　と言いたくなる。どんなネーミングセンスしてんだ。微妙に語呂が良いところにまた腹が立つ。

苛々し過ぎてこめかみが熱くなってきたが、とりあえず手を下ろして用件を聞くことにした。

「普通よりちょっとばかり飛び抜けた能力持ってる人って、才能レベルなら賞賛されるけど、それ以上になると異能や言われてキモがられる。うちの会社はあたしも含めて、そういう者の集まりやねん。」

公園のベンチに座った七佳は、自称秘密結社、富利異盟損について説明した。

「……ってえことは、お前も何か持ってるのか？」

「せや。あたしの足、速かったやろ？　あんなん序の口やで。本気出

したらもつと速い。筋肉組織を一時的に強化した上で脳のリミッターを外し、火事場の馬鹿力以上の力を出す。そういう能力やって、会社で調べてもろた時に言われたわ」

「へえ、道理で小太りのくせに撒けなかったわけだ」

七佳は俺の呟きに即反応し、頬をぷうっと膨らませた。満月みたいな顔だ。

「小太り言うな、ぽっちゃり言えアホ」

「どっちでも示す所の意味は一緒だろうが。で？その富利異盟損とやらは、俺に何の用だと？」

よくぞ聞いてくれたとばかりにニヤニヤした七佳は、馴れ馴れしく隣に座る俺の肩を、ポンポンと叩いた。

「あたしの仕事はスカウトやねん。異能者求むって求人出しても、鼻から牛乳飲めるとか、180度開脚できるとか、そんなんしか来えへん。中国の雑技団レベルならまだ検討の余地はあんねんけどなあ……。」

「鼻から牛乳程度で異能者ぶる奴がいることに驚くな……」

「関西ナメたらあかんで。そのテのアホはわんさかおる。というわけで営業課ができて、今まで関西圏を中心に、埋もれた異能者達を掘り出してスカウトしてきてん。でもうちみたいに異能者を集める所は他にもある。関西だけに留まらずに全国規模で探さんと、他社に潰されてまう。だから営業成績NO.2！のあたしが、手始めに関東へ出張スカウトに来たってわけや」

七佳は”NO.2”のところだけやたらと強調し、自信満々に胸を張った。二の腕が肉厚な分、それなりに胸はあるようだ。

「どこ見とんねんハゲ」

「……ハゲてねえ。そんなことより、何やってる会社か知らねーが、スカウトなら何でコソコソ後を付け回す？」

視線の先を見破られたのが恥ずかしくて、俺は慌てて話を変えた。

「そらこっちが聞きたいわ。何であんた、あんな大勢に付け回されてんの？そんなヤバイ能力なん？言ーとくけど、うちの会社からは

あたししか派遣されてないし、あたしが付けたんはこれが初めてや。」

「どういふことだよ。俺の家の周りをウロついてた奴らは、皆お前みたいにサングラスかけてたぞ。同僚じゃねーのか」

「ちゃんとサングラス見いや。うちの会社は経費削減で、配給されんのは普通のサングラスやけど、あんたを付け回してた奴らはミラーグラスや。えっらい洒落しゃれとんのお、関東の組織は」

サングラスの話題で七佳は一気に不機嫌になった。別に張り合わないくてもいいだろうが。

「付け回してる奴らのことはこっちが聞きてえくらいだ。俺は誰にも能力のこと話してねえのに、何でお前も、ミラーグラスの奴らも知ってるんだよ」

「ああ、それは調べる機械があんねん。異能者は能力を使うと、変わった波長の磁気が出るねん。すかしたミラーグラスがその機械で異能者を探してた時、たまたまあんたが近くで能力使つかたんちゃう？それかあたしみたいにな、そのテのリストを売買してる所で仕入れたか。考えられるんはその2つや」

七佳はさりげなくミラーグラス達を貶けなそうとする。全くもって理解できない対抗心だ。たかだかサングラスごときで……

「……なんや、どんな危険人物か思おもて様子探ってたけど、普通っぽいな。わざわざ付けて損したわ。ほな本題に入るけど、あんた、卒業したらうちの会社に就職せえへん？」

七佳が言ったのは、今までとは少し違った交渉だった。

爆乳キャバ嬢は保治郎

今のご時世、就職難だ。良い大学に行ったところで社員になれる保障なんてどこにもない。高卒で内定くれるとは、かなりの魅力だ。だが……

「社名とスカウトのネーミングセンスが悪過ぎるから嫌だ」

「はっ!? あたしの名前については言い返されへんけど、社名は富利異盟損やで、富利異盟損! めっちゃイケてるやん!」

七佳は心外だと言うように、目を剥いて抗議した。

「イケてねーよ。怪し過ぎるだろうが。どうせ入社早々健康診断と言って、俺の身体を調べるんだろ? お前らもミラーグラスの奴らと一緒に」

「そらちゃんと社員の能力を把握しとかんとあかんから、一応は調べるけど……全然痛くないで。あいつらの組織とはやってることが違うねん」

こいつの言う”痛くない”は、歯医者”痛”かったらやめるんで手を上げて”くらい信用できない。

「だいたい、お前んとこは何やってる会社なんだよ……」

「何って、まあ簡単に言うと、正義の味方やな。……って、ちょっと待ちいや!」

”セイギノミカタ”。聞いた途端に馬鹿らしくなって、俺はベンチから立った。見ず知らずの他人のために、身を粉にして戦い、正体は秘密だから誰にも感謝されない。それが正義の味方だ。んなもんやってるなんて、どうせロクな会社じゃない。

「ちよお! 人の話は最後まで……」

俺の肩を掴んで引き止めた七佳の鼻先に、手の平をかざす。彼女は驚いて息を呑んだが時既に遅し、その目は即座にトロンとして閉じていった。脳に直接作用する眠気に勝てるわけがない。

「俺の細胞は、何人たりとも覗かせねえ……」

丸くて大きな目が閉じきってしまう直前、俺はそう言ってやった。

「まあ！ 巧たくみさんの身体を調べるだなんて……なあんて破廉恥はれんちなあああ！ あうがっ！」

俺の意図する方向とはまるで違う所で興奮しそうになった、電子ひょうしの顎あごを掴んだ。どうやらこうすると、彼女の妄想と興奮は停止するようだ。

「……そういう訳だから、あいつが来たってことは、ここもヤバイかもしれない。新しい住処すまかを探すまで、俺のいない時は客以外中に入れんじゃねえぞ」

「は、はひ……」

電子に3度ほど念を押し、俺は不動産屋を回るために外へ出た。

今日の予約は夕方からだ。まだ十分時間がある。七佳がその辺をウロウロしてるかもしれないから、キャップを深くかぶり、周りを警戒しながら馴染みの不動産屋に入った。

「またか……。いい加減その夜逃げ癖を治せよ」

開口一番、呆れた声を出したのは、不動産屋の店長だ。いかにも肩や背中に龍のタトゥーが入ってそうな風貌のオッサンである。

店長の顔の通り、ここは普通の不動産屋じゃない。ブラック不動産屋と言った方が良さだろう。

仕方がないのだ。俺は高校を卒業するとすぐに実家を出た。組織の奴らは何も知らない家族に接触して、迷惑をかけるかもしれないからだ。だが保証人もいない未成年に、部屋を貸してくれる正規の不動産屋はなかった。何日かホームレス生活をしながら、かなり怪しげな店を回って、やっと保証人なしで貸してくれたのが、ここだ

ったのだ。高校3年間のバイトでコツコツ貯めていた金を、根こそぎ取られたが。

「お前、そのうちブラックリストに載せるぞ」

「はあ、すみません……。でも今回はまだ逃げてないですよ」

ブラック不動産屋にもブラックリストなんてあるんだな。正直このオッサンにブラックリスト云々うんぬんとは言われたくない。

「それで、今回も怪しい組織ってえ奴らが来たのか？」

店長はボールペンで頭をポリポリ掻きながら、かったるそうに言った。

彼にはサングラスの奴らのことは話してある。勿論、シンポテのことは伏せているが。逃げている事情を話していないと、こんなに何度も部屋を紹介してくれるわけがない。

「以前接触したことのある奴が、さつき尋ねて来ました。まだ完全にバレたというわけじゃないと思いますけど、そろそろヤバイかなって……」

「ふんっ、その年で一体どんな危ない山に手え出したんだか。まあいい。逃げる前に部屋を探しに來ただけでも進歩だ。ちよいと日にちがかかるがいいか？近所付き合いなし、風呂屋が近い、徒歩2分圏内で食料と生活必需品が整う、それでいて人気絶不調の部屋、なんて言うお前の条件に合った所を探すのは、結構難しいんだからな」
我ながら無茶な条件だとは思う。だが店長は何だかんだ言いながらも、結局探してくれるのだ。人にはそれぞれ色んな事情があるだろう、と詳しく理由を聞くこともしない。

なるべく早くお願いします、と言って俺は店を出た。電子がちゃんと言われた通りに留守番していてくれると良いが……

雑居ビルに戻ると、夕方から来るはずの予約客、まりさんが来ていた。彼女は前に住んでいた所からの常連だ。逃げた俺を偶然街で見つけて、また利用するようになったのだ。

「やつほー。ちよつと早いけど、来ちゃった」

「お、お客さんなら入れて良いんですね……?」

爆乳流し目ダイナマイツなまりさんの横で、オドオドしながら電子が言った。

丁度良い。ヤンデレ女を紹介したことで、文句が言いたかったのだ。

「電子、お前ちよつと隣の漫画喫茶行つて来い。済んだら連絡する」

「す……済んだらつて……、二人で何をする気ですかああ！ 破

廉恥な……つうがっ」

「破廉恥の話はもういい。さっさと行け」

俺の目が本気で据^すわっているのを見た電子は、コクコクと2回頷いて、尻尾を巻くように飛び出して行った。

「随分手なずけたじゃない。同棲するんだって?」

セクシービームびんびんなまりさん。だが騙されてはいけない。こう見えても元男なのだ。本名は俣治郎^{またじろう}。オカマバーに行くのが嫌で、現在元の性別を隠してキャバ嬢をしている。爆乳は勿論豊胸で、丸みを帯びたボディラインはホルモン注射の賜物^{たまもの}なのだ。下も工事済み。キャバクラの店長は少し疑っているものの、まだ周りに元男だということはバレていないらしい。

「……あのですね、口^{くち}コミする時は人を選んでくださいって、よく言いましたよね? 何なんですか、あの子は」

「ゴメンゴメン。目が合った瞬間に、化け物みたいな殺氣^{まじ}を纏^{まと}ってしがみついて来るもんだからさあ。タクミンなら何とかしてくれると思ったのよ。……できなかったみたいだけど」

「タクミンって言うな、俣治郎」

「やっだあ、その名前を呼ぶなんて、もしかして相当怒っちゃってる?」

他人事だと思つて、態度が軽過ぎる。元が男と分かつてるだけに、ぶん殴りたくて仕方がない。

「もう次の住処すみかを探してもらつてます。見つかったら電子は置いていくんで、あとはよろしくお願いします」

「かわいそー。さっき話したら、アンタに惚れてるみたいだったわよ？ 乾いた独り身だからそんなカリカリするんだわ。人生には潤いが必要よ」

「森の小川のような潤いなら歓迎しますけどね、電子は濁ったアマゾンの河ですよ。人食いワニとピラニア付きの」

身震いをする俺を見て、まりさんは「想像の方向は間違つてないけどさ……」と言つてため息をついた。

言いたいことは言つたので、香水作りに取り掛かる。半分の狭さになつた隣の部屋に移動し、容器に精製水を入れ、まりさんが好きなイランイランのアロマオイルを垂らした。好みの別れる匂いなのだが、催淫作用があるらしい。このエロニューハーフめ、といつか言つてやりたい。

容器に指を差し込み、思い浮かべるのは、色白透明感が売りの若手女優みたいなもち肌のまりさん。髭は脱毛しているが、やはり客に近くで見られると気になるらしい。対象として想像するのは、滑々すべ肌にうっとりするオッサン。まりさんは肉感系を好むオッサンに人気なのだ。

「私もちよくちよく様子見に来るから、いきなり電子ちゃんを置いて行くのは考え直して？ また殺気を纏まとつて縋すがり付かれたら、呪い殺されそうなもの」

帰り際、まりさんはそう言った。だからって何で俺が面倒見なくちゃいけないんだ、と不満に思いつつも、少し複雑な心境になった。それは、普通に生きてきたのに、普通の人のようにいられないという、同じ境遇だからなのかもしれない。

漫画喫茶にいるはずの電子に電話しようとした時、ふと思い出でした。あいつは、自分のシンポテの話を最後まで聞いたのは、俺し

かいないと言っていた。

友達、いなかったのかな。シンポテを自覚してからの俺みたいに。

鼻で豆鉄砲

あれから俺は、電子ひょうこに対する態度を、少しだけ軟化させた。まあ同情の類たぐいなのだが、すぐに追い出される気配がないと悟った電子は、心情的に余裕ができたらしい。そこから調子に乗るようなことも、やたら滅多ら興奮してシンポテが暴走することもなくなった。青白い幽霊顔はそのままだが、下手に刺激さえしなければ、いたって普通のルームメイトだ。

「……か？……聞いてますかあ？巧さんたくみ」

「え？……ああ、悪い。何の話だったっけ？」

飯を食いながらバイトの愚痴ぐちを垂れていた本人に、上の空を見咎みとがめられ、俺は我に返った。

「あのですね、店長が昨日、普通のメイド喫茶をオープンさせたんです。しかも隣に。これはヤンデレメイド喫茶、存亡の危機ですよ。マニアックなヤンデレメイドが、ぶりぶりメイドに敵かなうわけないです。同僚も皆そう言って、戦々恐々せんせんきょうきょうなんです……。ヤンデレを卒業する前に職を失うわけにはいきません。こうなったら先手必勝、ワタクシのシンポテで脅すべきでしょうか」

電子はそう言って、カフェオレを啜すすった。組み合わせた飯は和風おろしハンバーグ弁当。彼女にとってカフェオレとは、どんな味のものでもマルチで合わせられる飲み物らしい。他のルールは俺に合わせても、これだけは譲れないと言う。世の中には色んな味覚の人間がいるものだ。

「……別にほっときや良いじゃねーか。お前んとこに来る常連客は、特殊な趣味の奴らだろ？すぐに普通のメイド喫茶へ乗り換えるような興味本位の客なんぞ、引き止めるだけ馬鹿らしい。デブ専やブス専の店だって成り立ってんだ。ヤンデレはヤンデレらしくしてりやあ良い」

「まあ……巧さんからヤンデレを肯定する言葉が聞けるなんて……」

最近”店が潰れるう！”って、本当に病^やんできちゃった同僚達に今の話を聞かせ：」

「頼むから俺の話はするな。ヤンデレ女と関わるのはお前一人でいっばいいっばいだ」

俺は電子の話を遮って止めた。シンポテもないただのヤンデレにまで構うほどお人よしじゃねえ。

とまあ、俺達の共同生活はこんな感じで1週間が過ぎた。

今日は売れないベランホストのヨシオさんが来る。ここを紹介して欲しいという友達を、一緒に連れてくるらしい。

電子の一件以来、俺はドアに”一見さんお断り！”と書いたかまぼこ板を付け加えた。口コミを聞いたとしても、紹介した常連客と一緒に付いて来ないと門前払いをする、ということだ。

自分で言うのも何だが、こんな怪しい香水屋を利用する客で、まともな性格の人間を期待するわけにはいかない。今後妙な客は、紹介した奴にきっちり持って帰ってもらうつもりだ。

「巧くーん、来たぞお」

時間ぴったりにヨシオさんがドアの前で呼びかけた。一緒に来る新客は、富恵ちゃんではない。ある意味電子のライバルだろう。ヨシオさんは最近、ヤンデレメイド喫茶の隣に出来た、普通のメイド喫茶にお気に入りの子を見つけたらしく、その子に頼まれたと聞いている。

「はい、どうぞ」

俺が返事をし、ヨシオさんの後に続いて入って来たのは……

「お前っ……田^{たの}中^{なか}七^{なな}佳^け！」

「あ、どもー。覚えてたんや。おっ久あ」

悪びれもせず片手を上げてヘラヘラ笑うその女は、4年前に俺をスカウトしようとした七佳だった。サングラスはせず、フリフリのメイド服にツインテールだ。だがぶよぶよした体と大きな丸い目、それに関西弁は全く変わっていない。

「な、何だ巧君、七佳ちゃんと知り合いだったのか？」

俺の陰悪な雰囲気、ヨシオさんが少々驚きながら尋ねたが、相手にしてる場合じゃないからとりあえず無視。

「1週間前、新聞屋に成り済まして来ただろ。下手くそな標準語使いやがって……」

「あ！ やっぱり居留守やってんな？ 標準語使たら拒否反応出てさぶいぼ立ちまくりやってんでえ。頑張ったのに、いけずせんとつてえや」

んなこと知るか！ くつそーやられた。偶然なのか仕組んだのかは分からないが、メイド喫茶に潜入して、この常連のヨシオさんに取り入ったのか……。連れて来た本人は、さっきから「メイド言葉でない七佳ちゃんも良いな……」とか、「方言萌え〜」とかぶつぶつ言ってるやがる。

「あのお、この年甲斐ないロリータメイドが、巧さんの身体を調べるって言った、破廉恥サングラスなんですかあああ？」

「何やとコラ……」

様子を窺っていた電子の気配が峙ったその時、七佳のポケットがキイイイー——！ とと耳障りな音を立てた。

「お？」

電子を睨みつけるのをやめ、ヒラヒラの黒いミニスカートから七佳が取り出したのは、手の平サイズの丸い機械だった。

「はえー、こないだと同じ反応やん。この死人みたいな姉ちゃんも異能者なんか。ラッキー」

機械を確認しながらも、しっかりさっきのことを言い返すのは忘れていない。

泣き付いて来る電子の顔を手で押し返しながら、俺は考えた。前にこいつが訪ねて来た時、丁度電子が興奮して気配がでかくなっていた。それをあの機械でキャッチしたのか。

「何年追いついて、ひつこいなんで誤解やで。4年前あんたに逃げ

られてから、営業成績No.2のプライドがえらい傷付けられてやな、すぐ会社に泣き帰ってん。またこっち来たんは2週間前や。

ちゃんとウロついてる奴らのサングラス見言^ゆいたやろ」

「そんなこたあどーだって良い。お前がここに来た目的は、どうせ香水じゃねーんだろ？」

まずいぞ。電子のシンポテまでバレてしまった。最悪七佳の隙について、ヨシオさん共々睡魔の匂いで眠らせてから逃げるか、電子を怨霊化させて追い払うか……。あまり派手なことをすれば、他の組織の奴らまで引き寄せかねない。どうする？ どうするんだ、俺！

「まあまあ落ち着きいや。確かにあたしはまたスカウトに来たんやけど、無理矢理どうこうする気はないねん。あんた前は、話最後まで聞かずに逃げたやろ？ うちの会社は何やってるんか、ちゃんと聞いてから来る来^けえへんを決めてえな。そのためにまた出張してんから」

「……本当に判断はこっちがして良いんだろうな」

「ほんまやって」

まだ半信半疑だが、話を聞くだけなら……と思った時、蚊帳^{かや}の外だったヨシオさんと目が合った。……忘れてた。

「あ、ヨッシー、ゴメンなあ騙^かしたみたいで」

俺の視線で七佳もヨシオさんの存在を思い出したようだ。

「こっから先は、人間技超えた特技のある人しか聞かせられへんねん。ちよつと外出とつてくれる？」

「特技……？」

ああ、何でそういう言い方をするかな。普通に関係者以外聞かせないって言やあ良いのに。ヨシオさん首捻^{ひね}ってるぞ。

「せや、ヨッシーも凄い特技があるなら聞いてもええけど」

七佳め……電子みたいにヨシオさんもシンポテがあったらラッキー
とか思ってたそうだな。

「あるぞ。俺も特技が」

ヨシオさんは腕組みをして、自信満々に答えた。

「え？　どんな？」

ヨシオさんが自信満々の時はロクなことがないのだが、それを知らないのか、七佳は目を輝かせた。

「うむ。鼻で豆鉄砲を撃てる」

……やっぱりそんなもんか。いや分かっていたが……

「え……いやあそれ、人間技超えた特技やなくて、宴会芸ちゃうの？」

顔を引き攣らせた七佳を見て、ざまあみろと心の中でほくそ笑む。

「豆でなくパチンコ玉を使えば、ベニヤ板くらいなら楽に貫通するが、人間技を超えてないのか？」

「ええっ!？」

「うそやっ!？」

「凄い!」

想像以上にぶっ飛んだ言葉を聞き、3人同時にヨシオさんを凝視した。

「ほ、ほなちよっとやってみてえや！　測定するから」

「今パチンコ玉を持っていないんだ」

「別に板を撃ち抜かんでもええねん。要は力を使った時に特殊な磁気が出るかどうかやから。そこにあるカキピーのピーナッツでええわ。」

そう言って興奮気味に七佳が指差したのは、机に置きっぱなしだった電子のおやつ。

「えええ……ワタクシのカキピーを鼻に……?」

「1個くらいええやん。ほら、出し」

様々な電子からピーナッツを1粒受け取ったヨシオさんは、それを

片方の鼻に詰め、もう片方の鼻の穴を人差し指で押し潰した。

「はい、どうぞ!」

「すううう……」

七佳の合図の後、ヨシオさんが口から慎重に、深く深く息を吸う。彼の胸、というか鎖骨下から臍へその上辺りまでが異常に膨らんだ。同時に七佳の持つ機械が小さく鳴りだす。

「ふんっ!!」

胸の膨らみが一気に戻り、壁に向かって目で追えない程のスピードで放たれるピーナッツ! パヂツという音と、キイイイーという音が重なった! 壁の下にピーナッツの姿はない。あのスピードなら砕け散ったのだろう。

「……いかなかな?」

ニヤリと笑ったヨシオさんの鼻からは、ちょっぴり血が垂れていた。……鼻の粘膜は人並みらしい。

「凄いやんヨッシー! ホストなんか辞めて、富利異盟ふりいめいそん損きに来いや!」

「ほう? あの三角形に目玉のマークの……」

「いや、それとは全く違いますから」

俺は激しく誤解したヨシオさんに訂正を入れた。

いい年した大人のヒーローごっこ

異能者、俺の言うところのシンポテを持つ人間を集めている組織は、全国各地に点在するが、運営方針で大きく分けると、2種類になるらしい。

片方は研究者達を主導とするもの。俺を付け回していたミラークラス達もこっちの部類で、関東で最大の組織、CBTと言う。彼らはシンポテを持つ人間の、突然変異した細胞や遺伝子を研究し、新薬の開発を行っている。だが裏では、集めた人間をモルモットのように扱い、開発した新薬を販売し得た資金で、更に何かを研究していると言う噂がある。

そしてもう片方は、シンポテを持つ者のみで作られた組織。富利異盟損いめいそんはこちら側の会社だ。表の活動は何でも屋。だが本来は、CBT等の研究者が作った組織に狙われた同族達を保護する、有志の団体らしい。

「……前にお前が」正義の味方」つつつてたが……あの時は俺を保護するつもりだったって言うのか？」

「うーん、保護せんでも大丈夫そうやから、即戦力として誘いたかってん。関西にもこっちのCBTみたいな組織があるからなあ。對抗するためのヘッドハンティングって感じや。あんた、自分が科学者達にどんな評価されてるか知ってる？」

「……知らね」

投げやりなのかに否定すると、七佳は勿体振るように、コホンツと咳ばらいをした。

「特殊な匂いで人を惑わすだけでなく、同族も引き寄せる体質”らしいわ」

「はあ？」

一瞬ピンんと来なかったが、七佳の視線を辿ると何となく理解できた。

「怪しい香水屋なんてお客選びそうな狭い店に、2人も異能者の客が寄って来たなあ。この分やと他のお客も期待できそうや」

ウッシッシッ、と悪そうに笑う七佳を、俺は生温い目なまぬるで見た。

「……俺はゴキブリはいはいかよ」

「巧たくみさあん、ワタクシ達はゴキなんですか……」

電子に即文句を言われ、彼女とヨシオさんを無意識にゴキブリ扱いしていたと気付く。隣で「ほう、ユニークな例えだ」と頷うなずいているヨシオさんは心が広い。

「ンハハハッ、あんたおもしろいな。とりあえず、ミラーグラスとあたしらは、全く主旨の違う団体やねん。あんなキツショイのんと一緒にしたあかん。ある時は迷い猫を搜索する探偵、またある時は激安引っ越し業者。だがその正体は……、人権戦隊！ 富利異盟損！」

「おいっ！ 戦隊って何だよ！ 秘密結社はどこ行っただ！？」

腰に手を当て、声高々に言った七佳は、俺に突っ込まれて気分を害したのか、ムッと下唇を出した。

「若いのにノリ悪いなあ。秘密結社を本部とする戦隊ってことや。因みにあたしはピンクがええわ」

「んなこと聞いてねーし」

何だろう、真面目に聞いてやって損した気分になるこの感じ。富利異盟損の奴らは皆こんなふざけた性格なのか？

「今ならブルーかグリーン、どっちか選ばしたるわ」

うんざりしている横で、七佳は勝手に話を進めていく。

「……一応聞くが、ブルーとグリーンしかないってことは、レッドは決まってるのか？」

「まだや。今あたしが思いついた戦隊やからな。リーダーはよく考えて決めんとあかんから、先に脇から固めよう思てんおも」

こいつ、思いつきを本気で推し進めようとしてるな。シンポテの事情を知っている会社就職、というのは魅力的ではあるが、社員がぶっ飛びすぎている。これが営業成績NO.2だと？ NO.1は一体どんな奴なんだ……

「……なんや、レッドやりたいんか？」

「いや、それ以前に人権戦隊・富利異盟損なんぞ、入りたくない」

「またネーミングセンスが気に入らんのか？」

「そういう問題じゃねえ！」

喚く俺を無視し、七佳は電子をイエロー、ヨシオさんをグリーンに任命した。

「何でワタクシはイエローなんですかああ？ ヒロインイコールピンクですよ。ワタクシはこのヒロインなのに……」

「何言ーてんねん。あんたのダーリンは志牙巧しがやろ。あいつは残りもんでブルーになってもーてんで？ ブルーの相手はたいがいイエローやん」

「あ、そっか」

「ちよっと待て！ ダーリンって何だよ！？ ってか勝手に俺を戦隊に入れてんじゃねえ！ ヨシオさんも何か言ってくださいよ。い年してヒーローごっこやらされるんですよ？」

俺は最後の砦とばかりに最年長のヨシオさんの肩を揺する。すると彼は泣きそうな俺を見てフツと笑った。

「巧君、俺は43年間、宴会芸では済まされない自分の能力を、持て余すだけだった。オヤジ狩りのクソ餓鬼どもを蹴散らす時くらいしか使うことのない俺の能力。ずっと、持って生まれたことに意味が欲しかったのだ。富利異盟損なら、俺の能力を理解し、使いこなしてくれると思う。」

「……富利異盟損もCBTと同じかもしれませんよ。七佳の話を信じるんですか？」

「簡単に周りを信用できない君の気持ちは分かる。妙な奴らに付きまとわれていたら、人間不信にもなるだろう。だが、人は独りでは生きていけない。今まで独りぼっちだった俺や電子ちゃんは、偶然なのか必然なのか、こうやって君の存在に引き寄せられ、集まった。何かの縁だとは思わんか？ もう一人レッドも探して、CBTのような不埒な組織に怯える異能者達を救うことで、俺達の存在意義が見

えるような気がするんだ。」

存在意義……ちえっ、余計な時だけまともになるんだな。ヨシオさんはポカポカ温かい目で、一緒においでよ♪と言わんばかりに微笑んでいる。やめろ！ そんな目で見えるんじゃないっ！

「巧さあん、仲間が増えるんですよ？」

イエローに不満だった電子まで、いつの間にかやる気のようにだ。

「……、やりたいなら……勝手に行けよ。俺は知らない奴のために影で戦うような自己満足はいらねえ」

いたたまれなくなって、俺は皆に背を向けた。少し……ほんの少しだけ心が揺れるが、どっちにする？ と聞かれれば、気が進まないのだ。

今まで俺は、誰に助けを求めることもなく、独りで何とかしてきた。一瞬の気の迷いで電子は置いてやっているが、他人を助けるのを職業にするなんてガラじゃない。

「むむ……富利異盟損って名前がそんな嫌なんやったらしゃーない。変えたるわ」

「だからそういう問題じゃねえ！」

七佳め、シリアスな雰囲気を邪魔しやがって……

「あ、それならあ、シンポテを使ったら良いですよ」

電子はひらめいたように、拳をポンツと打った。

「シンポテ？何や新じゃがか？ププツ……」

七佳は可笑しそうに口を押さえた。絶対馬鹿にしている。略すとふざけたイメージになることは、俺自身百も承知だ。あえて緊張感のない言葉を使うのがこだわりなのだ。

「芋じゃないですよ。シン何とか・ポテほにやらの略らしいです。特異な潜在能力？ だったかな。巧さんは特殊能力とか異能者とか、ありきたりなのが嫌なんですってえ。こだわりの言葉を使っ
てあげたら、やらずにはいられなくなるんじゃないですかあ？」

「特異な潜在能力……singularity potentialか。異能者と言われるよりは気分が良いな。略すと斬新かつキュ

トだ」

「芋やけどな……フフフ……」

「本人を前にする話じゃねーだろうが。特に七佳、お前馬鹿にしてるだろ」

チラリと睨み付ければ、温かい目で見つめ返す3人。クラスメイト達に「学校おいでよ、楽しいよ」と家まで迎えに来られた登校拒否児童の気分だ。ああ痒い……背中がムズムズするっ！

「よっしゃ決めた！ 今から人権戦隊・シンポテレンジャーに変更や。自分のこだわってる言葉が入ってんねんやったら、文句ないやろ？」

「いやだから、ネーミングの問題じゃ……」

まだ抵抗する俺の肩を、ヨシオさんがポンポン、と叩いて止めた。

「君は背中を無理矢理にでも押されなければ動かない性格だ。そうだろう？ 石橋を叩いて信号と左右を確認して、皆が安全に渡るのを見てからでないと、一步を踏み出さない。だがそれでは君が渡る頃には信号が変わってしまつて、一人だけ車にはねられてしまうぞ。」

「例えが長すぎて、よく分かりません……」

「要は、見返りや損得を考えず、何かを始めてみるべきだということだ。嫌だと言つても、本当は迷っているのだろう？ やるかやらないか迷った時はやった方が、反省はしても後悔はしない。俺の経験上、52%の確率でそうなる」

「……せつかく良いことというなあと思つたのに、最後の意味不明な確率で台なしです」

一瞬男惚れするかと思つたが、またどこから計算したのか分からない数字を出してきた。しかも五分五分という、どっちにも転べる確率を、自信満々に言うから余計にムカつく。

「ハッハッハッ、天邪鬼君は無理に素直にならなくていいぞ。今の返事で、君がシンポテレンジャーに入る気になつたということは分かつたからな」

俺は何も言い返さなかった。

年の功なのか、ヨシオさんには見抜かれてしまったようだ。何も隠す必要のない仲間がいても良いかな、なんて少し思ってしまったこと。そして、それを口に出すのが小っ恥ばずかしくてできないことを……

妖怪管理人

本気か冗談か、七佳ななかの思い付きで組むことになった、人権戦隊・シンポテレンジャー。目下もっかの任務はレッド探しである。

が、その前にブラック不動産屋から、新しい住処すみかの候補が見付かったとの連絡が入った。

「どんなところなんやろ。ワクワクするわあ」

「……おい七佳、俺の住処だぞ。ルームメイトの電子はまだしも、何でお前がついて来るんだよ」

「何言ゆーてんねん。あんた戦隊もん見たことないんか？皆一緒に住むのが基本やろ。敵が現れた時、悠長に電話して待ち合わせてるところなんか見たことあるか？」

「マジかよ……」

俺達は今、ブラック不動産屋の店長を先頭に、ぞろぞろと連れ立って歩いている。店長に「激安だが四畳半の部屋と、まあまあ安くて2DKだが日いわく付きのアパート、どっちが良いか？」と聞かれ、無理矢理不動産屋までついてきた七佳が、日いわく付き2DKを選んだのだ。そこへ向かっている途中なのである。成り行きでヨシオさんもしっかり一緒に来ている。

ヤンデレメイド、いい年したロリメイド、オッサンホストを連れていると思われるのか、ブラック店長は俺達から5mほど距離を開けて、足早に歩いていたが、やがて一軒のアパートの前で振り返った。

「着いたぞ。」

昭和に建てられた感丸出しのアパートの入口には、”鳥槻荘”と書かれていた。

「……あの、店長。あれはそのまま読めば良いんですかね……」

「捻ひねらず素直に読め。オーナー兼管理人の名前だ」

声に出す気にならず、代わりに俺はため息をついた。

「なにになに……鳥槻荘とりつきでうやて？ 取り憑つかれそんな名前やな。うゝわキッショー！」

せっかく探してくれたブラック店長の前で、七佳はでっかくはつきり言いやがった。全くもってデリカシーのない女だ。メイドの風上にも置けやしねえ。

「日いく付きとはこの雰囲気のことなのか。実際出る確率は28%といったところだな」

「いや、100%出る」

ヨシオさんの過程不明な数字を、ブラック店長はバツサリ否定した。

「……巧まがさあん、何か禍々まがしい気配を感じますう……」

「お前、そういう気配が分かるのか？」

俺の背中に隠れ、恐る恐るアパートの方を窺うかがう電子。端はたから見れば、俺が彼女に取り憑つかれているように思うかもしれない。

「ワタクシ、自分の気配を調節できる分、他の気配にも敏感なんですよお。特に……こおのお世おにいてはいけなあい者達のおおおっ……あがっ！」

「こんな外で興奮すんじゃねえ。CBTに感づかれたら引っ越す意味がなくなるだろーが」

電子の顎あごを掴んで止め、俺達はまずオーナー兼管理人の鳥槻さんに会うべく、管理人室まで行くことになった。

「こ……ここから禍々まがしい気配が吹き出ていますう……」
電子が反応したのは、俺達がまさに入ろうとしていた管理人室だった。

「日く付きなのは部屋じゃないんですか？」

ブラック店長に尋ねると、彼は首を横に振った。

「いや、管理人が日く付きなんだ」

「えゝ……もしかして、名前の通り、取り憑かれてるとか……？」

「会えば分かる」

皆まで説明せずにドアをノックしたブラック店長の顔は、若干強張こわばっていた。

「あらあん、だあれえ？」

ドアが開き、気色のすこぶる悪い声が聞こえた瞬間、目に入ったのは、やたらとゴツゴツしたガタイの良い……オカマだった。

「ひよおおっ、禍々しい気配はこの人から感じますうう」

「むむむ、このような面妖な生物は始めて見たぞ……」

電子とヨシオさんが小声で言った意見には、俺も激しく同意する。プロレスラーが女装したとは思えない出で立ち、野太い声に分厚い化粧、そして昭和のアイドルのような髪型。幽霊以上におぞましい。

「……俺には彼……いや彼女の周りに薄っすら紫の靄もやが見えるような気がするんだが……錯覚か？」

「いーえ、ワタクシにも見えますう。妖怪の類たぐいでしうか……」

「じゃあお前のトモダチだろ」

「酷いですう。ヤンデレは妖怪じゃありません」

電子はここぞとばかりに俺の腰にしがみつく。さっきまで元気だった七佳にいたっては、硬直したまま動かない。

「やっだあ、久しぶりじゃなあい！ 最近ちつとも入居者紹介してくれないんだからあ」

妖怪オカマは、割れた青い顎あごに拳を当てつつこちらに突進して来た。咄嗟とっさにブラック店長が、ショックで動けない俺達の前に踊り出る！そして妖怪の腹に向かって、豪快なミドルキックを食らわせた！……だが妖怪は吹っ飛ぶどころかケロッとしている。逆にブラック店長の方が後ろに多々良たたらを踏んだ。

キイイイイ——ン……

「七佳、今の音…」

「シィッ！」

「いやでもシンポ…」

「それ以上言わんというて」

こいつ、なかったことにするつもりだな……。同族を保護するとか言っても、人は選ぶのかよ。まあこんな妖怪みてえなのと関わりたくない気持ちは分かるが。

「……入居者を紹介しに来てやったが、逃げても知らんぞ」

「あらホント。やつほー、ここの管理人の鳥槻よお♪」

軽いノリの喋り方は、どこかで聞いたことがあるような気がするが、とりあえずそれは置いておこう。

「……ええと、2DKの部屋を見せて欲し……。いん、です、け……。ど……」

俺が代表して妖怪もとい管理人の鳥槻さんに話しかけると、何故か上から下までジロジロ見られた。

「あのう……」

「可愛いじゃなあいつ！」

「は？」

「あなた私の好みだわ。ねー、安くするからここに住みなさいよ」野太い声でずいずい迫られると全身に鳥肌が立ち、気付いたら節くれだった男前な手で、肩をガツシリ掴まれていた。

「ワタクシの巧さんに……。なあにいまするんですかああああっ！」

横から電子が乗り出した。髪が少し揺らめいている。気配が急激に膨れ上がり、七佳の測定機もキンキン鳴りだした。

「うわ怖っ！　こらあかんわ。ヨッシー下がろう」

「うむ……。妖怪に立ち向かえるのは怨霊しかないない」

七佳とヨシオさんはそう言ってちゃっかり避難。鳥槻さんに肩を掴まれた俺は動けず、怨霊化した電子の気配をモロに浴びて偏頭痛がした。

「……わああ、何この子。ゾクゾクしちゃう」

電子の方を向いた鳥槻さんはやっと俺の手を離した。いつの間にか電子の背中で黒いものがズゴゴゴ……と唸っている……ような気がする。対する鳥槻さんからも紫の靄もやが出て、お互い牽制し合っている……ような気がする。もうどうでもいい。吐き気がしてきた。

「ちよつと！ 廊下が禍々しくって通れないんだけどっ！」

不意に誰かの声が聞こえた。

「あ、まりさあん」

「あら、お帰り〜」

同時に電子と鳥槻さんの憑き物合戦が止み、俺はヘナヘナとその場に座り込んだ。

「大丈夫ですかあ？ 巧さん」

「……誰のせいだと思ってんだ。大人しくしてりゃあ、シンポテで妖怪を眠らせるなり何なりできたってのに」

「だってえ、巧さんの貞操の危機だと思っただんですう」

口を尖らせる電子の頭をを軽く叩はたき、横を見上げた。そこには真っ赤なライダースーツを着込んだ爆乳ニューハーフの姿があった。金髪とのコントラストがえげつない。

「……はあ、助かりました。まりさん」

「何だ、タクミンだったの。やっほー」

「タクミン言うな、俣治郎……」

この軽い言い回しはさっき聞いたような気が……だが今は頭が上手く回らない。

「今日はまた大勢で行動してるのねえ。めっずらしい」

まりさんは初対面の七佳とヨシオさんを見回した。

「……この面子めんつで、戦隊ごっこをやることになったんですよ」

「ブフッ、何その楽しそうな遊び。タクミンそんなキャラじゃなかったでしょ」

「……のはずなんですけどね、色々あって、これから共同生活をする部屋を見に来たんです。」

「えーっ！ 本格的じゃなあい！ 大人のごっこ遊びはやっぱ徹底的

にやらなきやね。ここに引越すの？」

キャピキャピ言うたびに爆乳が揺れる。シリコンだと分かっている、目のやり場に困るからやめて欲しい。

「ネーチャン、ネーチャン。遊びちゃうねん、ほんまやねん。」
富利異盟損の社員としてプライドでもあるのか、七佳が”遊び”部分に反応した。

「うんうん、本気にならなきや面白くないものね」

「いや本気の遊びやなくて……はあ、もうええわ。ネーチャンはこの住人なん？」

「そーよ。ここは兄貴の経営するアパートなの。」

「ええっ!？」

驚いたことに、妖怪とまりさんは兄弟だった。そういえば頭の軽そうなおネエ口調が似ている。

「兄貴じゃなくてお姉様って呼びなさいよ」

「嫌よ。女になり切れてないくせに」

「仕方ないでしょ。アンタはママ似だから良いけど、私はパパ似なんだから、そう簡単にはいかないの」

「努力が足りないだけよ。下を工事して、ホルモン注射打てば、それなりになれるわ」

「サイボーグみたいで気持ち悪い」

「今のアンタに言われたくないわっ!この妖怪ぬりかべっ!」

オカマとニューハーフは兄弟喧嘩を始めた。内容はいたってどうでも良い。だがぬりかべという例えは的を得ているかもしれない。さつきブラック店長の蹴りをまともに受けても、鳥槻さんはびくともしなかったからな。七佳の測定機によると、何らかのシンポテのようだが。

俺、CBTの評価通り、本当に同族を引き付けているのだろうか……

妖怪管理人（後書き）

拍手に「しんぽてえ!？」の画像をアップしました。興味のある方はどうぞ。

そろそろ芽生える仲間意識

管理人の鳥槻さんは、まりさん（鳥槻俣治郎）の兄で、寛太郎（かんたろう）という名前らしい。周りにはカンナと呼ぶことを強制している。

寛太……カンナさんは一先ず俺達（ひとまず）を管理人室の中に入れ、お茶を出してくれた。ブラック店長がお気に入りなのか、しきりに近付こうとしてはパンチやキックを食らっている。だがカンナさんは強かった。やられてもやられても、顔色一つ変えない。食らうたびに七佳（な）のポケットに入っている測定機が反応している。紫の妖気には反応していなかったから、多分あの禍々（まがまが）しい気配はシンポテではなく、素で出しているのだろう。しかも電子と張り合っていた。

「……電子、お前形無しだな。」

「むっ、あれは本気出してないんです。今まで組織の人を追い払うのに、一回だけフルパワーを出したことがありますけど、その人が持ってた七佳さんの測定機みたいなやつ、煙噴いて壊れましたから。妖怪の気配とワタクシのシンポテと一緒にしないでください」

「そ、そうか……」

一方、七佳が興味を持ったのは、まりさんの方だった。カンナさんの弟なら、68%の確率で何らかのシンポテを持っているんじゃないか、とヨシオさんが予想したらしい。

「秘密結社・富利異盟（ふりいめいそん）損？」

名刺を渡されたまりさんは、首を傾（かし）げた。

「せや。兄貴の方がシンポテ持ってるみたいやったから、あんたも何かあるんとちゃう？」

「シンポテ……？」

「新じゃがのことちゃうで。特異な潜在能力のことや。巧（たくみ）がどうしても特殊能力って言うのが嫌やってうるさいから、合わせたってえな。」

「タクミン……可愛いとこあったのねえ。ププッ」

まりさんは俺をチラリと見て嘖き出した。七佳の奴、嫌な言い方しやがる。だが実際こだわってるから釈明もできやしねえ。客の中で一番長い付き合いのまりさんは、以前から俺のことを、生意気な餓鬼と評している。きっと良いからかいのネタができたとも思っているのだろう。

「で、どうなん？ 持ってるの？」

「……兄貴のがバレたんなら白状するしかないわね。私も同じ能……フツ、シンポテを持ってるわ」

「あの蹴り食らっても平気なやつ？」

「そうよ。皮膚と筋肉を部分的に硬化させるの。人間盾みたいなもののね」

聞いた途端、七佳の目が輝いた。

「それええな！ 攻撃一本槍のあたしとヨッシーに、脅しの電子、まやかしの巧ってメンバーやと、戦隊的なバランス悪いから、防御系が欲しいと思っててん。」

何だか七佳の頭の中が一瞬読めた気がする。絶対RPGのパーティ組み合わせてるような気分で考えてるぞ。ってか俺はまやかしなんだ。まあ、ブルーだから位置的にはそんなものか。

「へえ、私も戦隊ごっこに入れてくれるの？」

「ごっこちゃうし。ほんまに悪の組織と戦うねん。今ならリーダーのレッドが空いてるで。その真っ赤っかなライダースーツ、めっちゃイケてるやん。レッドやってえな。歩合ぶあいやけど、富利異盟損からちよっぴりお給料も出るし」

七佳はまりさんの手をガシッと掴んで頼み込んだ。

給料出るのか。一応会社みてえだから、出てもおかしくはないが……歩合って何の歩合だろう。CBTの奴一人倒したらいくらとか？ いや、”ちよっぴり”と言うからにはあまり期待しない方が良さそうだ。確か表向きは何でも屋って聞いたしな。

「レッドって、まさに私向きだわ。このスーツの色、気に入ってるのに、軽薄で馬鹿っぽいって皆言うのよ。イケてるなんて言われ

「ちゃ、やるしかないじゃない」

「やったあ！　後はここを拠点にしたら完璧やな。管理人があんだけ強かったら、CBTもそうそう手は出されへんし。これであいつに目に物見してやる！」

「おい、あいつって誰だ？」

最後に言った言葉が引かかって、俺は喜ぶ七佳を止めた。俺達の敵は組織だ。なのに七佳は”あいつ”と個人を指した。俺達に話していない目的があるのだろうか。

「え……、ああ、いや……そのう」

しまった、という顔をする彼女はますます怪しい。

「……あいつって、誰だ？　戦隊組むのは、CBTみてえな組織を潰して、同族を保護するためだと思ってたんだがな」
皆の視線が七佳に集まる。誤魔化し切れないと悟ったのか、彼女は両手を上げて降参した。

「組織と戦うのも、同族を保護すんのもほんまや。でもそれは、別に仲間を集めてやらなあかんもんちゃうねん。」

「じゃあ何だって戦隊作っただよ」

「会社っていうもんは、人が増えれば派閥もできる。富利異盟損もそれは同じや。でもここしばらくで、営業成績NO.1が作った派閥に皆入ってしもてん。NO.2のあたしは……独りやねん」

七佳は悔しそうに俯いて、下唇を噛んだ。

「他の営業の奴と組まないのか？」

「営業は2人しかおらん」

「おい……それはNO.2とは言わねーだろうが」
イラッとした俺の突っ込みにも、七佳は自嘲するように鼻を鳴らして笑っただけだった。

クソッ、調子狂うな。さっきまでみたいにあいつ飛んだセリフで返してこないと、やりにくくて仕方ない。

「……はあ……。あいつってえのは、もう一人の営業のことなんだな。仲間を作って、そいつを見返してやりたいと？」

「うん……。巧がシンポテ持ってるもんを引き寄せるってデータ見た時、これで仲間がいっぱい作れるって思ってた。だって、隠れる能力者を探すなんて、そんな簡単に出来るわけない。測定機持ち歩いて偶然を待ってたら、時間がかかり過ぎる」

「……馬鹿らしくなってきたぜ……」

俺は呆れてテーブルに突っ伏した。皆黙ったまま、何も言わない。

「あ、でもなっ！ ただ見返したいだけで戦隊作っただんちゃうねん！ あんたに追っ払われた4年前は単なるスカウトやったけど、最近事情が変わってん。N.O. 1の派閥から、行方不明者がポツポツ出始めて……。社長にそれ報告しても、N.O. 1一人が影響力持ち過ぎてあんま強言^{つよ}われへん。巧のシンポテの副産物で、あたしの派閥を増やして、2大勢力っぽくなったら……」

「社長も調査に乗り出せるって？」

「せや。関西はあいつが幅利^きかしてて、新たな仲間作るん難しいから、また関東出張さしてって、自分から社長に申請したんよ。そんなあんたの同族を引き寄せるってデータ見て、これや！ と思ってん。でもいざ乗り込んだところで、巧は絶対一人じゃあたしに付いて来^こんやろ？ 戦隊作ったら、皆来るからあんたも来^きいやって誘いやすくなるし、最低限戦隊に要る人数集めて、ブルーっていう役割を決めてもーたら、後で逃げにくくなるかも……。なんて……。思いました……。はい、すいません」

七佳は段々縮こまって、最後には椅子の上に正座した。

行方不明者^{ひとも}どうこうは一先ず置いて、要は七佳の派閥を作るために俺を使いたくて、動きそうにない俺を釣るために、まず電子やヨシオさんを誘った、というわけだ。

「……気に入らねえ」

「はい、ですよーねー。関西の会社の事情なんて、知らんがなって感じですよー。そうなるって分かってたから隠しててん」

投げやりな態度で開き直った七佳は、頬を真ん丸に膨らませて、プイツと横を向いた。

「拗^すねてんじゃねーよ」

「だって……気に入らんねんやろ？ 会社の事情に巻き込まれたないんやろ？ あんた、ややこしいこと嫌いそうやもん」

「馬鹿、そこじゃねえ。事情を隠したままいようとしたのが気に入らねえんだ。お前の仲間に対する信用ってのは、その程度なのかよ。ずっとコソコソ暮らして来た俺は、何も隠す必要のない仲間が出来ると思ったから、シンポテレンジャーに入ったんだぞ。ややこしいことは嫌いだがな、お前の仲間になった時点で、既に事態はややこしいんだ。多少の覚悟は出来てる」

すると七佳は窺^{うかが}うように恐る恐る俺を見た。

「……ほ、ほんまに？ シンポテレンジャー続行してくれるん？」

「仲間は俺だけじゃねえだろ。俺を誘うダシにされた他の奴らにもちゃんと聞け」

「み、皆は……？」

七佳の視線を受け、最初に口を開いたのはヨシオさんだった。

「俺は元より七佳ちゃんのファンなんだ。それに富利異盟損に入れば、俺のシンポテが有効活用されることに変わりはない。使う対象が、不屈きな組織だろうと営業成績No.1だろうと、連日オヤジ狩りのクソ餓鬼を相手に使うよりはよっぽど良い」

ヨシオさん、そんなにオヤジ狩りの被害に遭^あってたのか。気が優しいから、狙われ易そうな雰囲気だが。

「ワタクシは、巧さんの行く所ならどこでもお供します。それからブルーの相手役のイエローにしてくれた七佳さんのことも、けっこう好きですし」

「いきなりで事情はよく分からないけど、面白そうだから私も付き合ってあげて良いわよ。人間嫌いなタクミンの、意外に熱い面も見れちゃったからね」

続いて電子とまりさんも賛同すると、七佳の目がうるうる潤^{うる}み出した。

「ここを拠点にするなら、家賃は戦隊割引してあ・げ・る」

カナナさんがおまけの一押しをした。

「……皆ああ、ありがとうう！　ごめんなあ、関東の人間は気取って鼻持ちならんもんばっかやって、あたし誤解してたわあ。あんたらええやつちゃんあつ！」

また何だかよく分からん対抗心を持っていたみたいが、誤解は解けたようだ。

それから七佳の視線は、さっきから黙って聞いていたブラック店長に移った。

「……ちよつと待て。俺もなのか……？」

「ああ、ほんまええ人や。話ぜえくんぶ聞いちゃっただ・け・やのに、放つとかれへんから協力してくれるなんて」

「へ、部屋を紹介したただぞ！？　勝手に話してたのが耳に入っただけだろうが！　俺は何の特技もねえ！」

「構^{かま}へん、構^{かま}へん。ヒーローには情報屋も必要やから。不動産屋はその土地の情報、いっぱい持ってるんやろ？」

いつの間にか七佳の目から潤みは消え、普段通りの調子に戻っていた。

「そりゃあそれなりには……つい、いやそれよりお前、さっきまで泣きそうだっただろう。嘘泣きだったのか？」

「は？　ちゃうわ。ほんまに感動してんで。でもそれはそれ。今は店長さん、あんたを誘ってんねん」

「誘ってないだろ！　決定してるだろ！」

「もー、そんな細かいことどっちでもええやん。あんたは情報屋役、ここにおる人は皆ええ人やった、というわけで丸く収まるから」

頭を抱えるブラック店長。すげえな、あんなヤ○ザばりに強面^{こわもて}の人間を言いくるめるとは……。その図々しさに感服するぞ。

というわけで、人権戦隊・シンポレンジャーは、拠点の管理人と情報屋という脇役も決まり、いよいよ本格的な大人のごっこ遊びのようになったのだった。

共同生活も住めば都

管理人のカンナさんの戦隊割引により、相場の半値で部屋を2つ借りることが出来た。部屋割は俺とヨシオさん、電子と七佳だ。まりさんは今まで住んでいた部屋をそのまま使う。

「それで、これからどうすんだよ」

一応リーダーのレッド、まりさんの部屋に5人集まり、今後について相談会を開いた。

「今回決まったレンジャーメンバーを、富利異盟損に登録せなあかん。まあ、入社式みたいなもんをしに、皆で休み合わせて一回会社まで来てえな。ついでにN.O. 1も見れるで」

「……見れるっていうより、お前の派閥が出来たことをN.O. 1に見せたいだけだろ」

「へへへ、バレたあ？ ええやん、ちよつとくらい自慢さしてよ」
俺達がちゃんと仲間になったことが嬉しかったのだろう、七佳はさつきからずつと上機嫌だ。

「自慢出来るような人数じゃねえと思うが……」

「大事なのは数とちゃう。なあ、ヨッシー？」

「そうだぞ。ハートなのだよ、ハート」

ヨシオさんは、富恵ちゃんの話の時みたいに、トンツと親指を胸に突き立てた。やっぱりこの人にハートだとか説かれると鳥肌が立つ。「こら巧、腕擦りなや。あたしがどれだけ仲間からの人望を集めてるか、これをあいつに示すのは大事なことや」

「人望って……じゃあ何でお前がレッドやらないんだよ」

七佳の派閥を作るなら、彼女自身をリーダーに据えた方が良いに決まっている。

「えー、だってピンクが好きやねんもん」

「……あ、そう……」

こいつに突っ込んだ理由を聞いたのが間違이었다。七佳は思い付

いたまま適当に行動する性格なのだろう。

俺の呆れた物言いが気に入らなかったのか、彼女は真ん丸に頬を膨らませた。満月顔をするのが癖なのだろうか。無性にその余った肉を捻^{ひね}り回したくなる。

「あ、それから、うちの会社、歩合で給料入るけど、雀の涙みたいなもんやから、副業はOKやねん。早まって今の仕事辞めなやあ」

七佳は思い出したように手を打った。

「……その辺はあんまり期待してなかったから安心しろ。」

「ところで七佳ちゃん、歩合というのは何の歩合なんだ？ 組織の奴を倒せば良いのか？」

「やっぱ戦隊だから、敵をやっつけなきゃね。いよいよ本格的だわ」

「ワタクシのシンポテなら、一気に4、5人はやれそうですう」

ヨシオさんの問いに、まりさんと電子も乗って来た。

すると七佳は真っ赤でファンシーな、まりさんらしいちゃぶ台を、ダンツと叩いた。

「阿呆っ、物騒なこと言いなや！ そんなんしたら、傷害罪で警察捕まんぞ」

「ええ、敵なのにい？」

やる気満々だったまりさんはぶうぶう言って、口を尖らせた。

「当たり前やん。敵や言^ゆいても、表向きは普通の製薬研究所の従業員やで。特に街中^{まちなか}で派手にドンパチやんのはあかんわ」

「お前って……変なところで常識的なんだな……」

「……どー言^ゆー意味やコラ、巧」

七佳は据^すわった目をして、また頬を膨らませた。今までの自分の言動を、常識的だとも思っていたのだろうか。どういう了^{りよう}見^{けん}してんだ、一体。

「じゃあ、ワタクシのシンポテなら、傷害罪にならないですね。気配で脅かすだけですから」

「ほう、それもそうだな。証拠がないから警察も捕まえられん。」

幽霊の正体見たり枯れ尾花^{おぼな}”というわけだ」

「……ヨシオさあん、ワタクシは幽霊じゃないですう」

「おおっ、すまんすまん。怨霊だったな」

「余計に酷くなってますう！　ワタクシはヤンデレですからまだ生きてますうっ！」

電子とヨシオさんのつまらない即席漫才を見たまりさんが、横で「ちよ……マジでヨッシー天然！」とか言いながら笑い転げている。

^{ふりいめいそん}富利異盟損内部では、何だかややこしいことになっているというのに、大丈夫なのだろうか、この面子^{めんづ}で……

1週間後に全員数日間の休みを取ることを決め、人権戦隊シンポテレンジャーの共同生活が始まった。電子はヤンデレ喫茶、七佳はその隣の普通のメイド喫茶、まりさんはキャバクラ、ヨシオさんはホストクラブ、そして俺は元の雑居ビルで香水屋。今回はヤバイC BTに見つかったわけではないので、カンナさんのアパートで商売をするのは、今いる予約客を捌^{さば}いてしまっただけからにする予定なのだ。心残りは隣にあった漫画喫茶だ。新居からは少し遠くなる。

男女5人で共同生活をしていると、お互いのプライベートな情報も明らかに becoming くる。

田ノ中七佳は、両親が陸上の元オリンピック選手らしい。俺の2つ上で24歳だ。彼女も学生時代は短距離の選手だったが、あのプロポした腹の肉からは想像できないタイムを出したため、何度も薬の使用を疑われて断念したという。

電子に関しては、以前は俺が興味がなかったので聞かなかったが、

女2人とニューハーフのガールズ・トークで、神社の神主の娘だと言うことが判明した。フルネームは轟電子^{とどろろこ}。あの怨霊のようなシンポテで神主の娘とは、色んな意味で凄い。親は浄化してやれなかったのか……いや、憑依^{ひょうい}の類^{たぐい}じゃねえから無理か。因みに俺の一つ下で21歳らしい。

まりさんは母親がフィットネスクラブ経営、父親が元ボディビルダー。兄のカンナさん以外に、正真正銘の女である妹がいる。カナナさんと同じく父親似だというから、あまり詳しく聞きたくはない。ライダースーツを持っているだけあって、趣味はバイク・ツーリング。年は秘密だそうだ。

一番驚いたのがヨシオさんだ。ずっと”ヨシオ”という名前だと思っていたのだが、それは実は姓だった。嘉尾爽汰^{よしおそうた}というのが本名だ。名前の方が読んで字のごとく爽やか^{さわ}なのに、ホストクラブでも”ヨシオ”を使っているらしい。本人には何の意図もなく、リストラされた後、水商売のことをよく知らないままホストクラブの面接に行き、「履歴書忘れるなんて……とりあえず名前は？」「えっと、嘉尾です」「ヨシオ君ね、源氏名どうする？」「源……？」ヨシオでいいです」というやり取りがあり、今まで何も考えずに”ヨシオ”を使っていたそう。この何ともヨシオさんらしいエピソードを聞いたベテランキャバ嬢のまりさんは、「ちょ……天然過ぎ！」と言ってまた笑い転がっていた。

まあ、予想はしていたことだが、普通の人生を送ってきたのは俺だけだった。七佳^{いっわ}曰く”つまらない”、まりさん曰く”地味”。電子に”暗い”と言われた時はさすがに落ち込んだ。

こんな過去も性格もバラバラで、まとまりのないメンバーだが、気付けば意外に共同生活を楽しんでいる自分がいた。いたってつまらしく、地味で暗い普通の俺が、コソコソ隠れなきやいけない唯一の原因であるシンポテのことを、気兼ねなく話のネタに乗せられる。普通の俺が普通でいられるから、たまに居心地が良いとさえ思うこともあった。

楽しい時間はあっという間に過ぎる。約束の1週間が経ち、俺達は大阪まで来ていた。

「関西って聞いてたが、お前の会社って大阪にあるんだな」

「あれ、言^ゆてなかったっけ？ まあええわ。ようこそ、富利異盟損のホーム・グラウンド、ミナミへ！」

「……駅名は難波^{なんば}だっただろーが」

「この辺をミナミって呼ぶねん。常識やから覚えときい。ほな今からちよつと歩くで」

勝手知ったる街に着いた七佳は、黄色い小さな旗をどこからともなく取り出し、ツアーコンダクターのように案内し出した。はつきり言^いって、かなり恥^はずかしい。

「へえ、新しく綺麗な所と、古くてごちゃごちゃした所が混在してるって感じね。何だか面白いかも」

何を思ったのか、ここまで真っ赤なライダースーツを着て来たまりさんは、とんでもなく浮いていた。いや、東京でも浮いていたのだが、右も左も分からない場所で団体行動しているために、ここでは他人のフリができない。とりあえず、電子と七佳がメイド服を着てこなかったのがせめてもの救いだ。

「巧さあん、さっきからメイド喫茶がチラホラ見えますけど、ヤンデレメイド喫茶はありませんよう……」

「何で悲しそうな顔すんだよ。お前はヤンデレが不満だったんだろ？」

「それがあ、最近板に付いてきちゃって。普通のメイドじゃ物足りなくなってきたんですう」

「……そ、そうか。ありのままの自分を受け入れられたんだったら良いんじゃないか」

「まあああ！ やっとワタクシの愛が通じたのですねええ！……ウブッ」

目を輝かせて詰め寄ってきた電子の顔を、俺は咄嗟^{とっさ}に手の平で押さえてガードする。全く、油断も隙もねえな。

「お前の愛までは受け入れてねえ！ 俺はメイドより漫画喫茶があればそれでいい。なあ七佳、この辺にもあんのか？」

俺は黄色い旗を振り振り前に行く七佳に声をかけた。

「当たり前や。西の秋葉原、でんでんタウンをナメたらあかんで。会社の近くにあるわ」

「で、でんでん……いや、ネーミングセンスのことはもう言うまい。あるなら良いんだ。」

道行く人々から「どんな団体なんだ？」と言わんばかりの視線を浴び、羞恥心に耐えながらしばらく歩くと、あるビルの前でようやく七佳は立ち止まった。

共同生活も住めば都（後書き）

実在の地名が出てきましたが、フィクションです。

因みに富利異盟損があるとしているでんタウンについては、情報を書いているだけなので、これ以上詳しくは出てきません。

イケメン派閥

5階建てのビルの一階にはトラック等が駐車しており、奥に事務所のドアらしきものが見え、2階の窓には【私立探偵】の看板があった。おそらくその上の何も看板が出ていない階が、富利異盟損^{ふりいめいそん}なのだろう。

「他のテナントが入ってるようだが、自社ビルじゃねえのか？」

「自社ビルやで。表向きは何でも屋^やって言う^うたやろ。1階は激安引越し業者、2階は探偵事務所。このご時世に、何でも屋^やって聞いて怪しまん奴なんかおらんし、一応別々のテナントのフリせんと、仕事が入って来^きよらんねん。保護されたもんがシンポテ使^もって引越しと探偵で稼^{かせ}いだ儲^{もち}けの一部から、あたしら営業の歩合が支払^しわれるねん。」

「……あたしら、ってことは、俺達も営業課配属なのかよ。ってか結局この前聞き損^こねたが、歩合^あってのは何すりや良いんだ？」

「シンポテ持つてるもんを探して保護、強^つそうな奴^{やつ}やったら営業課にスカウトすんねん。人数^{にんず}×（かける）いくらって感じや。」

なるほど。七佳のやっている営業は、利益を生まない。だから保護した奴を表向きの商売の従業員にすることで、会社が成り立っているというわけか。

「戦隊なのにい……」

まりさんはまだ不服そうに口を尖^{とが}らせた。

「あんなあまりりん、敵を倒しても一切儲けにはならんから、無駄に戦^{いく}ったら損^こやで。こっちにもCBTみたいな組織、TNHがあんねん。目^めえ付けられると厄^{やく}介^けや」

七佳は声を潜めて言った。まりさんのニックネームはまりりんになったのだ。名づけた七佳に聞いたら、「爆乳と金髪と源氏名からマリリン・モンローを連想した」と言っていた。ニューハーフと並べて考えるなんぞ、モンローに失礼^{しつれい}だろうが。俺は意地でも呼んでや

らん。

「CBTとかTNHとか、何かの略なのか？」

ヨシオさんが不意に尋ねた。

「CBTは知らんけど、TNHは確か、”特殊能力で一儲け（Tokusyu Nouryokude Hitomouke）”から来てるらしいで。ベタやろ？ 富利異盟損の方がイケてるやろ？」

「どっちもどっちだっ……！」

「あたたたたっ！」

俺はとうとう七佳の頬を摘んで捻った。いや、摘むというよりは肉が余り過ぎて、掴むと言った方が正しい。全てがコイツの考えたものではないが、この頬に埋もれ気味の口から出てくるネーミングには、一々苛つと来るのだ。

「……あースツキリした。お前の小憎らしい肉を、いつか捻ってやろうと思ってたんだ」

「あんたSやろ！ でもあたしもどっちかって言うとならSやで！ 痛みを伴うスキンシップは、ドMの電子にしいや！」

赤くなった頬を押さえた七佳は、まん丸の涙目で睨みつけてきた。相変わらず目だ・け・は好みだ。

「スキンシップと言うな、誤解を招く。それに電子には摘めるような余った肉なんかねえだろ。」

「ひよおおおおおっ！ 巧さんはぼっちゃりが好みなんですかああああっ!?」

電子はすっかり誤解に招かれてしまった。

「こら電子！ ドサクサに紛れてくつつくんじゃねえ！ お前は肉を増やすより先に、血の巡りを増やせ！」

最近は多少興奮しても気配を抑える術を身に付けたようだが、青白いムンク顔で抱きつかれたら意味がない。

「ねーヨッシー、あの痴話喧嘩に私も入ったら、タクミンにハーレムフラグ立つかしら？」

明らかにからかっている風のまりさんの言葉が聞こえ、少し焦った。

電子にこのテの冗談は通じない。

「馬鹿言ってるじゃねえ俣治郎！ シリコン割るぞ！」

「いやーん、ムキにならないでよ」

「ハハハッ、ハーレムとは何とも羨ましいことだが、やめた方がいいぞ、まりりん。君の胸は、割られるには少々惜しい」

方向性は間違っているが、とりあえずまりさんはヨシオさんが止めてくれた。

そして当たり前なのだが失念していた。都会のビルのまん前でギヤーギヤー騒ぐと目立つ、ということ。

気付けば引越し屋の事務所のドアや、2階にある探偵事務所の窓から、恐る恐る人がこちらを覗いている。七佳はこっちでは独りだと言っていた。覗いている奴らはほぼ間違いなくN O・1の派閥だろう。

「おうおう、皆こっち見とるわ」

俺はヤバイと思ったのだが、七佳はニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

「良いのか？ あいつらN O・1の味方だろ」

「あたしの派閥が出来たことを見せ付けるには好都合や。誰かが才田に知らせるはず。わざわざ紹介しに行くなんて胸糞悪いことせんでも、向こうから覗きに来るやろ」

七佳の言葉通り、2階から覗いていた一人が下がり、程なくしてそこから別の男が顔を出した。

「皆よお覚えときい。あいつが営業課N O・1の才田陽路。マルチリンガルで、外国人とだけでなく、動物とも喋れるシンポテやねん」
覚えるためによく見た男の顔は……

「……すっげえな」

「君もそう思うか、巧君」

「あらまっ♪」

「ひよおおおお……」

皆も同じことを思ったらしい。

「せやろ……才田なんていかにも才能ありそうな名前の上に、営業

成績も良くて、おまけに、おまけに……っ！ ものつつっそい男前
やろ！？ もー見てるだけで腹立って腹立ってしゃあないねん！！」
地団駄を踏んだ七佳は完全にやつかみでしかない。

サラサラの茶髪に卵形のなだらかな骨格。すっと通った鼻筋、ク
ールな流し目、ニヒルに上がった口角が憎らしげだというのに、そ
れが逆に惹き付けるような従いたくなるような……。とにかく、男
の俺でもそう思うのだから、まりさんはうっとり、電子にいたって
はムンク顔で固まったまま才田陽路を見詰めている。

対する七佳は……俺達の反応を見て、これまでにない程頬をパン
パンに膨らませていた。

「そんな餓鬼みてえな面してっから、皆あいつの派閥に入るんじゃ
ねーのか？」

「……生まれてからずっとこの顔や。今更変えられへんし」

「造形のことじゃねえ……」

俺はそう言って、限界まで膨らんだ頬を、両手でバチツと挟んで潰
した。

「派閥を作るってのはな、ナメられたら終いなんだ。拗ねた顔を敵
に見せんじゃねえ」

「……分かった」

七佳が頷いたのを確認してから、俺は未だうっとり眺めるまりさん
の背中を小突き、固まった電子の顎をガツシリ掴んで正氣に戻した。
俯いた七佳の方は、ヨシオさんが肩を叩いて励ましているようだか
ら大丈夫だろう。

もう一度2階の窓を見上げると、才田と目が合った。彼は彫刻の
ように整った表情を崩すことなく、器用にウインクすると、窓から
離れて行った。

「……お、男にウインクされちゃった……」

いくら綺麗な顔してても、これには寒気がした。

「あらあ、そっちの趣味の坊やだったのね」

「た、巧さあん！ ついに禁断の園へ足を……！」

「何やと!? それはええネタやな! 巧、あんた才田を誘惑しいや。あいつが骨抜きになったら、あたしがN.O. 1や!」

早くも復活した七佳も便乗して囃し立てる。

「お前らな……言っておくが、俺はノーマルだぞ。それにあいつもそういう意味でウイंकしたんじゃないやねーだろ」

「だがもしそういう意味だった場合、骨抜き作戦は良いかもしれんぞ? まだ若いのだから、怖がらずに新しい扉を開いてみるべきだ。意外な自分を発見することで、人生は豊かになる」

「……ヨシオさん、だいぶ年上だから我慢してましたけど、いい加減にしないとそろそろ殴りますよ?」

拳を握り締めるも、天然オヤジのヨシオさんには通じず、彼は頭に疑問符を貼り付けて首を傾げるだけだ。

まともな人間がいねえ……。早く入社しちまって、一刻も早く常識的な奴を仲間に取り入れなければ!

決意を胸に、俺は骨抜き作戦で盛り上がる奴らを置いて、さっさとビルの中に入って行った。

たまに敵の方がまともな時もある

七佳達を置いて先にビルへ入った方がいいが、どこで登録するのか分からず、とりあえず階段を上る。後ろから1階で覗いていた奴らの興味本意な視線をビシバシ感じるので、一度振り返って睨みを利かせ、蹴散らした。

不意に前からも視線を感じ、俺は振り返った顔を戻した。

「やあ、ようこそ。富利異盟損へ」

大阪にいるのに、標準語で話し掛けられた。声の主はさつき2階からウインクしてきたゲイ疑惑野郎、才田陽路。……なのだが……

「……おい、何してやがる……ナメてんのか？」

相手は友好的な言葉で迎えてくれたのだが、同じように返すことは出来なかった。こともあろうか、才田はマスクを付けて登場したのだ。2階から見下ろしていた時は付けていなかったから、風邪気味だとかいうことは絶対でない。俺と会うために付けたのは明らかだ。「やだなあ、そんな威嚇しないですよ。マスクくらいで」

「俺は病原菌か……？」

「そんなつもりじゃないよ。君、志牙巧君だろう？ 匂いで人を惑わす能力の。詳しいことは分からないからさ、一応惑わされないように付けただけだよ」

才田はひょいっと肩を竦め、首を傾げた。気障ったらしいその仕種が、何故か様になる。

「ちっ……何で知ってんだよ」

「そんなのいくらだって調べられるよ。ネットが発達してるんじゃあ、プライバシーなんて、あつてないようなものさ」

そういえば七佳も俺のデータを買って接触したって言ってたな。あのぶっ飛んだ女に出来て、No. 1に出来ないわけはないか。

俺はとりあえず上りかけの階段を駆け上がり、才田の目の前まで近寄った。

「正確に言えば、匂いって言うより体臭だ。意識を集中させなきゃ何の効果もねえ。マスク外せ。不愉快だ」

いきなり寄って来た俺にびっくりして、少し身を引いた才田の腕を掴んで止め、睨み付けた。

「そうカリカリしないで。田ノ中じゃあるまいし……」

才田はあっさりマスクを外した。近くで見ると、肌まで綺麗だ。俺はノーマル、俺はノーマル……

「君はちよつと有名なんだよ。異能者達を引き付けるから。研究者達がこぞって張り付くわけだよ。田ノ中もそれを狙って君に近づいたんだろう？」

「あー、何かそんなこと言ってたな……」

「羨ましいよ。僕も関東出張の申請出してたんだけどさ、社長が早い者勝ちだつて言つて、彼女を行かせたんだ。」

残念そうに才田は眉を潜^{ひそ}めるが、目が笑つていて、余裕しやくしやくに見える。

「良いじゃねーか、お前、成績No. 1だつて聞いたぞ。他人^{ひと}の能力に頼る必要ねえだろ」

「自分で探し出すのと、相手から寄つて来るのでは効率が違うよ。

僕はね、成績なんかどうでもいい。更に高みを目指したいんだ。異能者達がもっと活躍出来るように。秀^{ひい}でた者が隠れ暮らし、普通の者が肩を張りのさばっている。そんなの悔しいじゃないか。そのためにはまず異能者が固まって、安心して暮らせる場所をつくらなきゃあいけない。この辺りをそういう所にしたんだ。それにはもつと人数が要る。良くも悪くも、数が物言う世の中だからね」

そう言つて髪をふあさつと掻^かき上げる仕種も決まっている。いかにも七佳が嫌いそうな奴だ。だが……

言つてることがまともなんだよ！　ここしばらく怨霊にぶつ飛び馬鹿に天然に頭の軽いニューハーフという、妙な奴らばかり相手にしてたから、いきなりまともなセリフを聞くと、それだけで少し感動する。

「フンッ……随分と崇高な考えだな」

俺は内心の動揺を隠すために、鼻を鳴らした。

七佳は普段から周りにコイツと比べられて、ナメられているのだろう。そうなるのも分からんでもない。考え方のレベルからしてま
ず違う。

「まだあまり興味がなさそうだね。ま、急かすことはしないよ。僕
の仲間になりたくなったらいつでも歓迎する。連絡先を覚えておく
ね」

そう言って才田は、ポケットから出した小さなメモ用紙にサラサラ
と携帯番号を書き、ペリッと破ると、人差し指と中指で挟んで渡し
てきた。連絡先一つ教えるだけでもいちいち気障きざむったらしい。

「……そういやお前、なんで七佳みたいに関西弁じゃねえんだ？」
メモを受け取る際に、少し気になっていたことを聞いた。

「ああ、僕の親は転勤族だね。大阪、東京、それに外国も何ヶ国か
住んだことがあるんだ。だから訛なまるほど同じ所にいたことはない。
それが高こじてか知らないけど、どんな言語でも話せる能力が目覚め
たってわけさ」

「動物とも？」

「フフッ、田ノ中から聞いたのかい？ あいつ、お喋りだからなあ。
その通り、動物とも意志疎通ができるよ。街をうろついている野良のら
達に、変わった磁気を出してる人間がいたら教えてってお願いして
あるんだ。僕が田ノ中より成績が上なのは、それが大きいよ。後は
彼女との性格の違いも関係あるかな……」

才田は小首を傾かしげた。言いたいことはよく分かる。七佳は悪い奴じ
ゃないが、癖があり過ぎるのだ。

何だか話を聞いていると、七佳が才田を一方的に嫌っていて、才
田は全く相手にしていない、という風に感じられるが、コイツの派
閥からは行方不明者が出ていると聞いている。社長も手を出せない
程の権力を持っているのだから、まだ信用はできない。

「それじゃ、連絡が来ることを祈ってるよ」

才田はそう言って、また器用にウインクをした。

「……忠告しといてやる。七佳にゲイだと思われて、ネタにされなくなかったら、ウインクはやめておけ」

「へ？ ゲイ？ ……アツハハハッ、それは困るなあ。ただの癖なんだけど、気をつけるよ」

特に気分を悪くしたわけでもなく、彼はそのまま踵きびすを返した。

「巧！」

才田が目の前から去ると同時に、後ろから七佳の声に呼ばれた。咄と嗟つさに手に持ったままだったメモをポケットに仕舞い込む。別に渡されただけだし、隠す必要もないのだが、七佳に見つかると思わず騒さわぎそうで面倒だと思った。

「……遅えよ」

「才田に会あうたんか？」

若干息を切らせながら階段を上ってきた七佳は、探るように俺を見た。

「まーな。ようこそって言われた」

「それだけ？」

「たいした話はしてねえよ」

「怪しい……」

何だよ、そのジト目は。気に食わねえ……。追い付いてきた他の3人が気まずそうな顔してるだろ。

「お前は浮気を疑う嫁か？」

「な……っ、ちゃうわポケッ！」

「じゃあつまんねーこと聞くな。さっさと登録を済ませようぜ。どこ行きゃあ良いんだ？」

まだ不満げな七佳を顎あごで促うながし、俺達は最上階、5階にある社長室へ向かった。

「よう来てくれはりましたなあ」

社長椅子ですっ！　と言わんばかりに革張りの椅子に、悠然と座っていた社長は、ブラック不動産屋の店長より厳いかつい風貌だった。オイルバックにパットで怒り肩になっている紫パープルのスーツ、そして金キラ金のネクタイが、悪い意味でよく似合う。わざわざ眉間みけんと鼻しわに皺を寄せているのが理解できない。

だがヨシオさんにはウケたようで、早速どこでスーツを買ったのかを社長に聞いていた。因みに今日のヨシオさんは、シンポテレンジャーのグリーンに合わせて、緑がかった銀ギラ銀のスーツの下に緑のタンクトップだ。ファッションセンスの似た者同士、気が合いそうである。

「ねー、何で社長ってばあんな派手な色のスーツ着て、顔を皺くちゃにしてるの？」

自分のファッションセンスは棚に上げ、まりさんはヒソヒソ声で七佳に尋ねた。

「ああ、社長はミナミの帝王っていうVシネの主演の、万田銀次郎が好きやねん。竹内力に憧れてるんやって。多分ヨッシーは今日、DVD全巻見させられるわ」

うんざりした顔の七佳は見させられたのだろうか。

「ワタクシ、苦手ですう。まるでヤ○ザみたいじゃないですかあ：

：

「うん、だって万田は闇金やもん」

「ひよおおおお……怖い……」

「大丈夫やって。社長は真似してるだけで、その筋の人間ちゃうから」

またどさくさに紛れて纏まとわり付く電子を押し退けながら、多分コイツが怨霊化したら、本物のヤ○ザにも怖がられるだろうな、と思っ

た。

そして社長からそれぞれ紙を渡された。

「これは登録シートや。今分かってる限りでええから詳しく書いてくれんかあ？」

ドスの効いた声で巻き舌気味に言われ、恐る恐る受け取った紙には、名前や住所、生年月日、身長、体重、病歴、いつシンポテに気付いたか、どんなシンポテか、現在活用しているか、等々を書く欄があった。

書き終わった奴から一人ずつ順番に、隣の別室へ呼ばれた。まりさん、ヨシオさん、電子と、入ってしばらくすると出てきて次と入れ替わる。他の皆よりシンポテを多く使って商売にしている俺は、それを書くために時間が少しかかり、一番最後だった。

終わった奴らを見回すと、腕に小さく丸めたガーゼを当てて、押さえている。

「……隣で何されたんだ？」

「シンポテを正確に把握するため、とか言って、簡単な検査されたわ」

「頭に機械をかぶせられて、何か測^{はか}っていたぞ。すぐに外されたが」
「後はあ、遺伝子調べるからって、ちよつとだけ採血して終わりでした」

何だって？ そうだ、忘れていた。会社に入ったら検査するって七佳が言ってたな。

「俺はやらないぞ……」

「え？ 本当に簡単な検査でしたよ。痛くないですって」

「身体を調べられるのが嫌なんだ」

「ちやちやゴネていると、隣の部屋から七佳が出てきた。

「ちよつと、早^はようしてえや、巧」

「検査なんかしねえぞ。」

「痛ないってば」

「嫌だ。俺の細胞は何人^{なんびと}たりとも覗かせねえ」

「何や、4年前も同じこと言^ゆーとったな。CBTみたいにモルモツト扱いされんのが嫌なんやろ？うちの検査は何も害はないし、一瞬で終わるから」

それでも俺は頑^{かたく}なに拒否した。何が嫌なんだと聞かれても、検査されるのが嫌だとしか言えない。

嫌だ嫌だ嫌だ……ぜったい、嫌だあ！！

たまに敵の方がまともな時もある（後書き）

勝手に才田の画像をアップしました

俺の天敵

「何でそんなに嫌がんなん」

いつまで経っても移動しない俺に、七佳は訝^{いふか}しんだ。

「嫌なものは嫌なんだ」

「……あたしのシンポテ使って、力づくで引っ張ったるか？」

「ああ？ やってみろよ。一瞬で眠らせてやる」

「その頑なさが怪しいな」

しばらく睨みあっていたが、やがて七佳は「埒^{らち}があかんわ」と言
ってため息をつき、隣室で待っている社長を呼びに行った。

「ほな今から社長とお話して」

七佳に連れて来られた社長は、俺の目の前にどっかりと座った。

「検査が嫌ってえ理由を聞かせてくれや」

脅しか？ 今度は社長使って脅しにかかったのか？ だが俺は負
けないぞ。落ち着け、俺。相手は竹内力の真似をしているただのオ
ッサンだ。

「身体を他人に調べられるなんて、気分の良いものじゃない」

「別に素っ裸になれ言う^ゆとんのとちやうがな。腹切って開くわけ
もない。それでも嫌か？」

社長は俺の頭から爪^{つめ}先まで、ゆっくり観察しだした。まるで……ス
キャンされているような……何だか寒気がする。

「……嫌だ。遺伝子見るんだろ？ 検査するってんなら、ここもC
BTやTNHと同じだ。」

「遺伝子見られるんが嫌。それが理由か？」

「ああ、そうだ」

異様な目でじっと見詰められ、いたたまれなくなった俺は目を逸^そ
らす。が、最後に検査をして、まだ採血跡を押さえている電子が目
に入ったから、舌打ちをして視線を手元に移した。

「どうやった？ 社長」

今までのやり取りを見ていたはずの七佳が、何故か社長にそう尋ねた。

「志牙君は……何や隠しとるなあ。嘘はついとらんが、他の何かを誤魔化しとるわ」

「……今、何しやがったんだよお前っ！」

俺は椅子を蹴倒して飛び退いた。さっきの寒気は気のせいじゃなかったのか。社長をお前呼ばわりしちまったが、んなことはこの際どうでもいい。

「何もしてへんがな。ちよいと覗ただけや」

「巧、落ち着きいや。社長はあんたに直接何かしたんとちゃう。社長のシンポテはな、超精密な五感で、相手の脈拍や発汗、それから呼吸の変化とかを感じ取って、思考や嘘を見抜くねん」
それを聞いて俺は更に距離を空けた。

思考を見抜くだと？ エスパーかよ。俺の頭ん中覗いたとでもいうのか？

「そないに怖がらんでええ、志牙君。儂は嘘は分かるがな、思考を見抜く言うても、考えてることそのまま分かるんとちゃう。どないなこと思つとるか、だいたいの方向性を感じ取るだけや」

そんな眉間と鼻に皺寄せたままの厳つい顔で、おいでおいでなんかなするんじゃねえ！

「コラ、巧。あんた何を隠してんねん？ 社長のシンポテは正確やで」

「ところで田ノ中君、シンポテっちゅうのは何や？」

「後で話します。今はこの阿呆んだらをシメなあかん」
社長の問いを跳ね返し、七佳はジリジリと俺の隙を窺っていた。

「お、……俺の細胞は覗かせねーぞ」

「また言いたな。今更聞いても胡散臭いだけや。……電子！ 巧に向かつてシンポテ使って！」

「えええ！？」

いきなり言われた電子はびっくりして俺と七佳を見比べた。

「こら、卑怯だぞ！」

「うるさい！ 妖怪カンナの時みたいに、気配に当てられたらあんた集中できなくて、シンポテ使われへんやろ。電子、巧のためやねん。心を鬼にしていっちょ頼むわ」

「やめろ、電子！」

おろおろしていた電子だったが、やがて意を決したかのよう^{こぶし}に拳を握り締め、俺の方を向いた。

「巧さあん、ごめんなさい。でも、隠し事は……いいけえまあせええんよおおおっ！！」

「……うぐうつ……っ！」

突如として現れた大きな空気の塊に押し潰されそうな感覚がしたと思ったら、猛烈な吐き気に見舞われた。頭がぐるぐる回って、何も考えられない。

「今や！ ヨッシー、まりりん、巧を隣に運ぶん手伝って！」

電子の気配がやんだ後、力が入らず座り込んだ俺の両脇を、ヨシオさんとまりさんが抱える。抵抗しようにもフラフラで何もできなかった。

隣室でコードのたくさん付いたヘルメットのような物をかぶせられ、機械から何かデータのよう^なものが書かれた紙が出てきた。それが終わると、今度は腕をゴムでぐっと縛られ、注射器を持った七佳が登場した。

「安心しい。私、看護学校中退やから、注射器くらいは扱えるねん」

「……せめて……卒業、しろ……よ……」

「息も絶え絶えの癖に、憎まれ口は叩けんねんな。ほないくで」

くだらない会話をしている内に、針がどんどん俺に近付いて来る。

肩はヨシオさんに、腕はまりさんに押さえられて、身動き一つとれやしねえ。

「マジでやめろお……」

ああ、こめかみが冷たくなってきた。ヤバイぞ、これは。

「……あつ、血管が逃げた！ 待てコラ、もっかいや。……あ、ま

た逃げた」

「……はン……俺の、血管……ナメんなよ……」

「どんな自慢やねん」

俺の血管の逃走劇もむなく、3度目にはとうとう針が刺さった。

電子の気配に当てられた時より更に強く頭が回りだし、脳天から背筋にかけて、すうっと冷や水を垂らされたような感覚がした。

「え？ 巧？ どないしたんや、しっかりしい！」

「やだ、タクミン唇が白いわ」

「ひよおおお……」

「ソファへ運ぼう。意識が……」

皆の声が聞こえたが、何も見えない。

俺はそこでショートした。

情けねえ……

薄く目を開けると、

「どうわっ！」

社長の厳つい顔があり、一気に目が覚めた。

「気分はどうや？」

「……社長のどアップがなければ良い寝覚めでした」

「志牙君は毒舌やなあ」

怖ず怖ずと社長の肩を押して距離を取る。またシンポテで思考をスキャンされたら堪^{たま}ったもんじゃない。

体を起こして寝ていたソファに座ると、皆と目が合った。

「じろじろ見んじゃねーよ。分かったんだろ？ 俺が検査を嫌がる理由」

ふて腐れて言うのと、一様に気まずそうな顔をされた。

「まあ、ドンマイ、タクミン」

「いや、きつと俺が強く押さえ過ぎたのだ。巧君のせいじゃない」

「いいええ、ワタクシのシンポテが強過ぎたんですう」

励ましの言葉も分かりやす過ぎて空々しい。

ポンツと肩に手を置かれて見上げると、七佳が珍しく神妙な表情をしていた。

「巧、あんた………、どんっだけ注射が嫌いやねんっ！」

「ああっ、七佳ちゃん、そんなにハッキリと……」

「やめてくださあい！ 巧さんみたいにプライドの高い俺様S系の人は、傷つきやすいんですからあ！」

「そーよ、タクミンはふてぶてしい癖にハートは硝子^{がらす}なのよ」

「ヨシオ！ 電子！ 俣治郎！ お前らのセリフの方が傷つくわっ
！！」

あー格好悪い……。検査自体、モルモットみてえで嫌なことは変わらない。だがそれプラス、俺は昔から何故か注射と血が大嫌いなのだ。注射は点滴でも駄目で、無意識に血管が逃げることもある。たいていネタだろうと信じてもらえないが、一種の危機察知能力が発動するのか、本当に逃げるのだ。血に関しては、漫画やアニメ等の絵ならセーフだが、アクション映画なんかに出て来るものだと、偽物と分かっていても指先が冷たくなってくる。俺にとって採血とは、その両方を兼ね備える最強の天敵なのだ。

「何かトラウマでもあるん？」

「ねーよ。誰にでもあるだろ？ 理由なく苦手なもの」

「ふうん、まあええわ。検査は終わりやから、採血することはもうないで。結果は出るまで時間かかるから、今日は部屋でゆっくりしときい。3階と4階が社員寮やねん。」

社長室を後にして、ゾロゾロ連れ立って廊下を歩いていると、電

子が隣にやって来た。

「何だよ」

「あのお、ヘタレ要素のある俺様も、ヤンデレはちゃんと受け止められますからね？」

……その話はもうやめてくれ……

うんざりしながら切に思った。

俺の天敵（後書き）

良い子は七佳みたいに無資格で注射器を使っちゃ駄目ですよ☆

巧の注射と血嫌いについては、今後の伏線を張ったわけでは一切ありませんので期待しないように。巧が格好つけて「俺の細胞は」の決め台詞を言う、裏の理由だけです。シロツメも同じく、何故かトラウマもないのに大嫌いなのです……

昭和のかほり漂う眼鏡

割り当てられた部屋は、ヨシオさんと同室だった。ヨシオさんは社長から”ミナミの帝王”のDVDを借り、それを見ると言う。パッケージの竹内力が務める万田銀次郎は、社長そっくりの風貌だったが、俺は全く興味がないので、昼寝をすることにした。小一時間ほど眠ると気分はすっかり良くなり、丁度七佳が検査結果を持って来た。

俺のシンポテは、だいたい前から自分で思っていたのと同じような結果だった。嗅ぐと頭の中で念じた通りになる効果持った物質を体内で作り出し、それを体臭に溶け込ませ、部分的に毛穴や汗腺かんせんを開いて出す。俺が実際にシンポテを使っているところを見るだけなら、手を翳すだけで相手を惑わすという、摩訶不思議なもののだが、詳しい結果は体臭やら毛穴やら、あまり聞こえは格好良くない。

ヨシオさんは、人間には規格外の肺活量と横隔膜を持っているために、強力な豆鉄砲を撃てるらしい。別に鼻でなくても口から撃つことも可能だが、本人は「鼻の方が接客の時、話のネタになって良い」と言っ、今のところ口で撃つ予定はないそうだ。

結果をひとしきり読み終わると、七佳はニヤニヤしながら箱を出した。

「何だよ、これ」

「へっへっへえ、実はな、私が社長にずっと言ーてたことが、とうとう通ってん。関東から一気に4人も連れて来たから、ご褒美やっ

て」

七佳が喜々として箱を開ける。俺とヨシオさんはそれを覗き込んだ。

「……色眼鏡？ 5つあるな……。おい、嫌な予感がするんだが……」

「色眼鏡なんてオッサン臭いこと言いなや。カラーレンズや、カラーレンズ。4年前に東京でCBTのすかしたミラーグラス見てから、

やっぱ見た目も対抗せなあかんって思てん。制服の可愛さで学校選ぶんと一緒や。見た目格好良くしとったら、仕事もやる気が出るやろ？ あんな安物のサングラスじゃ、恥ずかしいてしゃあない」

「こっちの方が恥ずかしいだろーがっ！ 昭和の流行りか！」

箱に入っていたのは、紫の色が半分ほど入った眼鏡だった。色違いだろうか、茶色バージョンもある。時代錯誤も甚だしい。

「何でや！ 試しに社長にかけさしたら、めっちゃ似合うとったで！」

「当たり前だ！ ミナミの帝王はDVDのパッケージだけ見たが、思いつ切り昭和だろ！ あれを真似してんなら、そりゃ似合うだろうよ！」

まさかこれをかけて東京帰れって言うんじゃねえだろうな。んなこととした日には、後ろ指差されること請け合いだ。

俺と七佳が言い合っている内に、ヨシオさんが紫の色眼鏡をひょいと取り、何の躊躇いもなくかけた。

「なかなか良いじゃないか。これで顔に皺を寄せて歩けば、親父狩りに遭うこともなくなるだろう」

「……あの、もしかしてミナミの帝王に興味持ったのって、そのためですか？」

聞くと満面の笑みを返された。親父狩りの餓鬼が離れると同時に、富恵ちゃんも離れていきそうだが、良いんだろうか……

「俺はかけねえ」

「もー、駄々こねなや。ほんま我が儘やなあ」

七佳はぷうっと頬を膨らませる。俺は即座にそれを両手で潰した。

「我が儘で結構。お前のセンスは理解できない」

「巧なんかいっつもTシャツとGパンやん。無難なん選んでるだけは素人のやり方や。もっと個性を出さなあかんで」

「CBTから逃げてる俺が、個性なんぞ出したら即見つかって意味ねーだろ……」

言い合いに疲れた俺ががつくりとうなだれると、七佳は逆に胸を張

った。

「大丈夫や。あたしら仲間と一緒に行動したる。そのために共同生活してんねんから。皆で守り合いながら行こうや」

「……お前……そこまで考えて……」

「だから巧も遠慮なく個性を出しい。はい、どうぞ」

そう言って七佳は俺に茶色い方の色眼鏡を渡した。

「……いや、個性は出さない。ってか俺は元々こういう地味な格好が好きなんだ」

「そう？ ま、いきなり張り切っても後がしんどいからな。今はTシャツの襟首に引っかけるだけで勘弁しといたるわ」

コイツ、いずれは顔にかけさせる気なのか……。

渋々俺が色眼鏡を受け取ると、七佳は紫の方を頭にかけた。本気でダサイ。ヨシオさんと並ぶと、痛いカップルのようだ。

電子とまりさんにも渡して来ると言って七佳が出て行った後、俺はこのビルの近くにあるという漫画喫茶を探しに出掛けることにした。色眼鏡を置いて行こうとすると、ニコニコ顔のヨシオさんに肩を叩かれ、無言で圧力をかけられたから、仕方なく襟首ではなくGパンのポケットに引っかけた。

目的の漫画喫茶は程なくして見つかった。値段やシステムは向こうとそう変わらない。

今回はスパイものを選んだ。犯罪組織に潜入し、内部から潰していく。何と言っても、主人公の身体能力がシンポテ並に凄い。これで普通の人間という設定なのだから有り得ない。だが漫画はぶっ飛んでなきゃ面白くないから良しとしよう。

読み終わって気付いたら、だいぶ時間が経っていた。ヨシオさんに、夕方には戻ると言って出て来たのだ。

急いで漫画喫茶を出ようとすると、出入口で呼び止められた。

「……才田？」

振り返ると、嫌味なくらい綺麗な顔をした奴がいた。……色眼鏡をかけて……。それでも不思議とダサく見えない。

「やあ、志牙^{しが}君も来てたんだね」

「その色眼鏡、まさか会社の奴ら全員に配られたのか？」

怪訝^{けげん}な顔で俺が問うと、才田カラカラと乾いた笑い声を上げた。

「そうみたいだね。かけなきゃ田ノ中がうるさいからさ」

「律義に顔にかけてやってんのか？ 案外優しいんだな」

「ん？ 君はGパンに付けてるんだ。そっか、田ノ中に”かけんとシバく！”って言いながら渡されただけど、顔って指定はなかったな」

感心したように頷いた才田は、色眼鏡を片手でスマートに外すと、爽やかな白いシャツの胸ポケットにかけた。

「嫌なことは屁理屈こねて意志表示しねえと、どんどんあいつのセンスに染まっちゃもうぞ」

「ハハッ、君はあの子の仲間なのに、けっこうはつきり言うんだね」

「センスまで合わせるつもりはないだけだ。友達同士^{そう}でお揃い^{そろ}いなんざあ、小学生の女子レベルだろ」

それを聞いた才田は、ニヤッとニヒルな笑みを浮かべた。

「気に入った」

「ああ？ お前やっぱゲイか？」

言葉の意味を端的に捉^{とら}えた俺は、後ずさった。

「違う違う。久しぶりにまともな会話ができたからさ、嬉しいんだよ」

「……まさか、お前の派閥の奴らも変な馬鹿ばっかとか言うんじゃない……」

「そのまさかさ。だから皆この会社に入るまでは、普通の人間から

変人扱いされて、色々溜まってたみたいだよ。僕が苛々せず丁寧に彼らの話を聞いてやったら、”アニキ!!”とか言って付いて来たんだ」

才田の派閥に皆入ってしまった時の経緯を聞き、単純な奴らだ、と思った。いきなり現れて優しい言葉をかける人間ほど、怪しいものはない。今まで才田と話していて、コイツがボランティア精神で動くタイプじゃないことは何となく察した。なら、苛々せず^{おおかた}に話を聞いてやるに値する、理由があるはずなのだ。その大方は、人数を集めて、この辺をシンポテを持つ者の街にすることなのだろう。だがきつとまだ何かある。行方不明者の件がそこに絡んでいる気がする。俺の長年培^{つちか}ってきた、人間不信の勘がそう告げていた。

「志牙君、本気で君を勧誘したくなかったよ。僕の方に来ない？」
「……考えとく」

七佳はぶっ飛んだ馬鹿だが、馬鹿は馬鹿なりに裏がない。他のメンバーもそうだ。俺はあいつらを信用している。だが、あえて才田を突っぱねずに返事を濁した。

その時の俺の頭には、さっきまで読んでいたスパイ漫画が浮かんだのだ。潜入、^{おとしり}囷、内部調査……。何とも安直な考えだが、才田は頭が良い。外から行き当たりばったりで崩しにかかっても、決して尻尾を掴ませない。そういうタイプだ。

幸いにも向こうから俺を気に入って、アプローチをかけてきた。七佳が関東出張までして自分の派閥を作ろうとした目的は、才田を調べることに。単純に考えて、社長を動かすより俺が動いた方が早いと思う。

才田と一緒に漫画喫茶を出ると、七佳と出くわした。

「……何や才田……、うちの巧とおったんか？」

「ずっとじゃないさ。彼はコミックコーナー、僕はネットコーナーにいたんだ。さっき帰り際にたまたま会っただけだよ」

「ふーん……。巧、あんた遅いで。シンポテレンジャーの皆で晩ご飯食べよう思^{おも}てたのに、帰って来^けえへんから探したんやで」

七佳は不審そうな顔をしていたが、深く追求はしなかった。

「シンポテレンジャー？何それ、面白そうだね」

「うるさい。あんたには絶対教えたれへん。行くで、巧」

去り際に才田をチラリと見ると、ウイנקされた。懲りてねえな。今度こそネタにされるぞ。そう思って俺の腕を引っ張る七佳に視線を移すと、バツチリ才田のウイנקを見ていた。その目は、ネタを発見してほくそ笑むようなものではなく、七佳らしくない、不安げに揺れるものだった。

スパイごっこ

その日の夕食、七佳はどこと無く元気がなかった。あからさまではないが、本当にどこと無く。どちらかというと、気配に敏感な電子的の方が、あからさまに俺と七佳を見比べている。

元気が無くなったのが、俺を迎えに行ってからだったから、ヨシオさんとまりさんまで俺に何か聞きたげな視線を寄越して来た。

仕方ねえ。話をしに行くか……。

夕食後、七佳を会社のビルの屋上へ連れ出した。日はとつくに暮れ、街が色とりどりのネオンに包まれている。大阪の夜景は、東京とはまた雰囲気の違いのものだと思った。

「……何ふて腐れてんだよ」

理由は薄々分かっているが、一応聞いておく。おそろく、さつき俺が才田と出て来たのを見てしまったからなのだろう。七佳は普段、あまり神経質ではないが、才田が絡んでくると途端に疑心暗鬼になる。今まで散々仲間があいつの方に付いたから、色々思うところがあるのかもしれない。

「別に……」

「嘘つけ。皆気にしてたぞ。不満があるなら、ちゃんと言え」

柵にもたれ、チカチカ点滅する電球達を見詰めて俺の方を向かない七佳の後頭部を突いた。

「……漫画喫茶で、才田に誘われた」
「え？」

女の機嫌を取るのは苦手だ。話を強引に進めるために、自分から切り出した。

「気になるんだろ？ あいつと何喋ったのか」

「聞いてええのん？」

「面倒臭せえが、お前がシケた面^{つら}してると、もっと面倒臭えからな」
俺は鼻で笑って七佳の隣に行き、柵にもたれた。

「お前が皆に配って歩いた色眼鏡…」

「カラーグラスや」

「……カラーグラスをだな、才田もかけて来てたから、お前の妙なセンスについて話したんだよ。そうしたら気に入られちゃって、”来ないか？” って言われた」

その時、七佳が一瞬息を飲む気配を感じた。やっぱりこのことを気にしていたようだ。

「……才田は人を魅了すんのが上手い。あたしには、真似できひん」

チラリと横目で見ると、七佳は柵をギリギリと握り絞めていた。悔しそうだ。分かりやすい奴。

「魅了？ 丸め込むのが上手いだけだろ。敵を褒めてどうするんだよ」

「……あ、そっか」

ここようやく目が合った。

「それで、誘われたあんたはどうすんの？」

「潜入してみようかと思ってる」

「は？」

「行方不明者と才田の関係性を調べたいんだろ？ 潜入したら調べられる」

俺は今日思い付いたことを提案してみた。元々やるなら全て話してからにするつもりだった。敵を欺くにはまず味方から、なんつう自己犠牲的な誤解を招いて平気な性格じゃない。

「……でも、ミイラ捕りがミイラになってもうたら……」

「じゃ、やめとかうか？」

「え、そんなあっさり!？」

七佳は俺を二度見した。乗り気じゃねえからやめようかって言ったのに、何びっくりしてんだか。

「向こうじゃまりさんがレッドでリーダーだがな、ここではお前の派閥なんだから、お前が決める」

「あたしが……？」

「お前が俺を信用できないなら、不安になるようなことはやらない。信用するなら、多少の危険は冒^{おか}してやる。どっちにするんだ？」

試すような言い方をしたら、七佳は腕組みをして10秒ほど唸^{うな}った。

「分かった。ほなしばらくシンポテレンジャーは休業。今から007ごっこや」

「……あ、案外早く決めたんだな。一晩考えるとか言うかと思ったぞ。ってか007”ごっこ”なんだな……」

「自動的にボンドガールは電子やな。あたしが才田に付くフリなんて不自然過ぎやし、まりさんは目立ち過ぎるもん。ほなよろしく頼むで」

七佳は俺の”ごっこ”に対する突っ込みを綺麗に無視し、皆に知らせて来る、と言いながら、来た時とは打って変わった軽い足取りで階段に向かった。

錆^{さび}び付いたドアを開けた七佳は、一端俺を振り返った。

「巧、話してくれてありがとう」

「小っ恥^ばずかしいこと言うな馬鹿」

「んふふふ」

俺は気色の悪い笑い声を出した七佳の頬を、摘んで引っ張ってやった。

翌日、才田に連絡を取った俺は、奴の部屋に呼ばれた。派閥の中にもピンキリでランクのようなものがあるらしく、才田からは非にと誘われた俺は、比較的上の方の位置に入れてくれるらしい。部屋に呼ばれたのは、奴の側近とも言える2人を紹介するためだという。

「いきなり幹部と接触出来るなんて、さすが巧さんですね」
社員寮の廊下を歩きながら電子は言った。

これから敵地……とは言い過ぎだが、才田の部屋に行くというのに、電子は妙に浮かれていた。七佳から007ごっこのヒロインにばってき拔擢されたのが嬉しかったようだ。ボンドガールには、てっきり爆乳のまりさんが選ばれると思っていたらしい。俺的には金髪に真っ赤なライダースーツの軽脳ニューハーフを連れ歩くよりは、ヤンデレ女の方が幾分マシだと思うが、言うとな面倒だからやめておく。

「ワタクシ、ちよつとでもボンドガール風になれるよう、ブラの中にティッシュ詰めて来たんですう。どうですかあ？」

「言ったら意味ねーだろ。その前に、不自然な形になってるぞ。セクシー路線なんて似合わねえことはやめておけ」

「まあああ！ 巧さんは貧乳がお好みだったんですねえ！」

「……何でそうなるんだよ」

怨霊の癖に、発想の転換が有り得ないくらいポジティブだ。人知の領域を超えている。

「今取るんじゃないえ！ ほら、もう着いたぞ」

ボケているのかわざとなのか、胸元に堂々と手を入れてティッシュを取り出そうとする電子を止めた。

俺達は【さいだ☆ひろ】と書かれたプレートの付いたドアの前に立った。動物と意志疎通ができるのを表したいのか知らないが、プレートところせまの周りにはベタベタと動物を形取った木製の飾りが、所狭しと張り付けられている。

コンコンコン……

ドアをノックすると、足音が聞こえた。

「あーぶく立ったー煮え立ったー♪煮えたかどうか食べてみよう♪ムシヤムシヤムシヤ、まだ煮えない♪」

「……何だ？」

突如として歌声が聞こえたが、才田の声ではない。

「あーぶく立ったー煮え立ったー♪煮えたかどうか食べてみよう

♪ムシャムシャムシャ

「おいっ！」

「もう煮えた♪」

俺の呼びかけを無視し、歌は続く。

「戸棚に入れて、鍵をかけて、ガチャガチャガチャ」

「ナメてんのか、コラッ！」

「お布団敷いて、電気を消して、寝えましょ♪」

「才田！ どうなってんだよ！？」

「……」

「おい！」

「……」

歌は止^ゃみ、今度は何も言わない。

「巧さあん、まだドアの向こう側にいますよ。何か待ってるみたい……」

「何だよ、それ」

電子が向こうの気配を探ったが、それが分かったからと言って、どうしたら部屋に入れるのかは分からない。

コンコンコンッ！

次はさつきより強めにノックした。

「何の音？」

意外にも返事が来たから、少したじろいだ。

「……才田に呼ばれて来たんだ」

「あー良かった」

「はあ？」

「……」

不可解なやり取りの後、相手はまた黙る。

うわ、苛々してきた。才田の部屋にいるということは、奴の仲間だ。あいつ、こんなのを苛々せずに話をしたっていうのか。ある意味ちよっと尊敬するぞ。

ダンダンダンッ！！

俺は切れそうになって、拳で思い切りドアを殴りつけた。

「何の音？」

「お前に用はねえ！ 才田出せて！」

「あー良かった」

「いい加減にしろよ……」

「……」

「……馬鹿らしい。帰るぞ、電子」

呆れて踵を返そうとすると、電子は俺のTシャツを引っ張って止めた。

「あの、これって小さい子がやる遊びなんじゃないですか？ かごめかごめみたいな。ワタクシがやってみます」

コンコンコン

「何の音？」

電子がノックすると、またさつきと同じセリフが返ってきた。

「……おおお化あけええのおおおとおおお！！」

「ぎよええええええええっ！！」

ドアに向かって電子の気配が爆発すると、向こうから悲痛な叫び声が聞こえた。

……………ガチャ………

声が途切れた後、数秒してから鍵の開く音がした。

「……よ、ようこそ、才田ワールドへ……ぐげっ！」

ドアにもたれながらヨタヨタ出てきた奴の頭を、俺は垂直に殴りつけた。殴ってから足元に蹲る馬鹿を確認すると、相手はひよろ長い骸骨のようなオッサンだった。黒のスーツに口髭とシルクハットという英国紳士ぶった格好がまたムカつく。

部屋の奥に目を向けると、才田がヘッドフォンを外してこちらをポカンと見ているところだった。ヘッドフォンからはかなりの音量の音楽が漏れている。このオッサンが遊んでいるのが聞こえず、電子の気配でやっと気付いた、といったところか。

「やあ、来てたんだね」

「……ああ、来てたさ。だいぶ前から……」
俺の喉からは、疲れた声しか出なかった。

遊び好きと鳥山好きの側近

シンプルで落ち着いた、暗い配色のテーブルやソファ。棚に並ぶ本はミステリーの巨匠と言われる作家のシリーズ小説。家具は最低限で殺伐としているが、どこことなくスマートでカリスマ性を感じる。外から見たドアの雰囲気とは、まるでイメージが違う。

そんな才田の部屋には、100均で買ったちぐはぐな日用品や少年コミック等は一切見当たらない。東京の俺の部屋とは大違いだ。派手なショッキング・ピンクを好む七佳と気が合わない理由が少し分かった。

「……友達を連れて来たんだね」

俺が部屋に入って色々見回している内に、才田の視線は電子へ向かった。

「ああ、まーな……」

「轟電子とんごんですう。ワタクシは巧さんの行く所ならどこでもついて行きますう」

「こらっ、ベタベタすんじゃねえ！」

俺は腰に纏まとわり付いてきた電子の腕を引きはがした。

「……才田、まあそういうことだから」

「あ、うん、構わないよ。さっきの能力、けっこう凄まじかったしね……。そうそう、入口でノビてる彼は泉堂君せんどう。お茶目な性格なんだ」

才田はふざけたオッサンを紹介した。

「お茶目……で済ませられる苛立ちじゃなかったがな」

「そう？ ドアに付いてるネームプレートも、動物の飾りも、彼がやったんだよ。色んなことに遊び心を取り入れるのが好きらしいよ」
「そう言う才田の目は苦笑している。本人の前だから口には出さないが、側近として接点が多いと、正直面倒臭いと思ってるんじゃないだろうか。だからあの泉堂とかいうオッサンが入口で歌って遊んで

たのに、気付かないくらいの音量で音楽を聴き、まともに相手にするのを避けたとか。

「側近は2人いるって聞いたが……」

部屋には才田と泉堂のオッサンしかない。

「さっきまでいたんだけどね、ちよつとトイレに行ってるんだ」

「そうか……」

ここの社員寮は、トイレとシャワールームが階ごとで共同なのだ。程なくして、ノビていた泉堂がむっくりと起き上がった。

「あーぶく立ったー煮え立ったー♪」

誰か来たのだろうか、奴は俺達が来た時と同じことをまた始めた。ちゃんとぐるぐる回って、鍵をかける動作をしたり、”寝えましょ”のところではやがみ込んでやがる。ドアのデコレーションといい、この入室の儀式といい、ボスの部屋で勝手なことをする側近だ。

「……何の音？」

「風の音」

「あー良かった」

意外にもドアの向こうの相手は、泉堂の遊びに付き合ってやっている。

コンコンコン……

「何の音？」

「お父さんが帰ってきた音」

「あー良かった」

コンコンコン……

「何の音？」

「ポチが歩いた音」

「あー良かった」

コンコンコン……

「何の音？」

「浪人生が夜食を漁^{あさ}ってる音」

「あー良か……」

「長過ぎるだろっ！」

思わず突っ込んだら、泉堂は俺に向かってあっかんべーをした。

……か、可愛くなさ過ぎて、殺意を覚える。

コンコンコン……

「何の音？」

「……栗林くりばやしの音お！」

「きゃー！」

泉堂は気色悪い悲鳴を上げて一端逃げ、すぐに戻ってドアを開けた。本来はこういう手順らしい。

そして入って来たのは、小柄な兄ちゃんだった。まだ見た目は20代くらいなのだが、残念なことに毛根がほぼ死滅している。脳天からやや前側に申し訳程度生えた産毛うぶげが痛々しい。これなら全て抜いてしまつて、スキンヘッドで通した方が良いと思う。そしてふざけているのか、額にオレンジの点が6つ並んでいる。恐らくマジックで書いたと思われるものだ。とてつもなく嫌な予感がする。

「帰って来たね。彼が紹介したかったもう一人、栗林君だよ」

「おう、新人。俺が栗林や。気軽にクリリンって呼んでええからな」

「……やつぱりそれを意識してたのかよ」

わざわざ額に点を書いているから薄々感づいてはいたが、本人の口から聞くと余計にうんざりする。

俺の考えていることが分かったのか、栗林は口をへの字に曲げた。「ナメんなコラ、クリリンは俺にとつて希望の星なんやぞ。チビでもハゲでも、18号っちゅう綺麗な姉ちゃんと結婚してんからな！
んなつはっはっ！」

「あのな、クリリンはチビだがハゲじゃねえぞ。あれは剃毛ていもうだ。つてかデコに点書くくらいなら、キューピーみてえにちよびつと生えてる毛を剃それよ」

俺が基本的なことを指摘すると、栗林はたじろぎ、悔しそうに顔を歪ゆがめた。

「な、……し、しゃーないやろ！ 俺の能力で太陽拳を撃つには、

髪がないとあかんねんから！」

「頭光らせるのに髪が必要なわけあるかつ！」

「俺の太陽拳は光らせるだけとちゃうんじゃっ！」

「普通の太陽拳使えよ！」

「気を目くらましになる程発光させるなんて芸当、実際に出来るわけないやろ！……それよりお前、クリリンのことよお知つとんなあ」

「……いや、まあ、伊達に漫画喫茶通ってるわけじゃねえからな……」

言ってから少し後悔した。栗林がニヘラツと嬉しそうに笑ったからだ。

「なあ、クリリンについて語ろうや。才田さんも泉堂も、漫画に興味ないねん」

キューピー頭のチビにじりじりと揉み手で擦り寄られ、寒気立った。「こ、断る。俺はどっちかってえと天津飯派だ。あいつは三ツ目と言い性格と言い、漫画のキャラとしてのパーソナリティをきっちり押さえてるからな」

「大丈夫や。太陽拳は元々天津飯の技やし。俺とお前は十分解り合える。仲良うしよーやあ」

解り合いたくねえ！ 仲良くしたくねえ！ と全力で拒否しようとした時、俺の後ろで電子の気配が少し膨らんだ。

「キャラそのものにも成り切れない癖に、所詮でんでんタウンですねえ。アキバをナメないで欲しいですう」

チラリと見ると、いつの間にか泉堂に本格的なイングリッシュティーを振る舞われていた電子が、手に持ったティーカップをプルプルと震わせながら栗林を睨んでいた。

「あ、あ、？ もっかい言ってみいコラ、貧血姉ちゃん……」

でんでんタウンを馬鹿にされて、栗林も電子を睨み返す。

「二度は言いませんよ。日本語は一回で聞き取ってください。出来損ないのクリリンが巧さんと解り合おうなんて……なあんて図々

しいいんですかあ？ 俺様Sにヘタレ要素を併せ持つ複雑なツンデレを解ってあげられるのはあ……ヤアアンデエレだあけっ……あがっ！」

「電お子！ 俺を挟んだまま栗林に攻撃したら、俺まで巻き添え食らうだろ！」

「はっ、ほうれひへひは（はっ、そうでした）」
俺は間一髪のところ電子の顎を掴んだ。

まったく、暴発をある程度抑えられるようになったとはいえ、嫉妬が絡むと見境がない。しかも変なタイミングで妬くから面倒だ。

最初は俺が優しい……というか追い返すためにごく常識的な言葉をかけただけでホイホイ押しかけて来た癖に、イケメンで常に人当たりの良い才田には惚れた様子はない。ヤンデレの考えることはよく解らない。

「さすがやなっ、天津飯！ 男同士熱く語ろうやないか！」

俺が自分の味方についてと思ったのか、栗林は興奮しながら更に近寄って来た。

「俺自身は天津飯になるつもりはねえ。ただ好きなキャラってただだ」

「硬いこと言いなや。一緒に神龍呼び出……むう……ぐう、ぐごう」
俺は油断して目の前まで来た栗林の鼻先に手をかざし、強烈に眠くなる匂いを嗅がせた。睡眠を誘う物質が鼻から入って脳に働き、栗林はあっという間に白目を剥いていびきをかき出した。

「ファンタスティック！」

側で見っていた泉堂が手を叩いた。

「泉堂君、発音が違うよ。Fantastic、だよ」

「はっは、才田さんの能力は厳しいですなあ。ふあんタアすていっく、かなあ？」

シンポテを使ったのか、外国で暮らしてる時に身につけた基本的スキルなのか、才田がネイティブのように発音して訂正したが、泉堂はイギリス紳士風の格好でも大阪のオッサンだから、それは難しか

ったようだ。

いや、発音のことはどうでもいい。俺達が大阪にいられる期間は限られている。潜入だつてのんびりしてはいられない。

だが……側近2人のせいで、さっきから話が全く前に進んでねえ！
自己主張が激し過ぎだっ！

夏休みの自由課題

才田が俺を引き入れた目的は七佳と同じく、シンポテを持つ者を引き寄せる体質を利用して、より多くの仲間を作ることらしい。ゴキブリホイホイ的な扱いは派閥が違ってても変わらないようだ。まあ地味なシンポテだからこんなものだろう。七佳のようにパワーが出せるわけじゃなし、電子のように派手に相手をびびらせるわけじゃなし、ヨシオさんのように遠距離から攻撃できるわけでもなし、まりさんのように体張^{すべ}って仲間を守るわけでもない。

特に身を守る術がないのに、至近距離まで敵に寄らないと何も出来ないのが俺だ。日常のちょっとした小細工や、栗林のように油断した相手に使うには便利なのだが、これで本当に才田が何かとんでもない悪事を働いていて、シンポテレンジャーと直接対決！なんてことになったら、恐らく俺はお荷物だ。

別に不満なわけじゃない。レッドみてえな主役を張りたいなんて微塵^{みじん}も思っていない。ただ、地味過ぎてお荷物になるのは、俺の中の無駄に高いプライドと欠片^{かけら}ほどの正義感がチクリと突つつかれる。

「巧さあん、デート中に考え事はダメですよお」

「……デートじゃねえ」

俺は電子の言葉で我に返り、即座に否定した。

同族を引き付けるのが仕事の俺は、才田から特に細かな指示を受けたわけじゃない。測定機を持って街を観光し、もし機械が反応する者に会ったら才田に連絡するだけ。内部事情を知るに足る信用を得るには、まず1人くらいは新人を増やしてやらないと話にならない。

俺と電子は早々に才田の部屋を出て、街へ繰り出した。富利異盟^{ふりいめい}損^{そん}の新たなトレードマーク、色眼鏡を付けて。勿論俺は顔には付けない。Gパンに引っ掛けただけだ。電子は正直にかけようとしたから、「首から上に付けたら連れて歩かねえぞ！」と脅して、趣味の

悪いふりふりレースのポシェットに引っ掛けさせた。

外はまだ残暑で蒸し暑い。加えて電子がデート、デートと浮かれながら擦り寄って来るものだから、余計に暑い。

そんな感じで、少々荒っぽいが活気のある街を散策していると、上からふと一瞬だけ影が射した。ポシェットの測定機がわずかに鳴るが、すぐに止まった。不審に思って見上げるも、ビルのでっぺんが並んでいるだけで何も変わったところはない。

「……電子、お前何も見えてないか？」

「ん？ 上ですかあ？ 特に何もお……あっ！」

キーン……

「あれだ！ 何だ、人か？」

電子が見上げた時、また測定機が少し鳴り、同時にビルの屋上から隣のビルへ、人影のようなものが飛び移った。しかも勢いを付けて飛んだんじゃない。フワリ……と浮くように軽やかな飛び方だった。人影のようだが人間業とは思えない。シンポテだ。

「クソッ、追い掛けてえが、こうも土地勘がないとやり難いな」

上をもたもた見ていると人通りの多い歩道の邪魔になり、電子は俺とは反対方向に流されて行く。

「ひよおおおっ！ た、巧さあん！」

「何やってんだ。とりあえず避難するぞ」

俺は伸ばされた電子の手を掴み、人気のない路地裏まで引っ張った。

「こ、こんな狭いビルの間に連れ込まれるなんて……興奮しちゃいますう」

「しねーよ。変な思考回路を今すぐ遮断しろ」

Tシャツの袖で額の汗を拭ぬぐっていると、またもや測定機が鳴り出した。

慌てて見回すと、同じ路地裏の離れた所に、人が着地しようとしていた。そいつはゆっくりふわふわと降りて来て、途中膝を抱え込み、月面宙返りのようにクルクルと2度回り、最後にスタツと地面に足を付けると、両手を伸ばしてポーズを決めた。

「10点10点10点、10てえん！ やりました、藤間選手とうま！」

満点優勝ですっ！」

「……独りで体操選手権やって楽しいか？」

「なっ！？ だ、誰や！？」

スローモーションのような動きで決めた月面宙返りを満点と自己評価して遊んでいたのは、まだ餓鬼の女だった。小さなピツタリしたTシャツに、ジーンズ生地ホットパンツ、ボーダーのニーソックスという、いかにも小学校で流行ってそうな格好だ。

「今の、見たん？」

肩まであるキューティクル満載の子供っぽい髪を揺らし、餓鬼は引き攣くわった顔で尋ねた。

「ああ、しっかり見たな。俺達はお前みてえな人間離れた奴を探してたんだが……餓鬼はさすがにやめといった方がいいか」

「そおですね、下手したら未成年者略取ですよお」

「邪魔したな、餓鬼んちよ。誰にも言わねえから安心しろ。じゃーな」

「えっ？ えっ？」

意味が分からないといった風の餓鬼を置いて、俺と電子は生ゴミ臭い路地裏を出ようとした。

「ち、ちよお待ちい！」

「ひよおっ！？」

「どわっ！ あっ……ぶねえな」

餓鬼が後ろから急に電子のブラウスを引っ張ったから、バランスを崩した電子が前にいた俺のTシャツを掴み、危うく3人まとめて転

がりそうになった。

「アハハッ、新喜劇みたいやな」

事の発端である餓鬼は、ケラケラ笑い出した。

鼻でも摘んでやろうかと思ったが、こんな展開は七佳で慣れている。ムカついていることをアピールしたところで、こういう奴はそれを全く理解しないだろう。

「……それで、何なんだよ」

「あんたらさあ、さっきの見て驚かんの？」

「言っただろ、俺達は人間離れしてる奴を探してるって。お前みてえなのが集まった会社に新入社員を引っ張らなきゃならないんだ。だがどう見ても小学生だからやめておく」

「は？小学生ちゃうわ。高1やで」

俺の予想は否定されたが、身長が低いせいかな、小6と言ってもおかしくない見た目だ。

「それよりその会社ってどんなん？ おもろそうやな。学生アルバイトとかないのん？」

「何でそんな食いつくんだよ……」

警戒心が全くない様子に、相手をよく確認してから声をかけりやあ良かったと後悔した。

若干後退あとずさった俺の腕を掴んだ餓鬼は、目を輝かせながら語り出した。

「夏休みの自由課題でな、自分の特技を生かした経験をしろっちゅうのが出てんけど、どうしても見つからんねん。アルバイトとかボランティアに応募した時、さっきの技見せたら、”うわっ！”とか言ゆって追い返されてしもたんよ。でも夏休みも後ちよつとで終わリやから、急がなあかんねん」

「見せるなら別の特技にしろよ……。それに俺達の会社は学校の課題に使われたら困る。自称秘密結社っていうこの上なく怪しい所だからな。高校生なんぞ雇ったら、教育委員会とPTAから苦情が来る」

「大丈夫やって。NPO系の所ってことにして感想文書くから。」
非営利団体かよ。同族の保護に利益はないが、1階の引越し屋と2階の私立探偵は普通に営利団体だぞ。まあ、何でもNPOって言うておけば、怪しい団体も慈善団体と思ってもらえるという傾向はあるが……。よくそんなこと知ってるな、餓鬼の癖に。

「それでも駄目だ。未成年を雇うのは、かなり気を使わなきゃならないんだ」

「ええーっ！そんなこと言わんと、お願いやってえ。な、そっちのお姉ちゃんも、ええやろ？夏休みが終るまでの、超短期でええねん」
餓鬼は俺が良い顔をしないと、今度は電子に乗り換えた。餓鬼よりは背のある電子だが、ガリガリだから、ゆっさゆっさと揺さぶられている。

「た、巧さあん、ちゃんと事情を説明した方が良いでしょう」

「いや、でもな。会社の内部事情をそこいらの餓鬼に喋るのは……」
「全部話した上で、それでも彼女がやりたいって言うなら、自己責任ってことで良いじゃないですかあ」

案外シビアな考え方なんだな。15、6の未成年に、何かあっても自己責任、なんてのは世間的には通用しねえんだがな。

「あのですねえ、うちの会社は派閥が2つあるんですけど、大きい方に良くない噂があるんです。で、私ワタクシ達は小さい方の派閥から寝返ったフリをして、潜入調査をしてるんですよ。今探してる人材は、はつきり言えば^{おとり}囹役なんですね。とっても危険なんです。未成年が何か事故や事件に巻き込まれた時、責任取れないから巧さんは断ってるんですよ」

「潜入！？めっちゃ楽しそう！」

電子の説明を受けた餓鬼は、怖がるどころか逆に乗り気になった。
「おい、俺達の言いたいことはそこじゃねえ。お前が怪我しようが神隠しに遭^あおうが、下手して死のうが、こっちは一切責任取らないって言うてんだ」

「うんうん、」当局は一切関知しないのでそのつもりで”やろ？”

「それはスパイ大作戦ですう。ワタクシ達は007をやってるんですよ。巧さんがジェームズ・ボンドで、ワタクシがボンド・ガールですう」

「電子！ そんな言い方したら、餓鬼は更に乗ってくるだろ！」
慌てて止めるも遅かった。餓鬼は胸の前で両手を組み、ワクワクドキドキという感情が見て取れる。

「自己責任でやるー！」

「待て、未成年がそんなことほざいても、実際そういうわけには…」
「今親の許可取るわ」

そう言って携帯を出した餓鬼は、電話をかけ始めた。見た目通りというか、ストラップがわんさか付いた、重たそうな携帯だ。

「……………、あ、お母さん？ 課題のネタになりそうなところ見つけてんやん。……………うん、そうやねん。NPOやでNPO。ちょっと慈善行為で自分磨きしてくるわ。……………うん、……………うん、泊まるかもなあ。でも夏休み終わるまでには帰るし。じゃあね、はいはーい」

餓鬼は手短な話で電話を切り、親指を立ててニカツと笑った。

「……………か、軽いな……………」

「当たり前やん。重々しい言い方で許可なんか出す親がどこにおんねん」

「いや、どこのNPOかも、住所も連絡先も担当者も聞かずに許可出すってえのもどうかと……………」

「もお、ぶちぶち説教臭いお兄ちゃんやな。禿げるで」

ああ、これで調査がかなり面倒なものになった。せめて高校を卒業してる奴ならマシだったのに。餓鬼の言う自己責任は当てにしないといけない。いきなり行方不明にならないよう、注意して見ていなければならぬだろう。犯罪者にはなりたくないからな。

どうも俺は、馬鹿が変わり者の同族しか引き寄せないらしい。

囃のみかん

餓鬼の名前は藤間美夏^{とうまみか}。友達からはみかんと呼ばれているらしい。彼女がビルとビルの間をふんわり飛び越え、スローな月面宙返りで着地したのが、どういったシンポテなのかは、本人もよく分かってないらしい。学校でふざけて遊んでいる時、誤って階段から落ちかけ、その時体が浮いて助かった。そこから自由に浮くことができるようになったという。

最近ハマっているのは、ラピュタごっこ。序盤にシータが飛行船から落ち、飛行石によってふわふわとパズーの所に舞い降りる、あのシーンだ。簡単に言えば、高い所から飛び降り、シンポテを使って仰向けになりながら、下にいる友達の所にゆっくり落ちていき、友達が腕を差し出したらシンポテを解いて一緒に倒れ込む、という遊びだ。さすがに女の子同士では、パズーのように抱えることはできないようだ。

そしてみかんが妙な技を使っても、大人と違って友達は気持ち悪がらないらしい。女子高生の適応力は半端ない。

「今から敵のボスに連絡する。さっき電子が話した派閥と潜入の事情は、絶対に喋るなよ」

「分かっているって。アタシ、スパイごっこする時はめっちゃ口堅いで。難攻不落のみかんって言われてんねんから。今まで何回もこちよばし拷問に耐え切ってきてんでえ」

餓鬼の癖にシュールな遊びをしやがる。胸を張るみかんは、絶対七佳と同じタイプだ。

「……先に言うておくが、ボスはすっげえイケメンだ。しかも表向きの人当たりも良い。惚れ込んで寝返ったら、危険に晒^{さら}されても放っておくし、行方不明になっても捜してやらねえぞ」

「お、……男前拷問かあ。それは未知の領域や……。鞭^{むち}には強くても飴^{あめ}には……いやいや、頑張るわ。男は顔やないってお母さんも言^ゆ

「てたし」

なんとも心許こころもとないが、ぐずぐずしている時間はない。

七佳達にはさっき電子から動くことを連絡させた。俺達が才田の部屋に行ったり街へ繰り出している間、あいつらは社長に携帯のGPSをキャッチする機械の手配をしてもらい、万が一に備えて待機しているのだ。

俺は逸はやる気持ちを抑え、通話ボタンを押す。

「……………、おう、見つけたぞ。……ああ、高校生だ。……………、知らねえよ、年齢制限のことは言ってなかっただろ。その代わりやる気は満々だぜ。親の許可も取らせた。今からそっち連れてくからな」

後半畳み込むように喋り、返事も聞かずにブチッと切った。やはり才田は未成年のところであまり戸惑ったようだが、強引に押し切った。出来る限りみかんから目を離さないとつもりだが、もし学校や親から苦情があった時は、ボスの才田に責任を取ってもらおう。

そうして俺達はみかんを連れて、富利異盟損ふりいめいそんのビルへと引き返した。

会社で才田と会い、一言二言交わしたみかんの反応は、拍子抜けするくらい薄いものだった。女子高生には受けないのかと思って聞いてみると、「顔はタイプでも、なよなよした標準語が気に入らない」と言う。俺の場合は上品な言葉遣づかいじゃないから良いらしい。褒められているのか貶けなされているのか、よく分からない評価だが、一応嫌われてはいないようだ。

社長は七佳から事情を聞いているから、本来はない短期の学生ア

アルバイトとしてみかんを登録した。

因みに竹内力をパクった社長を見たみかんは、「ダサッ！」の一言で切り捨てた。餓鬼は正直過ぎて恐ろしい。ショックを受けて絶句する社長は、普通の情けないオッサンに見えた。

そしてそこからは、俺が想像するだけでも血の気が引く、例の検査の時間だ。俺は腕を押さえて出てくるみかんを必死で見ないようにした。

「はぁ、採血って気持ちええなぁ。癖になりそうやわ」

「……」

「……血を抜かれたのにですかぁ？」

喉の奥がムカムカしてきたから、相手は電子に任せ、だんまりを決め込む。

「抜かれたからやん。学校の先生に献血が趣味の人がおってな、授業中の雑談で、献血すると血が新しく作られて、結果自分の血が綺麗になるって言^ゆいててん。何かさっき抜かれた瞬間、スカッとして生まれ変わった気分やったわ」

「そんなに早く血は作られませんよお」

「まーまー、物の例えや。献血って16歳からいけるやんな？ 今度やってみよっかなあ。先生は表彰状貰うくらいやって、腕が注射の跡だらけやねん。だから毎年夏になって半袖着ると、覚せい剤打ってるって勘違いされて、警察に職務質問されるらしいで。葉中ちやうけど献中やからしゃーないわ。アハハハッ……あれ、お兄ちゃんどうかしたん？」

横でダラダラ血と注射の話をするな！ と叫びたかったが、吐き気がして叶わなかった。

「みかんさあん、人にはそれぞれ苦手なものがあるんですう」

「へ？ もしかして注射？ 先端恐怖症？」

「さあ、どうでしょう。とにかく、ナイーブな人なんで、巧さんの前でこの話は遠慮してくださいさあい」

「難儀^{なんぎ}なお兄ちゃんやな。しゃきつとしい！ 別の取り留めのない

話したるわ」

背中をみかんにバチツと叩かれ、自分のヘタレさ加減を再確認する。結果が出るまでの間、俺達は社長室で待つことになった。社長は今、隣の部屋で遺伝子を調べている。

みかんは言ったとおり、かなりぶっ飛んだ馬鹿話を、”取り留めのない話”と称して喋り続けた。登場人物はみかんの周りの人間や、通りすがりの他人なのだが、こいつらのやる事成す事話す事が、コント並に弾けている。それでも作り話でも芸人でもなく、一般人のノンフィクションだというから驚きだ。電子なんか笑い過ぎて引き付けを起こしそうになっていた。

そうして1時間経ち、俺の気分もすっかり回復した頃、社長が検査結果を持って出て来た。

自分に掛かる重力を自在にコントロールする。これがみかんのシンポテだった。

「えー！ じゃこれからダイエットせんでも、身体測定の時、体重軽くできるやん」

「……嬉しいか？ 実際肉が減ったわけでもねえ、見た目も変わらねえっつーのに」

「ううっ、それもそうやな。よお考えたら、そないに嬉しないわ……」

別に痩せる程太ってねえのに、この辺の感覚は東京の女子高生と同じらしい。

興奮気味のみかんに待ったをかけたのは、「ダサッ！」と言われた社長だった。

「重力ってえのは一歩間違うと命取りや。体重軽かるするとか、飛び降りる衝撃を軽減するくらいやったら何ともないやろうけどな、お嬢ちゃんの皮膚や骨、内臓には何の強化機能も付いとらへん。極端な負荷の増減でどんなことが起きるか、儂わしもよう分からんねや。使うんやったら慎重にな」

「……？ うんうん、分かった分かった」

絶対分かってねえ……。話の後半、退屈そうに目がキョロキョロしてたぞ。遊びたい盛りざかの餓鬼には右から左の興味なしな内容だったか。

社長から受け取った結果の紙を持ち、次は才田の部屋に移動した。「任して。がつつりアピールして、派閥の内部事情を報告したるか」

廊下を歩きながら、みかんは意気込んだ。

「あのな、内部事情を調べて報告するのは俺達おとりの仕事だ。囃おとは余計なことしねえで、馬鹿っぽく見せてりゃあ良いんだ」

「それも任しときい。女子高生の特権的最強用語、”分かんない♪”があるから」

「……ああ、そうだな。それを連発してれば、才田もお前を警戒しないだろうな」

ふざけたドアの前まで来ると、例の儀式を思い出し、うんざりした俺はみかんにノックさせることにした。

「え？ そんなウザイン？」

「格好はイギリス紳士ぶってるけどな、儀式は幼稚園児のお遊ゆうぎ戯ぎレベルだ」

「ふうん、イギリスね」

コンッコンッコンッ……コンッコンッ！

お菓子のおとつとのCMみてえなリズムで叩いたみかんに、電子にさせれば良かったと思った。ドア越しに泉堂と思わしきオッサンが小さく噴出す音が聞こえる。

「あーぶく立ったゝ煮え立ったゝ♪煮えたか……」

そして例の儀式が始まった。

コンッコンッコンッ！

「何の音？」

「雀すずめが駒鳥こまどりを殺した音」

「あー良かった」

な、何が良かったんだよ！？ 縁起でもねえ。イギリス気取り相手だからって、マザー・グースを出してきやがった。みかんの奴あなど、侮れない……

コンッコンッコンッ！

「何の音？」

「蠅はえが駒鳥みどを看取った音」

「あー良かった」

いや、ちよつと待て。確かこの童謡は、かなり長かったような……

コココンッコン！

「何の音？」

「魚が駒鳥の血を受けた音」

「あー良かった」

コンッコンッコンッ！

「何の音」

「甲虫かぶとむしが……」

「長過ぎるだろ！ 省略しろ馬鹿っ！」

みかんを遮さかると、ドアの向こうから泉堂の舌打ちが聞こえた。……

この野郎、マザー・グースを楽しんでやがったな。

「……むう。せっかちな。お化けの音っ！」

「きゃー！」

………、ガチャリ

「ようこそ、才……がふう！」

初めて訪ねて来た時と同様、俺はこのこ顔を出した泉堂を、垂直に殴りつけたのだった。

天邪氣十道徳Ⅱ自己満足

「駒鳥こまどりの話、全部知ってるの？ 凄いね」

才田は少し驚いたように言った。今回は大音量の音楽は聞いていなかったようだ。

「お婆ちゃんがいギリス人やからあ、昔よく聞いててん」

みかんはシレッと言ったが、嘘っぽい。奴はクォーターの顔ではない。ヨーロッパの血なんぞ一滴も入ってなさそうだ。

「へ、へえ……、向こうじゃ子供が最初に触れる推理小説と言われるくらいだからね」

才田も「嘘つけっ！」と顔が物語っているが、さすがに馬鹿な側近相手に慣れているからか、一応信じたように返事をした。

完全に信じ切って乗り出したのは泉堂だった。

「そうやったんか！ 君い、おっちゃんとお話しようなあ」

「ええー、カブレてるだけの奴は嫌やあ」

「カ、カブレ……うう、まあ実際そうなんやがな……」

ただの馬鹿餓鬼と思っていたが、中々の毒舌らしい。しょぼくれる泉堂を見るのは楽しいが、マルチリンガルの才田に「英語で会話しよう」と言われたらどうするんだろうか。

「君は英語が喋れるの？」

考えてる傍そばから早速来たぞ。まさか独り体操選手権とかラピュタごっこするようなみかんが、本当にペラペラなんてこと……

「全然」

「え？ お祖母ばあさんがいギリス人なんでしょ？」

「うん、近所に親日家で日本語ペラペラないギリス人のお婆ちゃんがおってん。だから英語は知らん」

成る程、それなら本当っぽい。いや、本当なのかもしれないが。

「あ……ああ、お婆さんね。じゃあ仕方ないか」

「グらあンマやなかったか。残念」

「泉堂君、Grandmaだよ」

才田も何気に面倒臭^{から}えな。

それから俺がまた栗林に絡^{から}まれている間、電子とみかんは泉堂からイングリッシュ・ティーを振る舞われた。あからさまに俺にだけ入れないつもりだ。

「俺、コーヒー派だからいらね」

こちらまあからさまに言ってる。

すると才田が「僕もコーヒー派だよ」と言って、コーヒーメーカーを出して入れてくれた。食えない奴だと思っていたが、意外に気の利^きく良い奴的などころもあるようだ。敵^にだってえのに、全くもってやり難^{にく}いぞ。ちゃんと栗林の分も入れてやっている。ウザがってる割に面倒見も良いのか。

ふと電子の視線を感じる。そういえばコイツはカフェオレに目が無かったな。

「すまん、才田。牛乳ないか？」

「フレッシュ足りなかった？」

「いや、さっきからカフェオレ好きの視線を感じて、落ち着いて飲めねえんだ……」

結局俺のコーヒーは、電子に飲まれてしまったのだった。

今日のところは目立った収穫はなかった。それもそのはずだ、と同室のヨシオさんを見て気付く。

才田がどこまで俺を信用してるのかは分からないが、七佳の派閥の彼と同じ部屋で寝泊まりしているのだ。不用意に秘密を話して、俺がポロリと喋^{しゃべ}っちゃもう可能性だってある。探るなら様子を見るだ

けでなく、具体的に動かなければ、何も得られず終わってしまうだろう。

みかんは一端家に帰らせた。寮に泊まりたそうにしていたが、修学旅行気分なのが見え見えだった。

才田の裏情報が何も得られてない以上、いつ何が起こるか分からない。男の俺は寝る時までみかんを見張ることなんかできねえし、電子だけに任せるのも不安だ。

みかんには、明日の朝出直して来いと言って、日が暮れない内に追い出した。

布団をかぶり、どう具体的に動くか考えた。考えて考えて、考え抜いた時、あることに思い当たった。

才田どころか、側近2人も肝心なところで隙がないことに。馬鹿に見せて……いや実際馬鹿なのだが、そこに気を取られるあまり、奴らが才田の情報も漏らさなければ、自分達がどんなシンポテなのかさえ明かしていないことに気付かなかった。シンポテについては社員歴の長い七佳が知っているかもしれないが、潜入したというのに突っ込むのに忙しくて、そんなことも聞き出せていないとは、物凄く情けないと思った。

「……何やってんだろ、俺」

ため息混じりに呟くと、ヨシオさんが起き上がる気配がした。

「潜入のことかな？」

「ええまあ、そうですね。明後日には東京に帰るっていうのに、尻尾の毛すら掴めてねえ……」

「潜入捜査というのは焦ってはいけない。また来ればいいじゃないか」

「また七佳達と連れ立って、ですか？ 派閥変わったってのに、怪し過ぎでしょう。俺のシンポテだけじゃ、万が一の時役に立つ自信もねえし、単独でこっちに来ても……それこそ七佳が言ったように、ミイラ取りがミイラだ。帰ったらもうGPS見ながら仲間が待機してる、なんて安心な潜入の機会は作れませんよ。それに……」

みかんのことが気掛かりだ。やっぱり未成年はやめておくべきだった。俺達が帰ったら、あいつを見張っていらなくなる。

「みかんは夏休みが終わるまでの短期アルバイトってことになってますけど、もし才田が重力のシンポテを気に入って、本格的に取り込もうと考えたとしたら、新学期が始まろうが関係なくなる。才田が本当に行方不明者の件に関わっているなら、帰るまでに方を付けなきゃいけないんだ……！」

俺はいつからこんなに責任を感じる性格になったのだろう。独りでいた時は、長いものに巻かれ、成さないで何事も成らない方を好む、常に逃げの思考だった。

自己犠牲なんぞ糞喰らえ、正義何それ美味しいのか、と思っていたのに、今は自分から潜入を買って出た上に、他人の餓鬼の心配までしている。

「駄目なんですよ、今まで自分のためにしか動いたことなかったから、仲間に協力したり、餓鬼を気にかかけたりしようにも、どう動けば一番良いのか分からねえ……」

俺は気付いたら爪を噛んでいた。小さい頃親に「みっともないからやめろ」と言われ続け、もうとっくに治ったはずだったのに。

「巧君は、背負い込むのは初めてかい？」

「背負い込む……？」

少しの沈黙の後、ヨシオさんがぼつりと聞いてきたことの意味が理解出来ず、聞き返した。

「仲間が出来るというのはそういうことなのだよ。他人の人生に関わるのだからな」

そう言ってヨシオさんは煙草たばこに火を付けた。

薄暗い中、彼は何かを思い出すようにぼんやりと宙を見詰めた。この人がたまに煙草を吸う時は、決まってシリアスな雰囲気になるのだ。43年も生きているから、きっと天然なりに何かを背負っては失って来たのかもしれない。

「俺に他人の人生を背負い込む程の正義感があるとは思えません

けど」

「ハハッ、正義感か。そんな大袈裟なものじゃない。誰にでも多少は道德観念と言う名の自己満足があるのさ。世話になったから借りを返す、仲が良いから心配する、家族だから守る。全て道德の皮を被った自己満足だ。借りを返したい、心配したい、守りたいという欲求を満たしたに過ぎない。だが別に悪いことじゃあないんだよ」

「……相変わらず例えが長過ぎてよく分かりません」

「ううん、そうだなあ……仲間と人生を背負い合うことを、他人のために動くとか、正義感とか、そんな風あまのじゃくに捉とらえる必要はないんだ。守れば自分が満足出来る、くらいが天邪気な君には丁度良い。相手が一番満足する方法など、本人しか分からない。そんなことは考えなくても仕方ないから、やりたいように動くんだ。簡単だろう？ 君はどう動けば満足できる？」

ヨシオさんは口から器用に輪っかの煙をポツと出し、俺を見た。

「……餓鬼が行方不明になるくらいなら、自分が標的になった方が気が楽です」

「そのためには？」

「俺がもつと才田に擦り寄る……？」

「分かった。じゃあ俺は援護するよ」

何だ、本当に簡単だった。ひょっとして、才田の信用を得るための囷くろなんか探さず、始めからこうしてれば良かったのだろうか。張り切ってるみかんには悪いが、明日は来るなとメールしておこう。

「今日は確率出さないんですか？」

「100%の時は言わないのだよ。実は過去に守ろうとして”余計なお世話だ”と拒否されたことが何度かあるんだ。それでも自己満足のために守るのさ」

拒否されたのに守るとは、完全な自己満足だな。ヨシオさんらしいが。

気分がすっきりし、目を閉じると、途端に睡魔が襲ってきた。

それから翌朝電子が乏とぼしい血相けっそうを変えてドアを叩きに来るまで、

夢も見ずに眠った。

天邪氣十道徳Ⅱ自己満足（後書き）

ヨシオの語りを理解するには、最初と最後だけ読めば十分なのです

活躍し過ぎな囃とボンド・ガール

【あ士レ、ち^τッ了ヒO↓儿Uマ<ッ^τ<ゑЙë☆ おЙë
ちゃωあ、C≡3U<（*、σ↓、）】

「電子、お前は宇宙人とメル友になったのか？」

「違いますう！ みかさんのメールですよ」

電子が見せたメールは、どう見ても地球外生命体と交信したとしか思えないものだった。

朝っぱらから焦った様子の電子に起こされた俺とヨシオさんは、昨日の夜中に起こったことを聞いた。

どうやら俺が「明日は来るな」とメールしたことに不満を抱いたみかんは、電子にそのことを愚痴^{ぐち}つたらしい。その愚痴メールというのが暗号のような文字で送られてきたため、電子は解読に時間がかかり、返信する前にさっきの内容が来て、それからは音信不通だと言う。

「これはギャル文字というやつじゃないかな。以前店の同僚が、お客さんから来たメールが分からないと言って、頭を抱えていた。これと似たような文体だったぞ」

「ギャル文字ね……だが電子は女子高生時代からそんなにブランクないだろ。何でスラスラ読めないんだ？」

「むう、嫌味ですかあ？ ワタクシ、ずっとトイレの花子さんとして、学校の主的な存在^{ぬし}だったんで、メールするようなお友達なんていませんでした！」

威張^{いば}って言うことかよ。主^{しゅ}ってえよりは、地縛^{じばく}霊^{れい}だと思われてそう
だ。

「巧さん、みかんさんに”来るな”とだけ送ったそうですね。最初のメールは、それに対する不満でした。”意味分かんない！”とか、”マジム力つく！”とか……、解読に30分くらいかかったや
いましたよお」

GPSによると、みかんは既に才田の部屋に着いていたようだ。食い止めるのは間に合わなかった。

まったく、よく女一人で男の部屋を訪ねられるものだ。危機感も貞操観念もないのだろうか。才田は朝っぱらから女子高生を襲うようなタイプには見えねえが、泉堂はロリコン入ってそうだし、栗林はポスト・クリリンを狙って18号のような気の強い女を探している。部屋にいる間は行方不明にはならずとも、無事とは限らないのだ。

「昨日巧に盗聴器持たせて、あいつの部屋に仕掛けといってもらたら良かったな……」

七佳は険しい顔で呟いた。盗聴器まで用意できるなんて、恐ろしい会社だ。

「とりあえず、今あたしらは下手に動かれへん。みかんって子が無難に上手いこと取り入ってくれるのを祈るしかないわ」

「現役キャバ嬢の私の方が、男に取り入るの上手いのにい」

見当違いなことで不満顔をしているのはまりさんだ。普段なら「この尻軽侯治郎！」と罵ってやるところだが、今は危険が迫るならみかんよりコイツの方がはるかにマシだ。ニューハーフが襲われようがシリコン割られようが、ちっとも心が痛まない。

「今は祈るとして、この後部屋を出て動き出したらどうすんだ？

全員でゾロゾロ尾行するわけにもいかねーだろうし……」

「せやねん。誰が尾行するかやねんなあ。あたしは4年前に巧からぼろ糞に言われたから苦手分野やし……」

七佳の尾行音痴は折紙付きだ。単に追いかけるだけなら良いが、まづ腹が出ていて咄嗟に隠れられない。これは俺と七佳が最初に接触した時に確認済みである。

「尾行ならワタクシが得意ですう」

電子が手を挙げた。

「得意……ってどういうことだ？」

「シンポテで気配を完全に消せるからですよ。」

「そうか、七佳みてえに邪魔な腹もねえしな」

「シバいたるか巧っ！」

満月顔になった七佳はさておき、怨霊が尾行に向いているとは意外な事実だ。ひよっとして、シンポテレンジャーの中では電子が一番活躍してるんじゃないだろうか。

「もしみかんさんに危険が迫ったら、逆に気配を大きくして足止めくらいは出来ますし」

「おい、足止めって、一人で尾行する気なのか？」

まるで一人でその場を何とか切り抜けるといような言い方に、少し驚いた。

「はいそうですう。だって他の誰も気配消せないじゃないですかあ」「それは……そうだけだよ……」

電子の言い分はもっともなのだが、今までずっと俺の後ろをベタベタくっついてきたから、一人で行動できるのか物凄く不安になる。

「もおドンカーン！ タクミンは可愛い電子ちゃんのことか心配で仕方ないのよお」

いきなりまりさんが電子の背中を叩き、とんでもないことを言い出した。

「え、おいっ！？ そんなことは言ってね……」

「ひよおとおおっ！ とうとう相思相愛になったのですねええっ！？ 全っ然分かりませんでしたあ！」

「タクミンは気難しいからそのものスバツとは言わないのよ」俺の意志を無視して、勝手な妄想は進んで行く。加えて横で七佳が鼻を膨らませながらニヤニヤしているものだから、更にムカつく。

「ハハハッ、束縛のし過ぎは良くないぞ。74%の確率で振られてしまう。可愛い子には旅をさせろと言うじゃないか」

「……可愛いくないんで、旅はさせなくて良いです」

「電子ちゃん、天邪気な巧君は可愛いと言っているぞ」
あまのじやく

「ひよおおおっ！」

「そこで天邪気を出すなっ！ 電子も信じてんじゃねえ！ お前がそんな乗せられ易いから、一人で行かせるのが不安なんだ！」

くだらないことで騒いでいると、急に七佳が口到人差し指を当てて、GPSの画面を睨み付けた。

「……動いたで」

「みかん一人でか？」

「いんや、才田と側近達も一緒や」

もう取り入ったというのか？ 早いな。才田が気を許したのか、オッサンとキューピー頭が騙されたのかは分からないが、最近の女子高生はマジで半端ない。

「巧さあん、お気持ちは光栄ですけど、ワタクシ行ってきまあす」
「あっ、こら待て！」

俺の制止も聞かず、電子は急いで社長室を出て行った。

「振られたな、巧……あたたたっ！」

七佳まで余計な茶々を入れたから、ニンマリ笑って横にはみ出した頬の肉を捻り上げてやった。

ボンドがボンド・ガールにおいてきぼりを食らうなんてアリなのか？

七佳コースター

GPSでみかんの行き先を見ていると、途中で七佳が舌打ちをした。

「TNHに近いな……」

「何だって!？」

TNHとは、表向きは製薬会社、裏は俺達のようなシンポテを持つ者を集めては研究、人体実験を行っている関西の組織だ。

「……そこへ向かってるとしたら、才田は派閥内の仲間を研究者に売っていったってことか？」

「そうなるな。あいつ何やってんねん……!阿保でも変人でも、同じ世間から除^のけ者にされてきた仲間やのに。自分の会社を新たに創^{つく}ろうとしてる、くらいに思ってたけど、まさか敵の組織と繋がってたやなんて……」

その時、俺の携帯が鳴った。電子からだ。

「あのお、4人で会社っぽい敷地に入ろうとしてるみたいなんですけど……TNH製薬所って看板が出てますう」

「入る前に足止めしろ!みかん達がぶっ倒れてもこの際仕方ねえ。俺達もすぐ行くからな!」

慌てて出て行こうとすると、社長が大きめのダンボールを出して来た。

「さっすが社長! 仕事が早いな」

「……おい、もたもたしてねえで行くぞ」

俺が急^せかすも、七佳はダンボールを漁^{あさ}りだした。

「ちんたら走ってたら間に合わんやろ。はい、皆これ付けて渡されたのは、七佳が好きなショッキング・ピンクのヘルメット、同じ色の膝当て、肘当て、そして……ローラースケート……?」

「何なんだよ、これで滑^{すべ}って行けってか？」

「いやあん、チョー懐かし〜!」

「ふむ、昔これを履いたアイドルグループが流行ったなあ」

「はいはい、説明は後や。さっさと付ける！ 特に巧、あんたはセンスがどうこううるさいから何も言うな」

意味も分らず強制的に渡された物を付け、ビルの玄関前でローラースケートを履いた。正直かなり目立って恥ずかしい。せめてローラースケートじゃなくて、ローラーブレードなら良かったのだが。そんなことを七佳に求めても無駄か。

「付けた？ ほな皆縦に並んで」

七佳に言われたとおり、適当に並ぶ。まりさん、俺、ヨシオさんの順だ。

「次に前の人の腰をしっかりと抱えて。まりりんはあたしの腰やで。

……………おおう、肩に爆乳がズッシリくるなあ」

”説明は後”とか言ってたが、そんなものはする気自体なさそうだ。

「しっかりと持つとかな、振り落とされるで。ほな、……行くでっ！」

先頭の七佳が地面を蹴った瞬間、俺達は縦に繋がったまま急発進した。

「余計なこと喋ったら舌嚙むでえ！ それからカーブはちゃんと体傾けえや！」

何やら指示が飛んできたが、返事をする余裕なんぞない。でんでんタウンの裏道や人気もまばらな道路を、ショッキン・ピンクの列がジェットコースターのようなスピードで駆け抜ける。俺が振り落とされるとヨシオさんまで巻き添えだから、必死でまりさんの腰にしがみついた。時折道に捨ててあったゴミ等に足を取られそうになるのを踏ん張って耐える。

「あ、見えた！ 電子達や！」

見えたなら止まらないといけないのに、七佳の馬鹿はスピードを更に上げた。不審に思って覗こうにも、バランスが崩れるのが怖くて出来ない。

スッコオオオーン！

ボウリングでストライクを出した時のような小気味の良い音がして、先頭の七佳が何かにぶつかったような感覚がした。同時に4人一緒に横へ投げ出される。

「うぐっ……」

かなりのスピードと衝撃だったが、あらかじめ付けていたヘルメットとサポーターのおかげで、怪我はしなかった。

辺りを見ると、呆然とした電子とみかん、才田、そして俺達が滑ってきた方向の遙か先に、泉堂と栗林がノビていた。恐らくさっきの音は、七佳とこいつら2人が勢い良くぶつかった時のものだろう。「ほら皆目え回しとらんと、早よ立ちい！ 決めるで！ 人権戦隊っ！」

『シンポテレンジャー！！』

5人の声がハモツた。……いや、俺は恥ずかしいから小さく言っただけなのだが。ここで言わなかったら後で七佳にやいやい攻撃されそうだから仕方ないのだ。

「ぶっっ！ マジでえ！？ めっさカッコイイやん！ アタシも入れてえなあ……うぎゃっ！」

「お前は^{おとし}囧だ、未成年！ ったく勝手なことしやがって……」
まずは行動力あり過ぎな^{げんこつ}囧に拳骨を食らわせる。

「才田！ あんたここがどういう所か知ってるやろ！？」

七佳がビシッ！ と指を突きつけ、才田を問い詰めた。そこでようやく、10秒ほど前の衝撃的な登場劇から我に返った才田は、下を向いてクスクスと笑い始めた。

「田ノ中ってほんと、予測不可能なことするよね。普通に出て来れないの？」

「うるさいっ！ そんなにどうでもええやろ！ あんたまさか、T NHに仲間売ってんの！？」

スッと視線を上げた才田の目は、笑っていなかった。口元にはいつものニヒルな笑みを浮かべているというのに。

「売るなんて人聞きの悪い。報酬は貰ってないよ。紹介してるだけ

なんだ。それに無理矢理連れてきたことはない。多少遠まわしな言い方で、ここに来てみない？　って誘ってるだけだよ」

「……それを……、騙くらかして売ると言ーんじゃヴォケエー！」

七佳はどこからともなく白い物を出し、才田目掛けて繰り出した。だが才田はそれをスマートに避け、スカされた七佳は悔しそうに地団駄を踏んだ。

「何だそりゃ？」

「ハリセンやつ！　見た分かるやろ、ジョーシキやで」

「……知らねーよ。ってかいつ用意したんだ、そんな物」

「大阪府民の必須アイテムや」

「ええー、アタシ持ってないで。ネタが古過ぎやわ」

一瞬信じかけたが、みかんが即座に否定した。七佳のネタは古いらしい。

「……コホン、と、とにかく才田、これは見逃され……あつ、逃げんな！　待ちい！」

才田は七佳のコントを見る気はさらさらないようで、気が付くとT NHのビルの中へ入ろうとしていた。復活した泉堂も彼の背中に続く。それを追おうとすると、多少よろついた栗林が俺達の前に立ち塞がった。

相変わらずの痛々しいキューピー頭の下にはオレンジの点が6つ。だが昨日より少し掠れている。みかんが早朝に訪ねてきたから、書き足せなかったのだろうか。

「よお騙してくれたな。その貧血姉ちゃんが悪霊化して襲って来るまで、うっかり信じてもーたわ」

「……いや、せめて今朝急にみかんが押しかけた時点で気付けよ」
我ながら明らかに怪しい潜入だったと思うが。俺に情報を与えなかったのは、隙がないんじゃないかと、ただ何も考えてなかっただけらしい。寝る前あんなに悩んだのが馬鹿みてえだ。

「う、うるさいっ！　お前は天津飯として盟友になれるう思ったのに！」

「何言^ゆーてんねん栗坊主！ 巧は既に人権戦隊・シンポテレンジャ
ーのブルーっちゅうキャラやねんからな！」

俺が言い返す前に、七佳が反論した。本当のあだ名はクリリンじゃ
なく、栗坊主だったのか。

「くう！ 何やその楽しそうなチームは！？」

「ヘッヘ、格好ええやろ」

「あうう……いやいや、そんな羨^{うらや}ましいぞ！ 天津飯の協力な
んかなくても、神龍^{シエンロン}は俺一人で呼び出してみせるっ！！」

あーそーか、頑張れ。と、心の中で生温く応援しておく。架空のキ
ャラを呼び出すのは一人でやってくれ。俺を巻き込むな。

こちらを睨み付ける栗林は両手を組み、バキバキツと音を鳴らせ
……損^{そこ}ねた。本気で格好悪い。だが奴はそんなことなど気にも止め
ず、不敵に笑った。

「さあて、ここを通りたかったら、まず俺を倒してみろや」

少年コミックのセオリーに沿った王道な展開に、少し面倒臭くなっ
た。何だこの「ちゃんと全キャラの見せ場を作るために順番に戦い
ましょう」的な発想。漫画の中ならまだしも、現実では省略させて
欲しい。

「……おい七佳。あんな馬鹿に時間を取られるのは嫌だ。ちゃっ
ちやと片付けようぜ。栗林のシンポテは何なんだ？」

キューピー野郎本人に聞かれると、また絡まれそうだから、コッソ
リ七佳に耳打ちする。

「……うーんと、確かなあ、雷撃を撃ってたと思う」

派閥の違う社員の技はあまり詳しく知らないようで、七佳は思い出
すように言った。

「雷撃？ 思い切り危ねえじゃねーか」

「いや、体に静電気を溜^ためて、それを放出するだけやから、けっこ
うショボかったと思う」

「コラッ！ 聞こえとんのじゃっ！！ ショボー言^ゆーな！」

いくら俺が小声で聞いても、七佳の小声は人よりでかいから、意味

がなかったようだ。

「ナメんなっ！ 洗濯機の電源くらいは入れれる威力なんやぞ！」
「具体的過ぎてイメージが湧かねえんだよ！」

電化製品が漏電ろうでんしたくらいの威力だろうか？ 雷と比べればシヨボイが、食らったらけっこうクるかもしれない。

俺が威力を想像している内に、栗林は何かを取り出した。高々と持ち上げられたそれは、太陽を浴びて赤く光る。

あ……、あれはっ！？

「……下敷きか？」

「下敷きやな」

「マジでか……？」

「残念なことに、栗坊主はいつでもマジや」

栗林が取り出したのは、赤い半透明の下敷きだった。暗記の試験勉強の時に活躍するやつだ。あれを使った静電気の起こし方といえ
ば、一つしか思い浮かばねえ！

七佳コースター（後書き）

Q. ヨシオの確率はどうやって弾き出してるの？

A. 長年の経験をもとに出している……らしいです。彼の名誉のためにも、深く考えてはいけません。

産毛、最後の闘い

スシャシャシャシャシャ……

案の定、栗林は懸命に生え残ろうとしている産毛うぶげの上から、赤い下敷きを高速で擦り付けた。小学生以外でこんなことをやってる奴は初めて見る。きつとこのために栗林の毛根は死滅しかけているのだろう。確かに下敷きで髪を擦れば静電気を起こし易いが……

「……やめてやれよ。毛だって必死に生きてんだぞ」

見ているだけで痛々しく、今にも産毛うぶげの断末魔だんまつまが聞こえそうで、とりあえず忠告した。

「大丈夫や！ お前ならイケる！ 頑張れ栗毛っ！」

「……」

栗林は自分の産毛かっに喝を入れ、更に擦るスピードを上げた。

もう、何も言うまい……

程なくして栗林は、下敷きを取ると、脳天を俺達に向けて突き出した。

「食らえ！ 太陽拳っ！！」

刹那、奴の頭が青白く光る！

「マジかっ！？ 全然シヨボくねえぞ！ 食らったらシャレになんねえ！」

「雷撃っちゅう割にはシヨボイだけや！ 皆散れっ！」

パビデッ！

栗林の放った青白い光は、一瞬不規則なジグザグを描き、コンクリートにぶつかって散った。

「ふははははっ！ 見たか俺の太陽拳！」

「本来の主旨しゅしとは全く違うじゃねーかっ！ 太陽拳は光って終わりなんだぞ！」

「俺のは光らせるだけちゃうって言ーたはずや！ そおら、もういっちょよ！」

スシャシャシャ……パビヂッ！
スシャシャシャ……パビヂッ！

栗林は勢いづき、自称太陽拳を連発して繰り出した。腐ってもシヨボくても雷撃だ。軌道が見えないから、奴が突き出す頭の方角から勘で避けることしかできない。

「クソッ、迂闊に近寄れねえ……」

「はいはいっ！ アタシが上から攻撃するう！」

現状を打破する方法を思い付けないでいると、みかんが張り切って手を挙げた。

「上から攻撃って……お前は浮くだけだろ。どうやって攻撃すんだよ」

「浮くのを利用した未知の必殺技、”メテオ・ストライク”があるねん」

「はあ？ お前、隕石引き寄せて落とせるのか？」

みかんは重力を操るシンポテだから、何だか出来そうな気がしないでもない。だが危機感の薄い女子高生の考えることには、悪い予感しかない。 ”未知の” 必殺技って言うてたから、「やったことないけど試してみよっかな」程度の思い付きだろう。

「ちやうし！ アタシが隕石になるんや。雲の上まで上がって、そこから一気に重力かけまくって突っ込むねん。ほな、行ってきまあす！」

そう言うって地面を蹴ったみかんは、ふわふわと風船のように高く上がって行った。

「あ、待てっ！ 突っ込むつつても、お前の体は強化されないから……っうわっ！」

言い終わる前に栗林の雷撃が飛んでくる。みかんはかなり小さくなっってしまった。

避けて転がり込んだ先にはヨシオさんがいた。

「みかんが人間メテオ・ストライクやるって、昇って行きましたけど、ヤバイですよね？」

「何だって……？ 隕石は宇宙の鉱物が、大気の摩擦で燃えてるんだぞ。人間の蛋白質たんぱくしつなんて、地上に到達する前に燃え尽きてしまうじゃないか」

「……いや、燃え尽きる前に熱くて本人が落ちるのやめるでしょ……。それに大気圏外まで昇るのは、いくら馬鹿でも苦し過ぎて断念すると思います。そういうことじゃなくてですね、肉体的に何も強化されてないみかんが、高い所から敵に突っ込むのが危険なんじゃないかってことを言いたいんです」

ああ、何でヨシオさんはいちいち面倒臭い考え方をするんだ。

「最近の女子高生はハードだなあ。下に救助用のトランポリンでも敷いてやらねば」

「……この状況でどうやって？」

もういいや。ヨシオさんに相談したって今更どうしようもない。途中で気付いて戻って来るかもしれないし、栗林の雷撃が飛び交う地上よりは空の方が安全だ。

しかし栗林の最後の産毛達はしぶといな。あれがなくなれば、何とか近づいて倒せそうなんだが……。

そんなことを考える俺の視界に入ったのは、必死で逃げ惑う爆乳ニューハーフ。

「そうだ、まりさん、出番だぞっ！」

「ええ〜！ 何でよお」

「人間盾なんだろう！？」

確かまりさんは自分のシンポテをそう表現していたはずだ。このまま逃げ回り続けても、栗林の毛根が尽きて散る前に、俺達の体力がもたない。しばらくガード出来るものが欲しい。

物凄く名案だと思ったのだが、肝心のまりさんは顔を引き攣ひきこらせて、首を横にブンブン振った。

「いくら皮膚と筋肉を硬化させても感電はしちゃうってば！ 雷撃は管轄外かんかつがいよ！」

「タマ取る勇気があるなら堪こたえろっ！」

「ちよっ、どんな理屈よお！　どんだけドSう！？」

言い争っている内にまりさんが足を縛もつれさせた。ここぞとばかりに栗林がそれを目掛けて攻撃する！

バチンッ！

「……………あ、あれ？　痛くなあい」

まりさんは首を傾かしげながら、自分の体は何ともないか確かめた。すぐ近くで見ていた俺には何が起こったのか分からない。

「ヨッシー！」

七佳が叫んでガッツポーズをしたからヨシオさんを見ると、彼は片鼻を潰して仁王立ちしていた。

「くっそー、やりやがったなっ！」

栗林は悔しがり、また下敷きを擦る。と同時に慌ててヨシオさんはポケットから何かを取り出し、鼻に詰めた。

「太陽拳！」

「ふんっ！」

バチンッ！

「うあたっ！」

栗林が額を押さえて呻うめく。

「ハッハッハッ、社長に特製の鉄弾てつだまを貰ったのだよ。これなら雷撃を吸収しつつ、攻撃もできるっ！」

ヨシオさんは自信たっぷりたまに胸を張った。どうやら彼は昨日までの間に、豆鉄砲用の弾たまを、社長に特注で作ってもらっていたようだ。

「……汚いもんだてんな！　太陽拳！」

「ふんっ！」

バチンッ！

「ぐあっ！……………負けるかあ、太陽拳！」

「ふんっ！」

この何ともマヌケな攻防戦の隙にビルの中へ入りたいが、栗林が入口前を陣取っているため、流れ弾たまの餌食えじきになりそうだ。

というわけで栗林とヨシオさん以外は暇になってしまった。手持

ち無沙汰むさたになった俺は七佳に近寄った。

「いいよな、お前はシンポテで楽々よ避けれて」

「はん、僻ひがみなや」

「ところで、社長はいつの間にあの鉄弾を造ったんだ？ 特注の割には早いな」

「ああ、社員に胃の中で鍊金れんきん出来る奴がおんねん」

そうか、と言いかけてふと気付いた。とてつもなく気持ち悪いことに。

「あのさ、胃の中で鍊金した鉄弾はどこから……？」

「そんなん決まってるやん。食べたものがどこから出て来るか考えてみい」

「……ってことは、ヨシオさんは今、社員のアレから出て来たものを鼻に？」

「ザツツライト！ 因みにあまりにもエグイ話やから、ヨッシーはこのことは知らんねん。あんたも言ゆーたらあかんで。世の中には、知らん方がええこともある」

……ちゃんと洗ってあるんだろうな。ヨシオさん可哀相に。後で消毒液と綿棒を買ってあげよう。

「ぬああああっ！？ 栗毛ええ！ しっかりしせえっ！！」

突然、栗林の絶叫が響いた。どうやら産毛達が逝いったようだ。

「ふんっ、ふんっ、ふんぬっ！」

「うがっ！ ブフツ、……ぬおお！」

好機とばかりにヨシオさんが連続攻撃を仕掛け、とうとう栗林は倒れ込んだ。

「やった、すげえぞヨシオさん！」

俺は手を叩いて走り寄る。栗林と同時に力尽きて倒れ込んだまま顔を上げた彼は……両鼻から血をダラダラ流していた。

そうだ、鼻の粘膜は人並みだった……！ しかもふんふんやり過ぎて酸欠になったのか、電子みてえに顔色が悪い。

「お……俺の屍しかばねを越えて行けえ！」

「ありがとうヨシオさん！ 尊い犠牲は無駄にはしない！ みかんが降りて来たら頼みます。先を急ぐぞ、皆っ！」

「どうおっ、うげえっ、あがつ、むぐう……」

俺、七佳、まりさん、雹子の順にヨシオさんを跨またいで飛び越し、ノビてる栗林をきっちり一踏みずつしてからビルの中に入って行った。

デリケートな男

鼻血を流すヨシオさんを跨またぎながら思った。今度から、何とか吹き矢の筒のようなものを使って鉄弾を飛ばしてもらえよう、交渉しよう。血の苦手な俺が、見て即ぶっ倒れるような大怪我ではなかったが、鼻血にしては出血が多かった。若干指先が冷たくなってしまったじゃないか。俺ってマジで戦闘に向いてない。

TNHのビルに入っすぐ、デスクが見えた。人はいないが、代わりに電話機と、【ご用の方は内線0012でご連絡ください】と書かれたプレートがあった。恐らくこの空っぽのデスクが受付なのだろう。どうりで外でドンパチやっけていても、誰も出て来なかったわけだ。最近是人件費削減で、受付に人を置かない企業も増えている。不況の波は、怪しい製薬会社にも影響しているのかもしれない。そのままデスクを素通りして奥へ進もうとすると、七佳が慌てて引き止めた。

「阿保っ！　ちゃんと内線かけな、不法侵入やで！」

「裏切り者の敵を追ってるのにそんな悠長な……」

「表向きは普通の製薬会社やあ言いったやろ。こっちも堂々と入れれば向こうも下手に逃げられへん」

七佳はそう言っ内線をかけた。

「……………、あつ、すいませーん。才田君に呼ばれて来たんですけどお。……………はい、はい、はい」

意外とすんなり話を通じたらしく、受話器を置いた七佳はニンマリ笑って親指を立てた。

ああ、何だろうこの勢いに乗り切れない緊張感の無さ……

間もなく白衣を着、眼鏡を掛けたいかにも研究者といった風体ふうていの男が駆かけて来た。

「いやあ、才田君は凄いなあ。今回は4人も標本体……ウオッホン、被験者を連れて来てくれたやなんて」

” ひようほんたい ” という不審な単語を言いかけた眼鏡野郎は、俺達を見回すと、嬉しそうに会社の奥へと促した。

研究者について行こうとすると、後ろから誰かパタパタと走る音が聞こえた。

「さつぶ！ マジで寒かったってえ！」

何やら喚きながら追い付いて来たのはみかんだった。大人しく外でヨシオさんと待っていてくれりゃ良かったのに。

「……メテオ・ストライクはどうだったんだ？」

とりあえず無事だったようでほんの少し安心したが、苛立ちの方が勝っていた。

「聞いてえや！ ええ感じで昇ってったんやけど、だんだん空気が冷たなってきたな、夏とは思われへんくらい寒なってん。だからフリーフォールで下りて来たわ」

「まあ、そんな薄着じゃ寒いだろうな」

「何でや！？ イカロスは太陽に向かって飛んで行ったら、暑くて蠟で固めた鳥の羽が溶けて落っこちてんで！」

みかんは信じられないと言った顔で口を尖らせた。

何だってこんな馬鹿そうな餓鬼がイカロスの話を知ってるんだ。

面倒臭え……

「ギリシャ神話と現実をごっちゃにするな。エベレストもヒマラヤも、高い山はてっぺんが年中雪で覆われてるだろ？ 標高が高くなると気温は低くなる。小学校の理科で習うぞ、これくらい」

「そんなん覚えてないし！」

俺の馬鹿にしたような言い方がムカついたのか、みかんは逆ギレした。

「何でマザー・グースとかイカロス知ってる奴が、んな基本的なこと知らねえんだよ……。どんだけ偏った知識してんだ」

「アタシ理数系は苦手やもん！」

「威張るな馬鹿餓鬼っ！」

「そこまでえっ！」

俺とみかんの言い合いは七佳によって遮かざられた。

ハッとなって振り向くと、顰しかめっ面七佳と首を傾げた研究者。

「あ……どうぞお気になさらずに……。行きましょう」

「は、はあ、そーですかあ……」

ヤバかった……。上手く誤魔化ごまかせただろうか。餓鬼相手の喧嘩に夢中になって、いけないことまで喋しゃべっちまうところだった。

眼鏡研究者に「担当が来るまで待っているように」と言われて通された部屋は、ガランとした広めのスペースで、真ん中に無機質な机と、それを囲むようにパイプ椅子が並べられていた。

「あ、お茶が入れるようになってるう」

まりさんが言ったように、机には急須きゅうすといくつかの湯呑み、お茶っ葉、ポットが置いてある。

「ワタクシさっき久々にフルパワーでシンポテ使ったから、喉がカララですう。少し休まないと、エンスト起こしちゃいそうですよお……」

普段より更に青白い顔をした電子が椅子に座って言った。

「エンストって、お前のシンポテは何回も使えないのか？」

「はい。使った気配の大きさにもよりますけど」

「才田達を足止めた時はフルパワーだったのか？ その割にあいつら吐いたりしてなかったな……」

疑問に思って考えていると、電子は申し訳なさそうに首をすぼめた。「あのお……非常に言い難にくいんですがあ、オレンジジュースとカフェオレのミックスの時といい、ワタクシのちよっとしたシンポテを浴びた時といい、採血の時といい……、多分巧さんは人よりかなり

デリケートに出来てるんじゃないかと……」

「デ、デリケート……」

「ブフッ！」

男なのにデリケートだと言われて軽くショックを受けていると、それを聞いた七佳が噴き出した。

「何や、どこの無菌室で育ったお坊ちゃまやねん！ アハハハッ」

「うるせえ！ お前にはデリケートのデの字もないだろ！ どこのジャングルで育った女なんだよ！」

「はあ？ あたしは元オリンピック選手の両親から産まれたサラブレッドやで！」

「その腹でサラブレッド言うな！」

ガチャンッ

突然耳障りな音が響く。見るとお茶の入った湯呑みが床に落ちて砕け、電子が机に突っ伏していた。

「おい、電子？ おいっ！？」

呼びかけても返事はない。だが小さく寝息が聞こえる。寝ているだけのようだ。

「一体どうしたんだよ？ 疲れて眠るにしては早過ぎないか？」

急須で全員のお茶を入れていたまりさんとみかんに尋ねる。

「わ、分かん。飲みたそうにしてたから、一番に入れて渡してん」

「そうそう。それを電子ちゃんが一気に飲み干したら、いきなりガクッてなったのよ」

俺は急いでお茶っ葉を調べた。変わった様子はない。

次にポットを開けた。漂う湯気からかすかに匂いを感じる。

「睡眠薬だ……」

「えっ！？ ほんまか巧！」

七佳が乗り出して来た。

「ああ、お湯の方にあらかじめ溶かしてあるみてえだ。睡眠薬の匂いがある」

「ん？ 何も匂わんで」

「俺のシンポテは匂いを操ってんだぞ。こういう妙な成分の入った匂いには敏感なんだ」

「デリケートやしな……いたたっ！」

余計なことを言う七佳の頬を捻り^{ねじ}って黙らせる。

「クソッ、怪しい製薬会社がまともな茶なんて用意してるわけなかったか」

「担当者が来るまでに起こさなあかん。巧、あんた何か強烈にクツサイ臭い嗅^かがせえや」

臭い……世界一臭い物と言えばシュールストレミングだよな。にしんの缶詰の。実際に嗅いだことはないが、やってみるか。

ふんっ……と息を止めて指先に集中し、頭に思い浮かべたのは、バラエティー番組で見た腐ったにしんの缶詰。そしてお決まりのように鼻を押さえて崩れ落ちる人達。

俺は息を止めたまま指を電子の鼻先に近づけた。

「ぬげぐあるああああっ!!」

怨霊の断末魔のような声を出した電子は、一瞬にして跳び起きた。どうやら成功したようだ。

「臭っ！」

「やあだクツサ」

「あ、臭っ！ うわ臭っ！」

部屋に臭いが広がると嫌だから、ほんの1秒くらいでシンポテを止めたのだが、意味はなかったようだ。他の奴らも次々と顔を顰^{しか}め出す。俺もずっと息をしない訳にはいかなから、恐る恐る吸ってみた。

「うぐっ……何だこりゃ」

それは腐卵臭^{ふらんしゅう}に酸っぱい臭いが混じったような、何とも悶^{もだ}えたくないものだった。

「あかん！ デリケートな巧がやられてまう！ 皆早^はよ窓開けて！」
俯^{うつむ}いた俺の様子を見た七佳が叫んだ。一斉に皆が窓を開けに走る。
クーラーの効いた部屋に生暖かい風が吹き込んだ。

助かった、と思うと同時に、俺は軽く自己嫌悪したのだった。

探し物は何ですか？ 見つけにくいものですか？

シュールストレミングの臭いがだいぶ薄まった頃、ようやく担当者が部屋に入ってきた。見た目はここへ俺達を案内した奴とそう変わらない。白衣を着た、研究以外何もできません！ といった感じの男だ。

「あ、あれ？」

恐らく俺達が眠っていると踏んでいたのだろうが、誰も眠らず一斉に振り返ったものだから、そいつはオタオタと慌てだした。

「とおおっても美味しいお茶を、ありがとうございましたああっ！」
電子が切れ気味に詰め寄る。唯一の被害者だから当然だ。

「ひいっ！……ムップ！」

「ちよつとお、逃がさないわよ」

担当者が踵かかとを返そうとするのを、まりさんが先回りして立ち塞ふさがった。男の中でも長身な方のまりさんだから、慌てたそいつはもろに爆乳の谷間へ顔を突っ込んだ。シリコンだからちつとも羨ましくない。

「私達はあ、ひろろんっていう可愛い坊やに用があるのお。案内してちょうだい？」

まりさんは担当者をぐっと抱え込み、小さい子供を諭さとすように言った。もがく担当者は窒息しそうだ。

「ひ、ひろろんって才田のこと？ どうわっはっは！ 何やそれ最高やな」

才田の名前は陽路ひろろ、で”ひろろん”か。七佳にとってはツボだったようだ。腹を抱えて笑っている。

「だってえ、私がまりで”まりりん”だもん。ひろは”ひろろん”に決まってるじゃん」

「ほなあたしは”なののん”やな。皆、今から才田をひろろんって呼びいゃ」

「……呼び方変えるメリットなんかあんのかよ」

また七佳の思いつきが始まった。才田も可哀想に。仲間を売るのは許せねえが、面白ければ何でもOK、という考えの同僚が近くにいたんじゃ、ふと魔が差す気持ちも分からなくはない。

「あ、そのジト目は”くだらねえ”とか思ってるやろ。ちゃうで、才田みたいな頭のいい奴は、心理作戦で崩すのが有効やねん」

「あいつならスマートに流しそうだがな」

「お兄ちゃん、そうでもないと思うで」

俺の予想に首を振ったのはみかんだった。

「今朝アタシが”さいちゃん”とか”さいだっち”とか親しみを込めて呼んだら、ちょっとびっくりして口がパクパクしてたもん。あいう賢い委員長タイプって、絶対あだ名付けられるのに慣れてないはずや」

「そ、そうか……」

人当たりが良いとは言え年上で、曲がりなりにも敵のボスに、いきなりフランク&フレンドリーに話しかけられるとは……。若さってのは時に恐ろしい。

「まりさあん、担当者の人、けいれん痙攣してますよお。そろそろ離さないと、殺人犯になっちゃいますう」

電子がちっとも心配してなさそうな軽い口調で言った。こいつは裏でけっこうエグイ性格してるから、きつと”睡眠薬を飲ませた奴がどうなろうと知ったこっちゃないけど、仲間が犯罪者になるから止めてあげよう”とでも思ってるんだろう。その証拠に、ぐったりした担当者を見る目が微妙に笑っている。

「あらら、やり過ぎちゃったかしら。魅力的な爆乳は時に罪よね」
まりさんは頬に手を当ててため息をついた。

「いや、それは違うぞ。ただ窒息しかかったただけだ」

「もー、タクミンってば羨ましかったのお？ あまのじやく天邪鬼なんだから」

「ひよおとおっ！ 巧さんは貧乳好きなはずですうう！」

「電子！ あし顎砕かれたいか！？ 俣治郎！ シリコン割るぞ！ お

前らが喋ると話が進まねえから黙ってろ！」

ただちよつと担当者を脅して才田の所に案内させるだけで、どれだけ回り道をしなきゃいけないんだ。肝心な担当者は白目を剥^むいちまった。ああ、胃が痛い……

極弱だった担当者が目を覚ます気配は、当分なさそうだったため、俺達は自分で探す羽目になってしまった。

今、人^{ひと}気のない廊下を堂々と歩いている。一端客として中に案内されたのだから、コソコソする必要はない、ということらしい。七佳の見解だから、あまり常識的とは言えない。それでもあの部屋で悶々^{もんもん}と待つわけにはいかないから、皆で連れ立ち才田探しをしている。

「ひろろーん！ どこやあ？」

「ひろろんさあん！」

「ひろろおん、お姉さんの胸に飛び込んでおいでえ！」

「ひろろろっちー、あーそーぼっ！」

「……………」

それぞれが才田を呼ぶ。俺が奴なら恥ずかしくて出て来れないだろう。

「お静かに！」

とうとう通りがかった研究者3人目に怒られた。まあ、この場合は向こうが正しい。

「どなたですか？ わが社の方ではないようですが」

「あ、すいませーん。ひろ…」

「俺達、今日から才田君の手伝いをする事になって呼ばれたんで

すけど、はぐれてしまったんですよ」

七佳が喋るとややこしくなりそうだから、俺が前に分け出て話した。斜め後ろから七佳に小突かれたがこの際無視だ。どうせ満月顔をしているだけだろう。

「はあ、才田さんならたいい資料室のパソコンから本社に報告してるか、休憩室でコーヒーを飲んでるかしてますね」

「それって、どう行けばいいんですか？」

「資料室なら2階、休憩室はその角を右に曲がった突き当たりです」

「どうもありがとうございました」

やっと……、やっとまともな情報が入った。馬鹿4人を引き連れてのこの結果は奇跡に近い。俺だっていざとなればできるんだ。

「資料室に行くぞ」

まだ不機嫌そうに膨れている七佳の頬を両手で潰し、次を取るべき行動を伝えた。

「え？ 近い休憩室から当たらんの？」

「俺達の目的は才田を倒すことだけじゃねえ。元々は、あいつと行方不明者の関係性を調べることだ。休憩室で鉢合わせたら、そこで調査は終わりだ。あいつが口を割るとは考え難い^{にく}からな。だから資料室へ先に行くんだ。さっきの研究者の話、ちゃんと聞いてたか？

才田はパソコンから本社に報告してるって言ってたんだぞ。TNHのバックにまだ組織があるってことだ。資料室のパソコンを見れば、何か掴めるかもしれない」

俺の考えを聞いた七佳は一瞬口を開けてポカンとしたが、すぐに目を輝かせてニンマリ笑った。

「凄いやん。今めっちゃボンドっぽかったで」

「……まだ007ごっこは続いたのかよ」

「その辺は臨機応変や。ってかデリケートなお坊ちゃんやと思ってたけど、やればできるやんか」

七佳に肩をバシバシ叩かれて思った。こいつ、絶対才田潰しと戦隊

ごっこを重ねようとして、本来の目的を忘れてたな、と。

今更慣れたことだと諦め、2階へと続く階段を見つけて上る。目的の部屋は表示があったからすぐに分かった。

そっとドアを開けると薄暗い。電気がついていないから才田は休憩室にいるのだろう。念のため電子に人の気配を探らせたが、やはり無人のようだった。

蛍光灯に白々と照らされたそこは、資料室というイメージ通り、たくさん棚が並び、冊子やファイルが所狭しと詰め込まれていた。きつと製薬会社の資料なんて俺達を読んでもちんぷんかんぷんだらう。

まるで迷路のように棚で仕切られた部屋を練り歩くこと数分。とうとうパソコンを見つけた。

「やっぱりパスワードが要るか……」
起動させようとしたが、最初の段階で躓いた。

「適当に入れてったらいつか当たるんちゃうん」
七佳はそう言ってキーボードに手を伸ばした。

「待てよ。こういうものはセキュリティ上、違うパスワードが3回続いたら、しばらく入力できなくなるものもあるんだ」

「おおっと、危ない危ない……」

慌てて手を引っ込めた七佳は、首を振りながら「フーッ！」と息を吐いた。

「……何かパスワードのヒントになりそうな言葉はねえか？ T

NHのモットーとか……」

「TNHのモットーは社名の通り、"特殊能力で一儲け"や」

「そんな安直で良いのか？」

「ネーミングセンスからして安直やねんからイケるって」

七佳にネーミングセンスのことを言われてしまったらお終いだ。だが確かに七佳とドングリの背比べ的なレベルの社名ではある。

「じゃあそれをローマ字に直して打ち込んでみるか」

やや不安に思いつながらも入力する。

「……ど、どや？」

「駄目だ。違うらしい」

「うーん、長過ぎたのかな。次は”tokusyunouryoku”と”hitomouke”に分けてみたら？」

「いやいや、3回しかできねえかもしれないんだぞ。他の可能性を考えた方が良くないか？」

「そんな言^ゆったって、他のなんて知らんもん」

それはそうなのだが……知らねえぞ？　これで3回とも違ってたなら、この資料室のちんぷんかんぷんなファイル達を虱潰^{しらみつぶ}しに調べなきゃならない羽目になるってえのに。

「はあ……、じゃあとりあえず”tokusyunouryoku”からいくか」

「あたしは”hitomouke”が良い線いってると思うねんけどな」

「うるせえ」

先にtokusyunouryokuと入れるもまた違う。

「ほらな、ここは昔から商人の町やで。儲けとかなあかんやろ」

「……そんなものか？」

そして七佳イチ推^おしのhitomoukeを入力すると……

チャンチャラン♪チャンチャンチャン♪

なんと、パソコンが軽快な音楽と共に起動したではないか！　何て安直！　パスワード設定する意味がねえ！　おまけに待受画面には、

白地にでかかど黒の行書体で「儲」と一文字書かれている。研究者の集まりの癖に、どんだけ商売根性持ってたんだ。

「お姉ちゃん凄^{まな}っ！」

みかんから尊敬の眼差^{まなざ}しを受けた七佳は、得意げに胸を張って鼻の穴を膨らませた。

「せやろ、せやろ！」

「……七佳、お前の手柄なのはもう分かったから、先にメールの送受信を調べようぜ」

「あ、そうやった。早よせな誰か来るかもしれんしな」
何はともあれ、ファイルを虱潰ししなくて良くなったことに安堵し、早速メールBOXを開いた俺達が見たものは……

クローン人間

日時…7月26日13時54分

宛先…CBT製薬研究所

件名…輸送車出発

本文…7月10日の標本体が、本日昼の輸送車で出発しました。
そちらには明日朝に到着予定です。よろしく願います。――

――才田

送信BOXの一番上にあったメールだ。輸送だとか標本体だとか、何やら不穏な言葉が並んでいたが、最も衝撃的だったのは、今いるTNHの本社とはCBTのことだったということだ。

「CBTの子会社やったんか……」

これは七佳も知らなかったようで、眉を潜めて唸った。^{うな}

「それにしちゃあとレードマークのサングラスしてねえぞ」

「ビルの中までそんなんしてたら見え難い^{にく}んちゃう？ 研究とか実験せなあかんし。前に外で見かけた時は、確か掛けてたはずや。でも才田の派閥で行方不明者が出てからは、この辺でTNHの奴がうるついてんの、ぱったり見かけんようになってん」

「……じゃあ、才田がここに社員を騙して連れてくるから、研究者が外に出る必要がなくなったってことか」

才田がTNHから仲間を”標本体”としてCBTに”輸送”している、ということは分かった。だが”標本体”とは何のことなのか。そして、”輸送”なんて荷物的な扱いをしているのも気になる。ま

るで動かないものを宅急便で送るような感覚だ。”標本体”とは、動かない、または動けない仲間のことを指しているのだろうか。そうなるのかなりヤバイ展開になってきたかもしれない。

気になったことはもう一つある。才田はビルの前で、「報酬は貰ってない」と言っていた。富利異盟^{ふりいめいそん}損では、同族を保護すると歩合で給料が出る。金額は雀^{すずめ}の涙程のものらしいとはいえ生活費^{すみか}の足しにはなるし、社員寮という家賃なんてあってないような住処もある会社を裏切ってまで、報酬の出ないTNHに貢献するのは不自然だ。才田の意思とは関係なく仲間を売らなければならないことでもあるのだろうか……

このパソコンは報告のメール専用らしく、デスクトップは閑散^{かんさん}としたもので、これ以上のことは分からなかった。

「そっちは何か分かったか？」

俺と七佳がメールを調べている間、電子やまりさんは駄目^{だめもと}元で棚の冊子やファイルを読んでいた。

「さっぱりですう。細かい数字が並んでいて、目がチカチカしてききましたあ」

「無理無理、限界よ。今晚から知恵熱が出そうだわ」

ページを捲^{めく}る手を止めた二人は、かなり疲れてげんなりした顔をしていた。理数が苦手と豪語していたみかんに至っては、ニヤニヤしながらファイルの順番を入れ替えて悪戯^{いたずら}している。

その時ふと、みかんが持つファイルの背に書かれた英単語が目についた。

「みかん、ちょっとそれ貸してくれ」

「え？　これ？」

渡されてよくよく見た英単語とは……

「Cloned Bioroido Technology……、CBT……なのか？」

”cloning technology”というのは聞いたことがある。日本語で言うところのクローン技術。clonedと語尾

を変化させているが、意味自体はそう変わらないだろう。そして”biroido”とは、バイオロイドⅡ人造人間。3つの単語を単純に合わせると、”クローン人造人間の技術”だ。

「何や巧、難しい顔して。これがCBTの正式名称やってこと？」

「多分そうだろうな。訳した通りのことやってるんなら、かなりヤバイ会社だ。」

メールにあった”標本体”は、人造人間の素^{もと}となるもの。クローン技術でシンポテを持った人造人間を作り出している。成功すれば同じシンポテの人造人間のクローンを更に作る……

英単語3つとメール内容1つからの憶測に過ぎないが、俺の頭の中でパズルが嫌な方向にばかり合わさっていく。七佳は前に言っていた。CBTは集めた人間をモルモットのように扱い、開発した新薬を販売し得た資金で、更に何かを研究していると言う噂がある、と。この”更に何か”は、人造人間のことだったというのか？

才田はまだ人を選んでCBTに送っていたようだが、俺……もし俺が東京で「無料で人間ドッグ受けませんか？」とか、注射器片手に「今すぐ献血してください」とか、やたら怪しい勧誘に引っ掛かって、組織に捕まってたとしたら、有無も言わず”標本体”にされていた……？

「……巧、あんた注射嫌いで良かったな。」俺の細胞は何人^{なんびと}たりとも覗かせねえ！”って言うくらい^{くらい}の気迫がないと、とつくにホルマリン漬けにでもされてたかもな」

俺の見解を聞いた七佳は、少し顔をショックに引きつらせながら言った。

「ホルマリンってことは、他の奴らは死んでる確定なのか？」

「さあ、分からんけど、”標本体”にされてんねんやろ？ 虫の標本は死んでるし、イメージ的に……」

途端、俺の背中に悪寒^{おかん}が走った。今更ながらに非人道的な組織に目を付けられていたということを悟ったからだ。

「大丈夫やって。ホルマリンはただのイメージやし。皆同じよう

に目を付けられてきた仲間やろ。守り合いながらいこうやって言^ゆたやん。東京に帰っても何も心配あらへん。まず管理人が最強やからな」

「……そう……だな」

ネガティブな考えに落ちた俺を、皆が心配そうな顔で見ている。改めて馬鹿でふざけた奴らを見回し思った。

CBTは、一人で立ち向かえるような相手じゃない。だが一生逃げ回っていられる自信はない。戦隊組んで、本当に良かった。いや、助かったというべきか。

この時初めて、同族を探して保護する富利異盟損の営業課が、誇らしいものを感じられた。

この時やっと、俺の思考が正義のヒーロー戦隊っぽく変わった気がした。

「いーち、にーい、さーん……」

突然、資料室に声が響いた。

「この声は泉堂……」

「また何かの遊びなんですよおか」

栗林が倒れてから、けっこう時間が経っている。先にビルへ入った才田と泉堂が、そろそろ俺達の侵入に気づいてもおかしくはない。

「はーち、きゅうーう、じゅうっ！ もーいーかい♪」

……え、これはどうすりゃいいんだ？ かくれんぼか？ 物凄く遊びたくねえんだが。

「まーだだよ♪」

「おい、みかん。相手にすんなよ」

「時間稼ぎにはなるやろ？ とりあえずおっちゃんがどこにおるんか、今のうちに探そ」

そして泉堂はまた1から数え始めた。俺達は電子に気配を探らせる。

本棚が列を成して並べられた部屋の視界は悪い。縦は一直線に奥まで見渡せるのだが、横は人一人通れる分くらいの幅しか見えない。

「もーいーかい♪」

『まーだよ♪』

奴が聞かされた皆で声を合わせて応じる。だんだん俺も馬鹿をやることに慣れてきたかもしれない。シリ阿斯を主張したところで疲れるだけだ。

「……いましたあ」

電子の指差す本棚の陰。そこで泉堂はきっちり目を隠していやがった。

「まりりん、あの技いくで。この幅の狭さなら逃げ場はないわ」

「OK。皆、次は”もーいーいよ”だからね」

七佳とまりさんが何か作戦を立てたようだ。

「もーいーかい♪」

まりさんが泉堂のいる方向に背中を向けて踏ん張る。赤いゴリラがウハウホやってくるようにしか見えない。そんな格好悪い背中に七佳は足を掛けた。

『もーいーよ♪』

「……あ、見ーつけ…」

泉堂がフラフラと棚の陰から出てきた瞬間、七佳がまりさんの背を両足で蹴って跳んだ。

「七佳ミサイルっ！！」

台詞通り、腕で頭をガードし、高速でほぼ水平に飛んだ七佳は、ミサイル弾そのものだ。泉堂は棚に挟まれて逃げ場がない！

「マトリックス！」

勝った！ と思ったその時、泉堂は後ろに背中を反^そらせた。七佳は

その上を通過して、壁に激突した。

「七佳!!」

「……あたた……だ、大丈夫や! まだまだあつ!」

ぶつかった時かなり凄い音がしたと思うが、意外に平気そうな七佳は、今度は壁に足を掛けて飛んだ。

「ふはははっ! マトリックス!」

だがまたも同じように避けられる。こちらに飛んできた七佳は、まりさんがウハウホの背中で受け止めた。

「いやまりさん、そこは前を向いて受け止めてあげろよ……」

「何言ってるの!? 兄貴とは違って私は入れ乳ちちなの! シリコン割れたらどーすんの!? あんたのハートと同じくらいデリケートな素材なんだからね!!」

「……あ、そう」

戦闘時に胸の心配をするレッドって……良いのか? これで良いのかシンポテレンジャー!?

「クッソー、見えても逃げ場がなければイケると思ってんけどな……。振り返るとは計算外や」

「どういうことだ?」

「あいつのシンポテは、異常な動体視力やねん。集中すれば、栗林の雷撃もスローに見えるらしい。ずっと前それで遊んでた二人を見たことあるわ」

だから”マトリックス”なのか。反って避ける瞬間、あいつには映画と同じようにスローで見えるのだろう。

「一人マトリックスかよ。寂しい奴だな」

「うっ……、僻ひがみか!? こんな高度な能力を要する遊び、他の者には到底できんからな!」

「誰が僻げんこつむか! その割には才田の部屋の前で、俺の拳骨2回も食らってただろ!」

「1回目は悪霊しょうきの瘴気に当てられて余裕なかったんや! 2回目はユニークな女子高生の訪問に浮かれとったから対応に遅れただけや

！　だが3回目はないぞ！」

くだらねえ。とはいえ、ヨシオさんを欠^かいて、唯一の攻撃要員である七佳の攻撃が当たらないとなると、俺達から何か仕掛けることはできない。

「電子、もう一回頑張れるか？」

「や、やってみますう」

両手を握り締めて泉堂を睨みつけた電子の気配が膨れ上がる。どんどん大きくなって……急に長い黒髪がポフンツと跳ねて萎^{しぼ}んだ。同時に気配も消える。

「……エンストか？」

「はい、すみませえん……」

まだ回復していなかったようだ。その間に泉堂は、どこからともなく携帯式の折りたたみステッキを取り出し、スルスルと伸ばすと、先端をこちらに向けてニヤリと笑った。

クローン人間（後書き）

七佳が言っていた「開発した新薬を販売し得た資金で、更に何かを研究している」というのは、第9話「いい年した大人の」に出ています。

才田の目的

「さて、こっちからも攻撃しよか。やはり英国紳士らしく、ゴルフがええかな。誰をカップにしよか？」

こちらにステッキの先を向けた泉堂は、俺達5人を一人一人指し示しながら言った。そしてスーツの内ポケットからゴルフボールを取り出す。静かに床へ置くと、ステッキの握りの部分を下にして逆に持ち、横を向いて構えた。

俺はどの程度の攻撃が来るのか分からず、一応身構えたのだが、七佳は小鼻を掻^かいて余裕の態度だ。

「はン、あんたは動体視力が凄^たいだけやろ。中年オヤジの打つ球なんか、恐るるに足りんわ」

「よお言^ゆいたな。好きこそ物の上手なれ、という言葉を知らんのか。なら受けてみるがいい。チャー、シュー、……メンツッ!!」

ステッキの握りで打たれたゴルフボールが、一直線に七佳へ向かってくる！ さっきの泉堂と同じく、彼女にも逃げ場はない！

ガッッ……

かなりの勢いで放たれたゴルフボールは、七佳の前に踊り出たまりさんの背中に当たって跳ね返った。音が人間に当たった時のものじゃない。シンポテで皮膚と筋肉が硬化されているのだろう。七佳ミサイルを受け止めた時はそんな音じゃなかったから、硬さを調節出来るのかもしれない。

一方、泉堂は跳ね返ったボールを、今度はテニスのフォームで打ち返した。

「次はスカッシュやな」

ガチッ！

ガッッ……コン

ガチッ！

ガッッ……コン

壁役のまりさんが跳ね返すとまた泉堂が打つ。小さい握りの部分を使って、よくそこまで器用に打てるものだ。これも動体視力がなせる技なのか？

「ハッハ、スカッシュはロンドンの囚人が始めたもんやから紳士のスポーツとは言われへんが、たまには良いもんやなあ」

「もう！ 同じ所ばっか当てたら痛いじゃない！」

ラリーを繰り返す毎にまりさんの顔が歪んで行く。長くは持たない。見兼ねた七佳が腹を泉堂に向けて、まりさんの前に立ち塞がる。

ガチッ！

ボスンッ！

「うぐえ！ ック！ 効くわあ……」

柔らかい脂肪で覆われた腹に当たったボールは跳ね返らず、七佳の近くに転がった。だが痛がるのもそこそこに、七佳は慌ててボールを拾って人差し指と中指で挟むと、腕を突き出した。

「あたしの魔球、受けてみい！」

足を高々と上げた七佳。まるで野球漫画のピッチングポーズのようだ。お前は星飛雄馬か！？ と突っ込みたかったが、完全な関西人の七佳を巨人ものに例えると怒りそうだからやめておく。きつと阪神ファンだ。

「ピッチャー、……ン投げましたっ！！」

シンポテでリミッターの外れた七佳が放つボールは、魔球そのものだ。再びマトリックスの体制に入りかけた泉堂の目前で、急に軌道を変えて落ちた。

あれは……フォークボール！？

「ナメるなああ！」

だが泉堂は微妙に体をよじってそれをかわした。駄目だ、1対1じゃ完全に避けられてしまう。とはいえ、俺やエンスト起こした電子は攻撃する術を持たない……

傍観しているしかかった俺の目にふと入ったのは、棚に詰められたファイルや冊子だった。

「電子、ファイルを手当たり次第に投げろ！ 数打ちやその内当たる！」

「は、はいっ！」

そうだ。別にシンポテを使って攻撃しなくても良いんだ。複数で物を投げまくって、避けようのない状態にすれば良い。泉堂が怯んだ隙に突破口が見えるかもしれない。

いつの間にかみかんの姿が見えないが、今は構ってられない。俺と電子に倣って、七佳とまりさんも近くの間からファイルや冊子、それに重そうな辞書らしきものまで、一斉に投げまくった。

「ほっ、はっ、おおっと！」

「クソッ、当たれ！」

「ハッ、無駄無駄！ そいやっ！ とおっ！」

期待も虚しく、俺達の攻撃は確実にかわされる。

「だああ腹立つ！」

ブチ切れた七佳は、才田が報告用に使っていたパソコンを持ち上た。「これで……どおやああああ！」

そのままコードを引きちぎりながら投げ飛ばす！ かなり古いタイプだから当然液晶なんかじゃない。大砲さながらの重量とでかさだ。

「マトリックス！」

パソコンがでかくて横に避けない泉堂は、またもや反り返った。これでも駄目なのか？

……と諦めかけたその刹那……

「メテオ・ストライクッ！」

みかんが本棚の上からふわりと出て来ると、がら空きになった泉堂の腹を目掛け、正座で落ちた！

「グオエッ……！」

前からの攻撃ばかりで真上からの攻撃を想定していなかったのか、泉堂はわずかに反応が遅れ、腹へみかんの膝をモロに食らった。

「くう……女子高生の生足……」

反応が遅れた理由はそこか!? お茶目なイギリス紳士風じゃなくて、ただのロリコンオヤジじゃねーか!

「……馬鹿だ……、こいつ本物の馬鹿だ……」

俺の呟つぶやきに、皆が頷いた。

腹を押さえて唸うなる泉堂が落ち着くのを待ち、正座をさせて取り囲んだ。今から尋問タイムだ。

「……才田さんは本社に帰りはった」

「帰る? あいつ、元はCBTにいたってことか?」

「せや。あの人はCBTから富利異盟損に送り込まれた、特派員や」
なんと、俺達が007ごっこをするずっと前から才田は敵で、富利異盟損に潜伏せんぷくしていたのだ。

「じゃあお前や栗林も……」

「ちやうちやう。僕らは才田さんに惚れ込んで、あの人が関西にある間だけ協力してただけや。富利異盟損には、強烈なカリスマ性のある圧倒的なリーダーがおらんかった。田ノ中さんも悪くはないが、やっぱり普通のネーチャンやねん」

七佳が普通かどうかは甚はなはだ疑問だが、カリスマ性があるわけではないという所は納得できる。

「あのな、あたしは確かに多少ノリの良い普通の女子やけど、カリスマ性があれば仲間を売っても協力すんの? 理解できひんわ。」

外道やで」

苛ついた様子の七佳は、泉堂の胸倉を掴んだ。

「……それがどうした? 外道が何や!? 道理が何や!? 僕も栗林君もずっと不安やった! 銀次郎パクった社長に若いネーチャ

ン、下は組織に怯えるだけの何も考えへんお気楽な連中！ 絶対的な安心感が欲しかった……頼れる存在が欲しかったんや！」

泉堂は今にも泣き出しそうな声で叫んだ。今まで溜め込んでいたものが競り上がってきたのだろうか、その目は充血し、唇が小刻みに震えている。

「餓鬼んちよみたいなこと言ーてんちゃうぞ！ 悪事に協力して、自分らだけ助かろうって魂胆か」

「何とでも言え！ 才田さんが人を惹きつけてやまんことは、田ノ中さんが一番分かってるやろ！ あの人が裏で組織と繋がってるっちゅうことは、協力する前から薄々気づいていた。でもそれを差し置いても有り余る安心感をくれたんや」

七佳の手を振り払った泉堂は、居直って正座を崩し、胡坐あぐらをかいた。その態度に七佳は更に苛立ち、拳を握り締めた。

「やめとけ七佳。付き従ってただけのこいつと才田が離れた以上、もう派閥内から仲間が売られることもないだろ」

「せやけど、何も解決してへんやん」

俺が止めると七佳は一応拳を引っ込めたが、まだ悔しそうに唇を噛かんでいた。

「そうだ。ここから先は東京に帰って、才田本人とケリを付けるんだ。ロリコンオヤジを殴っても仕方ねえ」

「ロ、ロリ……、ちゃうぞ。男なら若い子の足をついつい見てまうもんやろ！」

「俺は餓鬼の足に興味はない。それより泉堂、才田は初対面で俺に、”能力者が活躍できるよう、安心して暮らせる場所をここに作りたい”って言ってたんだ。そのために人数が欲しいと。言ってることとやってることが矛盾してる。あれは嘘だったのか？」

泉堂の話を聞いている内に、このことが引っかけだった。安心して暮らせるどころか、仲間が標本体にされてCBTに送られている。

「……嘘……というわけやない。才田さんにとって一緒に暮らす仲間とは、必ずしも母親のお腹から産まれてきた人間やのうても良い

「つちゅうだけのこと」

「それ……ってまさか……？」

「せや。特殊能力を持っていれば、人造人間であっても構わん。前にそう言う^ゆとった。まだほんまの人間と同じように生きてるもんは作れてないらしいけどな。今後C B Tが技術を確立^てさして、人造人間のクローンがいくつでも作れるようになれば、あつという間に人数が増やせる。今までの犠牲者の数を軽く超えるくらいだな。才田さんがC B Tに尽くすんは、そのためらし……」

「あああああゝあゝっ！！」

いきなり七佳が泉堂に飛び掛った。そのまま馬乗りになって殴りつける。いくら動体視力が良くても、シンポテを使った七佳の力で押さえつけられたら抵抗できない。それとも抵抗する気もないのか、泉堂は呻^{うめ}き声さえ上げずに、ただ殴られ続けていた。

「七佳ちゃんやめて！ 死んじやうわ！」

慌ててまりさんが七佳の腕を掴むも、その拳は止まらない。

「ひょおおおっ！ 巧さあん！ 何か鎮静^{ちんせいざい}剤的な匂いを……！」

「お、おう！」

呆然と七佳の暴走を眺めていた俺は我に返り、彼女の鼻と口を手の平で押さえた。

「フーッ！ フーッ！ ……フー……フー……ふう……」

荒馬のような鼻息が徐々に小さくなり、ようやく拳は止まった。

そうして熱い鼻息の代わりに、大きな丸い目から涙が一つ零^{こぼ}れた。

シンポテ・ゴールド現る

七佳に殴られ、骸骨^{がいこつ}みたいな顔がある意味健康的に見えるくらい腫^はらした泉堂は、意外にも気を失うことはなかった。顔も腹も、リミッターの外れた七佳が思い切りぶん殴っていたはずなのだが、どうやら動体視力を駆^く使し、微妙に急所を避けるよう体をずらしていたらしい。呻^{うめ}き声さえ上げなかったのは、それに集中していたからだ。遊んでばかりのオッサンも、身の危険が迫った時は普通に頑張るようだ。

そして泉堂は、才田が帰ってしまえばTNHに義理立てする理由もないからと、知っている限りのことを話した。

ここでは主に、連れて来た同族の体や能力を調べ、仮死^{かし}状態にしてからデータと共にCBTへ送っている。標本体とは、この仮死状態の者のことを言う。

CBTに送られた標本体がどうなったのか、それは泉堂も知らない。だが、帰って来た者もいなければ、恨み節の連絡^{よこ}を寄越してきた者すら、一人としていない。才田は彼ら標本体のことを、時々”犠牲者”と表現した。そこから泉堂は、標本体が生きている確率は少ないと判断したのだ。

七佳が関東出張の申請を出した頃、才田にはCBTから”志^{しが}牙巧”という人物、つまり俺を捕まえろという指令が出た。同族を引き寄せるということに、研究者達は前から目を付けていたが、中々俺がしぶとく逃げ回るため、同族の才田に任せようとしたのだ。だが早い者勝ちということで、才田の関東出張は社長に却下され、叶わなかった。奇^くしくも七佳が俺に目を付け、運良くお持ち帰りしたのを知り、自分の派閥へ寝返らせることで指令を達成しようとした。

想像通り、完全に人を実験材料として扱っているCBTやTNHのやり方にムカつきを覚えながらも、俺は才田陽路^{ひろ}という人物について知りたくなった。シンポテを持つ者の敵である組織にいて、同

族が酷い目に遭^あっていても、腹を立てるどころか貢献している。人数さえ集まれば、それが本物の人間だろうが、人造人間のクローンだろうが構わないというその神経。普段の会話がまともで騙されかけたが、本当は才田が一番、人間的に、まともじゃない。

「何であいつはさっさと一人で帰ったんだよ」

俺が目的なら、ここで泉堂と一緒に戦って、連れて行こうと普通は考えるだろう。正直、泉堂一人でも、最後のロリコン生足メテオ・ストライクがなければ、かなりヤバかったと思う。

「僕は”一人で”と言うた覚えはない。君が自らC B Tへ行きたくなるよう、ちゃあんと人質も連れて帰らはった」

泉堂の言葉に耳を疑った。俺の知っている奴で、この場にいないのは……

「ヨシオさん!？」

「あかんでえ、敵のテリトリーで仲間を一人放ったらかしとったら……うぐう!」

俺は思わず泉堂の胸倉を掴んだ。まさか、まさか、俺達が中で戦っている間にヨシオさんは……標本体に……? 泉堂を締め上げる手をそのままに、皆で顔を見合わせる。想像は同じなようで、一様、言葉も出ない。

「タンマ! タンマ! まだ無事なはずや! せやなかったら人質にならんやろ!」

俺達の考える最悪のシナリオを、表情から読み取ったのか、泉堂は慌てて説明を付け加えた。少しだけ胸倉の手を緩^{ゆる}めてやる。

「あの悪趣味な緑のスーツのオッサンが、才田さんの出した茶を素直に飲んどったら、今頃車の中でお昼寝中や」

「……敵の出す茶なんか普通……」

「いいえ、ヨッシーなら有り得るかもよお」

「ド天然ですからねえ」

「うん、”いやあ、君ってけっこう良い奴じゃないか、ハハハッ!”とか言いそうやな……」

俺以外の3人は、” うっかり敵の差し入れを飲んで捕まっちゃったよ” 説に頷いた。どんだけヌケてんだ、あの人は……。だが想像できなくもない。

「ほんなら早よ助けに行かな！ ほんまに標本体にされてまう」

「そうだな、今日中に荷物まとめて、新幹線に乗るぞ」

「ちよいちよい、誘拐なら普通、相手からの連絡と要求待つもんやろ」

意気込んだ俺達に泉堂が割って入った。

「はあ？ 何で敵の準備が整うまで待ってやらなきゃいけないんだよ」

「そうよね、大きな組織に乗り込むだもん。いきなり押し掛けて、動揺してる隙を狙わなきゃ」

「戦隊は堂々と乗り込むのがセオリーですけどお、現実はどうはいきませんよお」

まりさんも電子も、今回は現実的に考えたようだ。成長したじゃないか、人権戦隊。

「というわけやから泉堂、あんたは栗林と一緒にここで標本体になつとけ！」

「えええっ！！」

「と言いたいところやけど、標本体になったらCBTが喜ぶだけやから、社長のお仕置きで勘弁したるわ。ほら、ちゃっちゃと歩けっ！」

「社長の……！ ひええ！」

七佳に急^せき立てられた泉堂の顔は、この世の終わりのような表情だ。標本体は免^{まぬが}れたというのに。社長のお仕置きとは、そんなに恐ろしいものなのだろうか。

泉堂の襟首^{えりくび}を掴んだ七佳を先頭に、資料室を出ようとすると、後ろからTシャツをクイクイと引っ張られた。……みかんだ。

「なあ、アタシは荷物、家まで取りに帰らなあかんねんやん。何時にどこで待ち合わす？」

「……お前、来る気なのか？　今まで散々ヤバイ話聞いただろ」

「うんうん、組織に捕らわれた仲間を助けるんやろ？　ますます0
07やな」

事の重大さと危険レベルを理解していない口ぶりに、頭を掻き^かむし^{むし}り
たくなった。

「あのな、確かにさっきのメテオ・ストライクは助かった。サンキユーな。だがここからは餓鬼が来るような所じゃない」

「アタシ、もう餓鬼ちゃうもん！」

「自分は餓鬼じゃないって言う奴ほど餓鬼なんだよ」

「何やねんそれ。人のこと餓鬼って言う奴が餓鬼やねんで！」

「俺は餓鬼じゃねえ！」

「今、自分は餓鬼やないって言う奴ほど餓鬼やって言ーたやん！」

「お兄ちゃんも餓鬼や！」

「屁理屈へりくつ言うな！
何の話してたんだか分からなくなっただろーが
クソ餓鬼！」

「だから、餓鬼のお兄ちゃんが行けるなら、アタシも行けるやろつて言ーとんのやボケ餓鬼！」

「おーれーはー餓鬼じゃあねえええ!!」

つ……疲れた……。何なんだ、このウザイ会話は。本当に頭が混乱してきたぞ。ええと、俺は餓鬼じゃないがみかんは餓鬼で……。何だった？

「巧、今時の女子高生の口に、大人がそうそう勝てると思ったらあかん」

七佳がぜいぜい息をする俺の肩にポンと手を置き、首を横に振った。

「マジかよ……。じゃあこいつも連れて行くのか？」

「しゃーないやろ。あかんって突っぱねて、勝手に付いて来られる方が危ないわ」

「お姉ちゃん話分かるなあ……あててっ！」

揉み手で七佳に擦り寄るみかんが憎たらしくて、つむじに拳をぐりぐりと押し付けてやった。

「問題は戦隊内のキャラ設定やねんけど、女の子仕様のピンクとイエローは埋^うまってもーてんねん」

七佳の言い出したどうでもいい話に、膝から力が抜けそうになった。そこから決めるのかよ。

「大丈夫。最近の戦隊とかライダーもんは、途中から仲間になる特別なキャラが出てくるねん。アタシはゴールドでええわ」

「おお！ そーなんや！ じゃあみかん、あんたは今から人権戦隊・シンポテレンジャーのゴールドや。一緒にグリーンを助けに行くでえ」

「イエッサー！ 仲間を助けるために悪の組織と戦うなんて、めっちゃ慈善活動^{じぜん}やな。ますますNPOっぽいわ。宿題の感想文には、皆のこと、格好良く書いたるからな」

かくして、シンポテレンジャーに夏休み限定の仲間が増えたのだった。

帰り際、才田から何か聞いているのか、CBTに乗り込む気満々で廊下を堂々歩く俺達を止める研究者はいなかった。そして玄関前で眠りこけていた栗林を起こす。どうやらこいつもヨシオさんと一緒に睡眠薬入りのお茶を飲んだようだ。間抜けにも程がある。

泉堂を七佳、栗林をまりさんがそれぞれ引きずるように連れて帰り、社長に預けた。事情を聞いて「落とし前、付けてもらうでえ…」と囁^{ささ}く社長の顔は、万田銀次郎さながらだった。お仕置きは社長一人でするのではなく、他の社員のシンポテも使って行うらしい。どんなものなのか多少興味はあるが、早くヨシオさんを助けに行きたいから、怯えまくる才田の側近二人を尻目に社長室を出た。

俺の精神衛生上、どうか”落とし前”が小指をつめるとかじゃありませんように、と祈る。

あ、想像したら指先が冷たくなってきちゃった……

マッチョな変態の襲撃

何とか新幹線のチケットが取れ、勇み足で東京へと戻ったら、日も暮れかかる時間になってしまった。朝から走り回って皆疲れ切っていたため、仕方なくヨシオさん救出は明日にしようということになった。

だが一番組織について知っている七佳も、TNHとは別の会社だと思っていたCBTについては、ほとんど情報を持っていなかった。奴らの居場所すら誰も知らないのはさすがにいただけない。帰る前に、怪しい製薬会社はどこかにないか、ブラック店長の所へ情報を貰いに行くことにした。

「……お留守でしょおか？」

「うーん、そうみたいやな」

ブラック不動産屋のドアには鍵がかかっていた。ノックしても、応答はない。

「もう閉店時間なのお？ 早くなぁい？」

まりさんが硝子張りのドアガラスごしに中を覗く。

「一応電気はついてるみたいだけど、人影は見えないわね」

「……それって何か変じゃねぇか？」

俺は段々嫌な予感がしてきた。電気を付けっぱなしということとは、まだ閉店していないはずだ。だがドアには鍵がかかり、ブラック店長の姿はない。

「まるで……慌てて出たから鍵かけるだけで精一杯やったって感じ？」

俺の予感をみかさんが口に出した。コイツは鋭いのか馬鹿なのか、本当によく分からない餓鬼だ。きつと知識が偏りかたよ過ぎているのが原因だろう。

「なあ、もし店長が俺達にアパートを紹介したってことをCBTが嗅ぎ付けたとしたら……」

不安が込み上げ皆を見回すと、険しい顔をしたまりさんと目が合った。

「接触して来た可能性はあるわね。それか既にアジトを突き止めて、そっちに奴らが行ったか。兄貴はいざとなったら店長を頼って電話すると思うの」

「カナナさんに助けを求められて出て行っちゃって……？ それなら早くアパートに戻らねえとヤバイぞ。店長は強面だが普通の人間だ」ただならぬ事態を察知し、俺達は戦隊のアジト、鳥槻荘へと走った。

アパートの前でまず目にしたのは………ムキムキマッチョで上半身裸の変態と戦うカナナさんとブラック店長！？ まりさんの予想は当たったようだ。

「店長！」

「兄貴！ そいつは何なの！？」

「不用意に来るな！ コイツ、只者じゃない！」

走り寄ろうとすると、ブラック店長に止められた。

「あうあああいううう」

変態マッチョは意味の分からない呻くような声を上げた。よく見ると顔にミラーグラスを付けている。絶対にCBTの奴だ。

だがブラック店長が言ったように、どこかおかしい。今まで俺の周りをうろついていた研究者っぽくない。上半身裸のもそうだが、何だか雰囲気は異様なのだ。

俺達が戸惑っている間に、ブラック店長が変態へ向けて銃を構えた。

おいおいそれは銃刀法違反だろ！ やっぱりその筋の人間で、背

中に龍のタトゥーが入ってるのか!?

パーン!!

想像より軽い銃声が響き、変態の体が少し傾いた。

「……何だ、あの音ならエアガンか……」

恐らく飛んでいったのは銃弾じゃなくてBB弾と言ったところか。

安心したのも束の間、傾いた変態は何事もなかったかのように体制を立て直した。

「あがあああゝ」

そしてまた気持ちの悪い声を上げ、今度は反撃に出た。

パーン!! パーン!!

走り寄ってくる変態に向け、ブラック店長は連続してエアガンを放った。だが少し体が揺れるだけでその足取りは緩まない。確かに当たっているようなのに、全く痛がる様子がないのだ。

「ハニー! 伏せてえ!」

拳を振り上げ目前に迫った変態と銃を構えるブラック店長の間に、カンナさんが立ち塞がる。

バキッ……

骨の碎けるような嫌な音を聞いた。

カンナさんはまりさんと同じく、皮膚と筋肉を部分的に硬化させられる。マッチョ変態の力がどれ程のものは知らないが、鉄板のような腹に、人を殴るつもりで思い切り拳を叩き付けたため、変態の手の骨の方が負けた、といったところか。

だがそれでも変態は眉をしかめることすらせず、「うおぐあ……?」と不思議そうに呻き、折れたはずの拳をブンブンと数回振った。そして何事もなかったかのように、再びカンナさんへ攻撃を繰り出した。

まさかこの変態、痛みに慣れまくったMの極みとかじゃねーだろうな……。いや、DMなら攻撃してこないか。

バキッ!! ゴキッ!! バキィッ!!

耳を覆いたくなる音が続く。いくら痛がらなくても拳の形が変形す

るんじゃないかと思うくらいの音だ。

「も何なのコイツ！ ハニー、どうかしてえ！！！」

「その図体と顔でハニーとか呼ぶなっ！ 気色わりい！！」

根を上げたカンナさんにきっちり訂正を入れたブラック店長は、盾となっている彼……いや彼女の横から這い出^はて、素早く変態のだから無く開いた口に、エアガンの銃口を押し入れた。

バゴッ！ バゴッ！ バゴッ！

口内^{こうない}へ直^{じか}に撃ち込まれたら、さすがの変態も後ろに倒れ込んだ。

「さっすが私のハニイ！……ううっ」

「まだ油断するな、ぬりかべ野郎」

ブラック店長は抱き着こうとするカンナさんの顎下^{あご}から銃口を突き上げ、探るように変態を睨み付けた。

「か……かっけえ……俺もあんなクールにヤンデレメイドを威嚇^{いかく}してえな」

「ひよおおおっ！ あんな物騒なこと、真似しないでくださいいい！」

電子は慌てた様子で緋^{すが}り付くが、俺は口笛でも吹いてブラック店長を讃^{たた}えたい気分だ。

「駄目よお。タクミンみたいなデリケートBOYが、エアガンを使いこなせるわけないわ。もし相手が怪我したら、逆に貧血起こしてぶっ倒れるんじゃない？」

まりさんが電子をヨシヨシと宥^{なだ}めながら、興奮気味な俺に水を差した。

「……た、単なる願望くらい好きにさせろよ。」

ケッ……、こういう時だけまともに分析しやがるんだな。そう悪態をつこうとした時だった。

プッ……プッ……プッ……

仰向けに倒れ込んでいた変態は、食らった3発のBB弾をリズム良く噴き出した。そして徐^{おもむろ}に体を起こし、倒れこんだ時に歪^{ゆが}んだミラーグラスが落ちる。露^{あらわ}になったその顔は、やはり全くダメージを受

けていないかのように無表情……いや、虚ろうつろと言って良い。

これにはさすがのブラック店長も後ずさった。

「クソッ、何なんだこいつは！」

「このおじさん変なお！」

「てめえも十分”変なおじさん”だっ！ぬりかべ！」

「ひどおい！　ってそうじゃなくってさあ。力自体はその辺のマツチヨレベルなんだけど、私を殴ってる時、確かに拳の骨が折れてたのよ。自分へのダメージを考えない無茶苦茶な攻撃だったし、指が変な方向に曲がったりしてたもの。でも、一瞬で元に戻っちゃうのよ」

「何だと!？」

カンナさんの話の通りだと、この変態はまるで俺達と同族みたいじゃないか。怪我を驚異的なスピードで治すシンポテを持っているのだろうか。

「才田の他にもCBTについて同族がいるってことか？　それとも標本体の成れの果て……？」

「でも巧さあん、あの変態さんの気配、人間のものと少し違います。似て非なるものって感じですよ」

「ちよい待ちいな、電子。人間と似て非なる気配やなんて……それって……」

七佳が俺を見た。どうやら俺と同じような予感がしたようだ。

人間のように見えて人間の気配と少し違う、痛みを訴えない異様な無表情、シンポテを思わせる再生能力、そしてTNHで泉堂が言った、まだ本当の人間みたいな人造人間は作れていないという情報。全てを合わせると、辿たどり着く答えは一つ。

「あれが、CBTの人造人間だってえのか？　もうあそこまで人間に近い状態まで作れるなんて……」

「だからあんな頭沸いてそうなん？　でもいくらシンポテ使って怪我を治せる言ゆいても、食らった瞬間は痛いはずやろ」

「完全体じゃねえから痛つうてん点が備わってない、としたら説明がつくぞ」

思わず顔をしかめた。本物の人間より脳は劣るとは言え、戦闘要員としては十分動けるレベルだ。正直ここまでの人造人間を作れるようになっていたとは想定外だ。

「店長！ そいつはC B Tが作った人造人間かもしれないねえ！ 再生能力が異常に高いから、倒すには一撃必殺だ！」

「あゝあゝ！？ エアガンで脳か心臓でもぶち抜けてか！？ ンなことできるか馬鹿野郎！ いっそS W A Tでも呼んで来い！」

「アメリカの警察部隊なんかどうやって…」

「お兄ちゃんそれや！」

ブラック店長の無謀な要求から何かのヒントを得たのか、みかんが手を打って言った。

「普通に見て今の状況は、善良な一般市民が変態に襲われてるってことやん。さっさと警察通報したらええねん」

「そうよね！ みかんちゃん天才！ あんなの、無理して私達が倒さなきゃいけない義理はないわ」

「ワタクシも賛成ですう。日本にはS W A Tの代わりに機動隊がいまずよお。本物の銃だって、きっと持ってますう」

「……お前ら、戦隊のくせに身も蓋もねえな」

とはいえ、例え俺達だけで倒せたとしても、得体の知れない人造人間の処理はしょうがない。その辺に放っておくと、下手すりゃ俺達が殺人犯になっちゃう。ここは警察に任せた方が無難か。何とも情けないヒーロー戦隊だが、現実はこのものだ。

「あ、もしもし！？ アパートの前で変な人が暴れてんねん！」
みかんは早速110番していた。既に警察丸投げ作戦は始動したのだ。

「じゃ、私と七佳ちゃんは、警察が来るまで店長と兄貴の加勢よ。タクミンと電子ちゃんは、みかんちゃんの電話口で緊急事態っぽく騒いでいてね。その方が早く駆けつけてくれるから」

珍しくリーダーのレッドっぽく指示を出したまりさんは、七佳の手を引いて、再び拳を振り上げた変態の方へ走った。あのコンビなら、

また七佳ミサイルを発射するのだろうか。エアガンよりは時間が稼げそうだ。

見送った俺と電子は、「早^はよ来てえ！」と携帯に向かって怒鳴るみかんの横で、わー！ とかきゃー！ とか、思い切り叫びまくった。

大物の世間体くくく研究者の見栄

マツチヨ変態による鳥槻莊襲撃は、ちょっとした騒ぎになった。それもそのはず、変態は駆け付けた警察の制止は聞かないわ、威嚇の発砲は無視するわ、揚句に警察官3人で押さえ付けても暴れ続けるものだから、害獣用の麻醉銃まで出て来た。

麻醉は一応怪我じゃないから、変態のシンポテで一瞬で治ることもなく、とりあえずはぐったりしている間に拘束し、パトカーで連れて行かれた。

そして、気が付くとアパートの周りには野次馬ギャラリが出来ていた。あれだけ七佳ミサイルが飛び交い、警察が威嚇発砲まですれば、そりゃいくら人気絶不調の曰く付き物件でも、何事かと人は集まって来るだろう。

「……はあー、何だって警察の事情聴取ってのはあんなに同じことばっかうだ聞くんだ、面倒臭え」

すっかり夜も更けた頃、俺達はやっと警察署から解放された。犯人がまともに会話できる人物じゃなかったため、訳も分からず襲われた側のこっちが、事の次第を説明する羽目になったのだ。

「一人一人個別で……ほんと長かったですう」

「でも、最後”帰っていいよ”って言われた時、えらい呆気なかったと思わん？」

「うん、それまでネチネチうざかったのに、急に追い出されたって感じよね」

そうなのだ。「何か恨まれる覚えは？」とか「犯人の身元に心当たりは？」とか、詳しいことは変態に聞け！と暴れたくなるくらいしつこかったにも関わらず、いきなり署内がバタついたと思ったら、「あ、犯人の身元が分かったから、もう帰っていいよ」とあっさり聴取は終了したのだ。一体どこの差し金なのか、本当にCBTの人造人間なのか、確認しておきたかったのだが、捜査機密だとか

言われて取り合ってはもらえなかった。

腑に落ちなくて顰めっ面しかをしていると、ブラック店長が腕組みをして、考え込むように唸うなった。

「んん、C B T 製薬は確かにでかい会社だが、薬の開発ってのはかなり金がかかるし、世に出しても馬鹿売れするようなもんじゃない。色々黒い噂があるが、1つの会社だけで人造人間の研究ができるほど儲もうかるわけがねえんだ。だがもし各界の大物達が協力して金を出してるとすればあるいは……」

「マジですか？　じゃあ、変態の身元が割れた途端、不自然に追いつ出されたのは、警察に影響するくらいの人物も絡んでるからとか？」

「あくまでも推測だがな。それくらいでないと、研究できるようなテーマじゃねえ」

「おお？　あんなに嫌がってたのに、やっと情報屋っぽくなったんやな」

かなりヤバイ連中が敵だと思われるというのに、七佳はこんな時でも戦隊ごっこと絡めてくる。まあ、コイツらしいといえばそれまでののだが。

「妙な遊びに付き合ってやるつもりはないが、一応鳥槻荘は取引先だし、俺も奴と戦っちゃったからな。不動産屋として持ってる近所の噂や情報くらいなら話してやる」

「ごめんねハニー、巻き込んでやってえ。まさか私のためにエアガンまで持ち出して助けに来てくれるなんて……」

「これは元々、対お前用に持ち出したんだ。また嘘ついて襲われかけたらたまらんからな。いつになく切羽詰まった電話だったが、念のため用意しただけだ。結局今回は本当に変態がいたわけだが」

「いやあん、何気に警戒心強いよねえ」

ということは、カナナさんはよく店長に嘘のS O Sを送っては、襲おうとしたというのか。電子以上に油断ならない妖怪だ。

それからC B Tのある場所を聞いて店長を帰した後、野次馬も引いて静かになったアパートに戻り、カナナさんに今までの経緯を詳

しく聞いた。

「どうやら俺達が大阪に行った後、研究者らしきミラーグラスの奴が日に数回、アパートの中を覗くように偵察していたらしい。そのたびにカンナさんは紫の妖気を纏いながら睨みつけ、追っ払っていったらしい。だが今日はそれまでと様子が違った。車で乗りつけ、ひ弱そうな研究者が中から引っぱり出したのは、上半身裸の屈強な男。しかしその顔は緩み切り、口から涎まで垂らしていた。その異様さにただ事ではないと察知したカンナさんは、慌ててブラック店長に加勢を頼んだのだ。

「もしほんまにC B Tの人造人間開発にすごい大物が絡んでたとしたら、ヨッシー救出はあんま派手にはできんかもな」

七佳は考え込むように頬杖を付いた。

「あらどうして？」

「あんなあまりりん。どんな大物なんか知らんけど、目え付けられてしてもたら、今度どんな手使てあたしらを潰しにくるか、分かったもんじゃないで」

「ひよお！ また他の変態さんを送り込んでくるってことですかあ？ 警察はもう当てにできませんし……次は無理ですよ」

「せやろ。あたしらもカンナも、弱そうなC B Tの研究者とか、泉堂、栗林くらい阿呆な同族ならなんとか返り討ちにできる。あくまでもあいつらは本物の人間やもん。でも痛がらんわ頭沸いてるわ話はできんわ、おまけに警察に任せられへん偽人間なんか対抗のしようがない。何とか才田だけと接触してどつき回して、ヨッシーを無難に連れて帰る手を考えんと……」

七佳の考えはもつともだ。この先もつと他のシンポテを持った人造人間と戦うなんて、御免被りたい。既に標本体になってしまった被害者達には悪いが、今のシンポテレンジャー、いや、富利異盟損にも、C B Tを根本からぶっ潰せるに足る戦力はないのだ。

「問題はどやってC B T内にいる才田の所に行くか、だな。T N Hでも他の研究者達と会ったりドンパチ戦って、それでも取り逃

がしたんだ。ただ乗り込むだけじゃだめだろう」

俺がそう言くと、皆黙り込んだ。基本馬鹿のメンバーだから、作戦を立てるのは苦手なのだ。斯く言う俺も、何も考え付かないから同じ穴の貉^{むじな}なのだが。

「あ、はいはい！」

みかんが勢い良く手を上げた。

「何や、みかん」

「電子おねえちゃんに、会社の外からひろろんの気配を探らしたらええねん」

「ひろろ……あ、そーいや心理作戦で、あだ名付けとったな。忘れてたわ。みかん、よう覚えとったなあ……」

「今あだ名のことはどうでも良い。それより電子、お前特定の気配なんて探れるのか？」

七佳これ以上喋らせると、話があだ名の方にずれそうだから、とりあえず割って入って黙らせた。

「周りと全く違う特徴を持っているなら……。でもそんな気配の人じゃないんで難しいですう。歓喜とか恐怖とか、常態でない感情があればできるかもしれませんけどお」

「恐怖やな。それくらいやったらアタシ、何とかできそう。丁度暗^{くら}なってきたことやしな。ウシシシ……」

不安げな電子の返事に、みかんは悪そうな笑みを浮かべた。

草木も眠る丑三^{うしみ}つ時……ではないが、空はどうに真っ黒だ。都会^ひで星なんか滅多に見えない。時折^{ときおり}そんな夜空と同じ色の黒猫が、人^{ひと}気のない道路を横切る。縁起悪いことこの上ない。

みかんが思いついたのは、名付けて”恐怖の都市伝説”作戦。あの才田が都市伝説ごときで怖がるようなタマだとは思わないが、他に誰も何も思いつかないから仕方ない。

「大丈夫なのか？ あいつはそんなビビリ野郎には見えなかったけどな」

「うーん、どうでしょう。この時間だと、会社の中にいる人の数も昼間より少なくなるでしょうし、もしかしたらちよつとした動揺でも分かるかもしれませんよお」

「……だと良いがな」

「もう、お兄ちゃんぐちぐち言ーとらんと、早^はよひろろんの携帯番号出して」

偉そうに催促され、ため息をつきながら携帯をみかんに渡した。

CBTは俺が前に住んでいた雑居ビルから歩いて15分程の所、秋葉原の一角にあった。漫画喫茶から離れるのは惜しかったが、引越して心底良かったと思う。あの頃は行動範囲が極端に狭かったから、こんな所にサングラス組織があったなんて、全く知らなかった。

そこは自社ビルのように、他のテナントの看板はない。肝心のCBTの看板には……

「CBT製薬研究所……ん？ まだあるぞ。……Cloned Biroido Technology……ってまんま書いてんじゃねーか」

「どらどら、……ほんまや。何かサブタイトルみたいの下に小^ちっさく書いてんなあ」

「何で誰もこれ突っ込まないんだよ……。その前にこんな物騒な社名に営業許可出さなっつーの」

「せやから警察だけやなくて、役所も何も言われへん大物が絡んどるっちゅーことやろ」

だからって堂々と書くか？ 普通。そんな大物が絡んでるなら、人造人間とかクローンとか、非人道的なことはあまり世間に知られたくないと思うはずなんじゃないのかよ。

……いや待て、これまでのパターンから考えると、どうせ研究者達が自分達の開発していることをちよつとだけひけらかしたくなつて、大物に黙って勝手に小さく看板に付け足した、とか有り得るぞ。近寄ってよく見ないと読めないくらい小さい文字だしな。だいたい製薬会社の看板をよくよく見詰めるような奴が、この秋葉原にいるとは思えない。偶然誰かが気付いたら、研究者が心の中でクスリと笑って自己満足するのかもしれない。

くっだらねえ研究者を雇ったもんだぜ。本社だろうが大物関係者がいようが、中で働いてる奴らは商売根性丸出しのTNHと同レベルだ。

「……非通知設定は……えっと、これやな。………、よっしゃ、始めるで」

俺が呆れて遠い目をしている間に、みかんの準備は整った。

メリーさんの電話

ここはC B Tのゴミ捨て場。だがこれと言って怪しいゴミやグロい破片があるわけでもなく、ただ週に1度の回収を待つダンボールが重ねられているだけだった。

みかんが俺の携帯を耳に当て、才田にかけ始めた。

トゥルルル……トゥルルル……トゥルルル……

周りがシンツとしているから、携帯から呼び出し音が小さく漏れる。非通知の着信に才田が出てくれるかどうか。

トゥルッ……

音が急に途絶えた。少しの間を空け、「はい？」という声。夜中の非通知ほど怪しいものはないのに、どうやら才田は出たようだ。みかんがしめたとばかりにニヤつき、鼻を摘んで猫なで声を出した。

「もしもし？ 私メリーさん。今ゴミ捨て場にいるの」

「……え？」

才田の戸惑った声が聞こえたが、みかんはそれだけ言う構わず電話を切った。

そう、俺達は今、才田を怖がらせて気配の変化を電子に探らせるため、都市伝説”メリーさんの電話”を仕掛けているのだ。

「……何も本当にゴミ捨て場からかけるたあねーだろ」

「何言ーてんねん。相手を怖がらせるには臨場感が必要や。こっちもまず形からきっちりせんと、ただの悪戯いたずらやと思われるやん」

「それもお前が学校でやってるスパイごっこで得た教訓か？」

「うん。一回これやってみたかってん。友達にこんな電話かけて驚ろかしたら、親が警察に通報してまうもん」

そう言ってみかんはクソ餓鬼らしい悪そうな笑みを浮かべた。

「で、次は”タバコ屋さんの角にいるの”やねんけど、なさそうやから別ので行くで。とりあえず、中に入れそうところ探そ」

そしてビルの壁沿いに、C B Tの敷地内をウロウロと歩く。途中

みかんが「花壇の脇にいるの」とか、「排気口の下にいるの」とか電話をかけていた。いちいち出ている才田は一体どういうつもりなのだろう。俺達の仕業しわざと気付いてるのか。それならメリーさんごっこをしている意味がねえ。

徒労とろうに終わるのかと思いつつも、2階の窓で開いている箇所を見した。電気が点ついている。みかんがふわふわ浮いて中をこっそり覗くと、研究者らしき白衣の男が、残業でもしているのだろう、熱心にパソコンに向かっていたらしい。窓を開けているのは、会社からクールビズという名の節電を言い渡されているからなのかもしれない。

「ほなあたしがノしてくるわ」

七佳がアキレス腱を伸ばしながら言った。

「せーの、ほっ！」

膝ひざを軽く曲げ、そこから両腕を伸ばして一気に飛び上がった七佳の手は、見事に窓のサンを掴んだ。邪魔そうな腹をよじりながら中へと入るその姿は、忍び込むと言うには若干無理がある。残業している奴に気付かれて騒ぎにならないか、マジで不安だ。

だが一端奥に姿を消した七佳は、程なくして窓際に戻ってきた。口をパクパクさせながら下を指差している。きっと中から回って下の階の窓を開けるのだろう。

俺は”了解”の意味を込めて、手を上げ頷いた。

「中の奴と争うような物音はなかったが、どうやってノしたんだろうな」

待ってる間、ポツリと言ってみた。

「ちょっと見てくるわ」

俺の独り言を聞いたみかんは、再び浮き上がって行った。飛べるんだから、そのまま中に入れば良いのに、と一瞬思ったが、あいつには一人で無茶な行動を取ったという前科があるから、言わないでいた方がいいだろう。

そしてみかんは浮きながらポケットを探り、俺の携帯を出した。

「もしもし、私メリーさん。今窓から覗いているの」

しつかりメリーさんごっこは続いているのだ。

カララ……

不意に窓の開く音がした。1階はまだ暗く閉じたまま。もしかして才田か？　だが俺達の見渡せる範囲の窓は動いた様子がない。

「惜しいな……別の方向の窓だったか」

「でもお、音のした一瞬だけ、動揺の気配がありましたあ。あっちの方角ですう」

電子がビルに向かって右斜め上を指差した。

「マジか？　じゃあ入った後はそっちに行けば、才田を見つけられるかもしれねえな」

まあ、例え俺達の悪戯と気付いていたとしても、いきなり”窓から覗いている”なんて言われりゃ、確認はするよな。

「アハハッ、あなたに見えなくても私には見えてるわよ」

みかんが急に笑いながら言い出した。すぐに窓がピシヤリと閉まる音が響くと、携帯を切って降りてくる。

「……何言ってたんだ？」

「え？　”いないじゃないか”って言われたから、”私は見えてるわよ”ってハツタリかましといてん。その方が怖いやろ」

「怖がるというよりい、動揺が少し大きくなりましたあ」

「なあんや、まだ足りんのかあ。ほな次は電子お姉ちゃんにかけてえな」

肩をポンと叩かれて言われた電子は、「ワタクシですかあ？」と首を傾げた。

「怨霊の気配を纏まとってかけた方が怖いやろ？」

「ワタクシの気配が電波に乗って届くかは分かりませんよお」

「ええねんええねん。さっきの電話で”藤間とうまさんでしょ？”って言われてもーたから、とつくにバレバレやねん。次からはアタシがかけるよりお姉ちゃんがかけた方が効果的や」

やっぱり才田は気付いていたのか。だがそうでもなきゃ、夜中に非

通知のイタ電がかかってきても、そうそう毎回出るわけがない。

「部屋の中はおっちゃんがパソコンの前でつつぷしてただけやったわ。何も壊れたり倒れたりしてへんかった」

「ということは、七佳ちゃんは後頭部にガツンと食らわせたのかしら？ 前にあの子、武器を使うより素手の攻撃の方が好きって言うてたもの」

まりさんは口角^{こうかく}の横に人差し指を当てて言った。

「得意じゃなくて、好きなのかよ……」

「そう。なんかねえ、攻撃するなら殴ったぞっていう手ごたえが欲しいんだって。きつと一発でスコツと即倒させられて、気持ち良かったはずよお」

「まあ、想像は難^{かた}くねえな。シンポテ使ったあいつは野生のゴリラ並だし。それにしても、あんなにオタオタ転がりこんだのに、全く気付かれてなかったっていうのか」

「おっちゃん、めっちゃ集中しとったんかな。パソコンの画面は目が回りそうなくらい数字とアルファベットが並んでたわ。」

そんなどうでも良い話をしている間に、目の前の窓に七佳が現れた。一人ずつ順番に入り、電子の指差した方向に歩く。明かりは足を頼りなく照らすフットライトと、緑の非常口の表示灯だけだ。メリーさんの電話を受けている才田以上に俺達のほうが怖い。

3階まで上がった所で、電子の足が止まった。

「ここかもう少し上か……その当たりなんですけどお」

「ほなもつかいかけよつか。はい、どうぞ」

みかんは満面の笑みで携帯を電子に渡した。メリーさんごっこが楽しくて仕方ないようだ。

トゥルルル……トゥルルル……

少し困ったような表情の電子だったが、言われた通り電話をかけ始めた。そして「はいはい？」と才田の面白がるような軽い返事が漏れた時……

「もおしもおおし……私メリーさあん。今あ、あなたの部屋をお、

さあがぁしいてえいいまぁあすうううつ！」

携帯に向かつて電子が怨霊化した。薄暗い雰囲気も相まって、デリケートと言われた俺だけでなく、他の奴らも電子から数歩離れた。きつとこいつの天職はヤンデレメイドよりもお化け屋敷だ。

「あつ、今気配が大きく動きました！ あつちですう」

怨霊に引いたのは俺達だけではなかったようだ。電波は禍々しい気配をちゃんと相手に伝えたようである。気配を辿って足早に歩き出した電子に続き、階段を上った。

4階は他の階と少し違っていた。廊下に面した扉が、大きく頑丈そうな両開きなのだ。普通のドアではない。早くもC B Tの秘密にビンゴしちゃったのだろうか。

「ここですう」

そこは他の変わらない扉だった。だが電子が言うならこの中に才田がいるのだろう。

トウルルル……トウルルル……

今度はみかんがかけた。居場所が分かれば電子のシンポテを無駄遣いすることもない。また肝心な時にエンストを起こされたら敵わない。

「もしもし、私メリーさん」

「あれ？ さっきは轟さんっぽかったのに。また藤間さんなの？」
漏れ聞こえる才田の声は、少しほっとしたようだった。

「今あなたの部屋の前にいるの」

「ええ？ 早いね。まあいいか。鍵は開けてあるよ」

「……なんやねん。もっとビビリいや。おもんないな」

「馬鹿なことやってんじゃねえ。入るぞ」

口を尖らせたみかんを小突いて、両開きの扉を押した。

意外に軽く開いたその奥に、相変わらずムカつくくらい綺麗な顔をした奴が、初めて見た時と同じように、ニヒルな笑みを浮かべてこちらを見ていた。

メリーさんの電話（後書き）

いつも拍手をしてくださってる方、ありがとうございます。こんな趣味丸出しの作品にポチっとしていただいて、とても嬉しく思っております。

私事ですが、メリーさんネタ、前話掲載時には既に決まっていたんですけど、急に仕事が忙しくなりました……休みがなく、ちょこちょこ書いて、ようやくアップすることができました。すみませんが、しばらくゆっくり更新が続きます。

変態再び（前書き）

注；流血ダラダラではありませんが、後半の戦闘シーンが少し激しい表現になっています。あ、いやカンナ&店長VS変態の時に注意書きを書くべきだったんですけど、あの時は忘れてました……

変態再び

「ヨシオさん！」

ニヒルに笑う才田の足元には、人質に取られていグリーンことヨシオさんが転がっていた。

「まだ大丈夫だよ。眠ってるだけだから」

何を大げさな、と言わんばかりに才田は肩をすくめた。

窓からの月明かりのみで薄暗い。ここは奥行きより横に長い部屋らしく、窓のない一角は真っ暗でよく見えないが、何となく気味の悪い感じがした。

「こんな所で電気も点けずに、よくメリーさんの電話ごっこなんぞできたな」

「都市伝説とかミステリーは好きなんだ。信じるかどうかは別としてね。体験できて楽しかったよ」

余裕綽々よゆうしゃくしゃくの様子に、コイツの部屋の本棚を思い出した。確かミステリー小説のシリーズが並んでいたはずだ。

「来るなら明日かなって思ってたんだけど」

「わざわざアパートに変態送り込んで急せかすから、夜分遅くに恐れ入りますが来てやったんだぞ」

「……凄い謙へりくだり方だね。志牙君しが、だんだん田ノ中に似てきたんじゃない？」

「才田、言って良いことと悪いことつてもんがあるだろ。ミサイル馬鹿と一緒にすんじゃないねえ」

「……シバいたらか巧」

横から七佳の視線を感じたがスルーした。

「お望み通りCBTに来てやったんだ。ヨシオさんを渡せ」

何も知らずに気持ち良さげな顔で眠る売れないホストを指差すと、思いの外才田ほかはあっさりその場を退いた。奴の動きに警戒しつつも、全員で部屋の中に入り、ヨシオさんの所へ寄る。まりさんがぐった

りとした彼の体を起こした。

「良かったあ。本当に眠ってるだけみたあい」

ヨシオさんの呼吸が規則正しいことを確認したまりさんが言うと、皆一先ず安堵の息をついた。

「俺達の苦労も知らないで……ふんっ……」

穏やかな寝顔を見ていると急激に腹が立ってきて、電子を起こした時と同じくシュールストレミングの臭いを念じながら、指をヨシオさんの鼻先に押し付けてやった。

「……………ブッ……ぐえっ、ごほごほっ……げーほげほっ！」

効果観面、一発でヨシオさんは飛び起きた。

「今のヨシオさんの苦しみはあ、ワタクシが一番よくわかりますう。モロに吸い込むと殺人的な威力ですよ」

「それにしても、今回は臭いが広がらんなあ」

「あらほんとね。窓開けに走らなくても良さそう」

「当たり前だろ。これで商売やってきたんだ。微調整くらいできる」俺は前回みたいに自分まで臭いを嗅いでしまわないよう、0.5秒くらいでシンポテを止めたのだ。おかげでほんのり臭いか気のせいかくらいになった。

「むう!?!? ここはどこだ!?!」

今までの経緯を知らないヨシオさんは、目を覚ますとキョロキョロして慌て出した。

「ヨッシー、ここはCBTの中や」

「何!?!? TNHじゃないのか!?!」

「えーっとなあ、どっから話すべきやろ」

頬をポリポリ掻きながら言う七佳は、チラリと俺を見た。そういえばヨシオさんは、外で眠らされて連れ去られたため、才田とCBTの繋がりも、クローン人造人間のことも知らないのだった。

「敵地で全部話してる暇はねえが、面倒臭い性格のヨシオさんが、掻い摘んで理解するかどうか……だな」

「いやあ、ここまで話が進んで、今更一から説明って、ほんまに面

倒臭いねんけど」

「俺だって面倒臭えから嫌だ」

「もう、お兄ちゃんもお姉ちゃんも、掻い摘むからあかんねん。面倒臭いおっちゃんには、シンプルに極論だけ言えばええんや」

俺と七佳が説明を押し付けあっていると、みかんがその役を買って出た。

「おっちゃん、今から敵を倒してここから逃げる。それだけや！」

「ほう、そうなのか」

「そーそー。頑張ったら後でお姉ちゃん達がA to Zで教えてくれるから」

「よし分かった、任せろ」

……良いのかそれで。ってか結局面倒臭えことを後回しにしただけじゃねーか。

その時、才田のいた方から聞いたことのある呻^{うめ}き声がした。ハッとなって振り向くと、そこに奴の姿はなく、代わりに月明かりの届かない暗い闇から、上半身裸のマッチョ変態がのそりと出てきた。もう警察署から回収されたのだろうか。続いてもう一人、マッチョではないが同じく上半身裸の変態も……

「ちっ、今度は二人かよ？」

「あいつ、きつと奥に逃げたんや」

「何なんだよ、俺をC B Tに誘^{おび}き寄せるためにヨシオさんを人質にしたんだろ。用件も条件も言わずに何がしてえんだ」

「そんなん、この変態達を倒して追いかけな、聞くにも聞けんやん」
対策を立てる間もなく、マッチョ変態は夕方と同じように意味不明な声を上げながら向かってきた。

バキィッ！

一撃目は、前に出たまりさんが背中を硬化させて受け止めた。

ゴキッ！ バキッ！

拳から耳を覆いたくなるような音を立てながらも、マッチョ変態は構わず攻撃し続ける。カンナさんの時より距離が近いから、その回

復速度がよく見えた。確かに指が曲がろうが瞬間的に元に戻っているのだ。

「よし、ここは俺の飛び道具で！」

「駄目だヨシオさん、あいつは店長のエアガンを口の中に食らっても平気だったんだ」

「そ、そうか。なら、後ろにいるもう一人に……」

ヨシオさんは盾になっているまりさんの横から顔を出し、マツチヨでないただの変態に、鼻の穴の照準を合わせた。

「うああおえあああ！」

「ヨッシー危ない！」

「何!？」

マツチヨ変態は拳の行き先を、急にヨシオさんの顔へと変える。こいつ、頭沸いてそうに見えて、闘争本能だけは上等なのか!？

ガキイツ!!

咄嗟にまりさんがヨシオさんがいる方の肘を後ろへ振り、マツチヨ変態の拳とぶち当たった。殴る衝撃と、硬化された肘先から来る逆方向の力が一点に集中し、マツチヨ変態の拳は無残にへこんだ。だがそれを見て目を覆いたくなるより前に、やはり一瞬で治ってしまう。

「うおらあああ！」

一瞬、誰の声か分からなかった。まりさんが掛け声と共に、肘を振った勢いでそのままくるり体を反転させ、今度は逆に変態マツチヨの鳩尾をぶん殴った。

ドオオン……

鈍い重い音が響く。殴り合いでこんな音が出るのだろうか。

「シンポテ使えるのは胴体だけじゃねえぞゴラァ！」

ドオン……ドスツ、ゴスツ……

そのまままりさんは連続で殴り続けた。どうやら今は拳を硬化させているらしい。ホルモン注射を打っているニューハーフのまりさんがどこまで腕力を持っているのかは知らないが、例えば女性の力でも、金属バット等で思い切り鳩尾を突いたくらいだと考えたら、かなり

のダメージだろう。

「オラッ、オラッ、ウォラアッ!!」

「ま、まりさん、声が男になってるぞ!」

「あゝ? え? あら、いやあん!」

我に返ったまりさんが頬に手を当ててぶりっ子ポーズを取ると、マッチョ変態は口から泡を吹いて後ろに倒れ込み、後頭部をしかと打ち付けた。

これで少しは時間が稼げるか? そう思って才田を追おうとした時、今まで存在感のなかったただの変態が、口を大きく開けて構えていた。

「アアあああゝあゝ、ー!ー!!」

それは声と思える代物じゃなかった。サイレン音……いやそれをもっと高くした音を、大音量のスピーカーから耳元へ一気に叩きつけられたようだ。

耳が割れる。肺が震える。指で耳穴を塞いでも、頭の中で音がガン共鳴する。

ただの変態の肺活量にも限界があるのか、声はそう長くは続かず止んだ。大きな音に耐えていただけなのに、全身にどつと疲れが押し寄せた。他のメンバーも膝をつき呆然としている。月明かりを招き入れていた窓ガラスには、亀裂が走っていた。

手前の床を見れば、マッチョ変態の口から流れる泡の量が増えている。

「……おい、仲間まで、しっかり巻き添えじゃねえか……。こりや……無差別だな」

不思議と自分の喉まで大声を出して暴れた後のようにカスカスだ。

「そ、そおですね……。じゃあ無差別にはあ……。無差別でやり返しますう……。」

「電子……? あんまり前に出ると、危ねえぞ」

膝だけでなく手までついて這いつくばっていた電子は、顔に掛かった長い黒髪をそのままに、ゆっくりと立ち上がった。だらんと首と

腕を垂らし、猫背で立つその姿は、シンポテを使う前から心霊現象
さながらだ。

ただの変態が再び口を開け、息を吸い込むと同時に、電子の髪も
膨れ上がる。

「アアあああ、あ、……」

「ひよおおおおおお!!」

あの殺人音を掻き消すかのように、電子からただの変態に向かって
まがまが
禍々しい気配が炸裂した。黒く^{よじ}澱んだ紫の靄^{もや}が、二人の間で何かと
ぶつかり、しきりに押しているのがはつきり見える。

ズゴゴゴゴゴ……

怨霊の気は地鳴りのような音を立て、徐々に変態との距離を縮めてい
った。そして声を出す息が切れると同時に、変態は黒紫の闇に一瞬
で飲まれた。

「……つアツキョーイー!!」

ただの変態は悲鳴とも断末魔とも言える妙な声を上げ、ドサリと崩
れ落ちた。電子の気配が収束し、闇から開放された彼は、小刻みに
けいれん
痙攣している。

……相当な恐怖と圧力だったんだな。同情するわけじゃないが、
何となく分かるぞ、その気持ち。

因縁のオヤジ狩り

ただの変態が倒れたのに少し遅れ、次は電子が後ろに倒れ込んだ。
「危ねっ……おい!？」

思い切り後頭部を打つ角度だったから、おれは慌てて抱きとめた。
覗き込んだ顔色は、普段の青白いさを通り越し、呼吸で薄っぺらい
胸が上下していなければ死体と見間違うほど血の気がない。

「ち、ちよつとやり過ぎましたあ……。思ったよりも向こうの音波
が強くてえ……。今まで出したことないレベルまで気配を高めたら……
さすがにもう力が入りません……。っケホッ」

「もういい、あまり喋るな。よくやったよ」
力なくクタンと垂れた頭をぐりぐり撫でると、電子は弱々しく笑った。

「……巧さんが普通にワタクシを褒めるなんて……。嵐の前触れでし
ようか……」

「うっせえ。ヤンデレを飼うには^{あめ}飴と^{むち}鞭を使い分けなきゃなんねー
んだ」

「ツンとデレの……。使い分けですね」

「デレてねえ。いい加減口を閉じろ」

その時、今まで泡を噴いていたマッチョ変態が動き出した。もう
回復しつつあるのか、仰向けだった体を返し、起き上がろうともが
いている。

「やだもー！ こいつキリがないわ。やっぱり殺^やらなきゃ駄目なの
お？」

一番嫌そうな声を上げたのは、さっきこのマッチョ変態を殴り倒し
たまりさんだ。

「うむ……。だが俺達に致命傷を与えられるような武器はないぞ」

「ってかヨッシー、武器があっても相手は人造と言えども生身の人
間と同じよお。自分の手にかけて殺すのは、ちよつとトラウマにな

りそうだわ……」

「今はヒーローも戦い難い世の中になったものだな」

いや、今も昔もその辺は変わらないと思うが……

そう言おうとした時、後ろから何かが頭の上を通り越して、ふわと前に出てきた。

「あ、おい！　ふらふら近づくんじゃねえ、みかん」

俺の制止を無視して、みかんは膝立ちまで起き上がったマツチヨ変態のすぐ上まで迫った。それからムキムキに盛り上がった首筋の僧帽筋に跨ると、シンポテを解いた。

小6と見間違えような小柄のみかんは軽い。肩の上にそんな奴が乗っかってても、マツチヨ変態は全く意に介した様子はなく、こちらから見ていても、餓鬼が肩車されているようにしか見えない。

「おんぎゃあ！」

いきなりみかんが叫ぶと、同時にマツチヨ変態の体が少し前に傾いた。

「おんぎゃあ！　おんぎゃあ！」

みかんの声に合わせて、段々変態の傾く角度が大きくなっていく。

「あ、あいつ今、重力かけてんのか!？」

「よっしゃええぞみかん！　そのまま押し潰してまえ！」

「おんぎゃあ！　おんぎゃあ！　おんぎゃあ！」

七佳の応援に答えるかのように、みかんは更にマツチヨ変態の上半身を押して倒していった。

そしてとうとう屈強な体が床に這い蹲った。みかんは声を妙な掛け声を出すのをやめ、うつ伏せになったマツチヨ変態の首根っこの上辺りに胡坐をかいた。だがまだシンポテは使っているようで、マツチヨ変態は起き上がろうともがくも、みかんを跳ね飛ばすことができない。

「……今度は子泣き爺ごっこかよ」

相手の乗っかり、段々と重くなって最後には石のように鎮座したみかんは、まさに昔ながらの日本の妖怪だ。

「ピンポン。お兄ちゃんよお分かったな。ここは子泣きみかんが押さえとくから、早^はよおひろろん追いかけえ。見せしめにあいつをシメとかんと、またC B Tは変態送り込んでくるで」

みかんは月明かりの届かない奥の暗闇を指差し言った。

「見せしめて……お前、中々エグイ性格してんな」

「でもみかんの言うことは一理あんで。このまま何もせずにさらっと帰ってもしゃあない。あいつをシバくなり、ここの機械を壊すなりしとかな」

七佳の言葉に、他の皆も頷^{うなず}く。

「……そうか。じゃあみかん、戻ってくるまで電子を見ててくれ」

「うん、了解」

俺はまだぐったりしている電子を、マッチョ変態に乗ったみかんより少し離れた壁に持たれかけさせた。

「よし、行こうか」

「けっこう時間食っちゃったから、何か仕掛けてくるかもしれないわ。慎重に行くわよ」

「せやな。とりあえず暗いから電気のスイッチ探そう。壁のどこかに付いてるはずや」

ただの変態が倒れているその向こうへ進もうとすると、ヨシオさんが後ろに振り返った。

「みかんちゃん、あまり負荷をかけ過ぎると、君の骨や筋肉に甚大^{じんだい}な損傷^{きた}を来^{きた}す可能性が……」

「もー、負荷とか骨とか言われても分からんし。早^はよ行けや」

年配者の忠告は、知識の偏^{かたよ}った女子高生には、余計なお世話だったらしい。富利異盟^{ふりいめいぞん}損の社長の時も興味なさげだったしな。もう少し簡単に噛み砕いた言葉の方が良かったのかもしれない。ヨシオさんには無理そうだが。

壁に手を当て進むと、その内に電気のスィッチらしきものに触れた。押すと蛍光灯の白い光ではなく、青白いぼんやりとした明かりが点いた。

部屋に浮かび上がったのは、大小様々な機械類。その奥に巨大な円柱型の水槽がいくつも並んでいる。上の方まで液体が詰まっているが、機械が邪魔で何が入っているのかは見えない。だが、人間間を作り出している研究所の水槽だ。果てしなく嫌な予感ばかり浮かぶ。

警戒しながらゆっくり進むと、俺達の足音が急に増えた。いや、俺達の足音に他の足音が重なったのだ。止まって耳を澄ますと、パタパタという音がランダムに聞こえる。向こうは警戒していないようだ。

「……来たか？」

「うむ、足音が複数だ」

「マジい？ いい加減うんざりしてきたわあ」

「よっしゃ、こういう時は先手必勝や」

七佳は大きな機械に遮られて未だ見えない敵の方を睨みつけた。

まりさんの背中に七佳が足をかけるや否や、ようやく敵が姿を現した。

「七佳ミサイル！」

最初に見えた敵は2人。悠長に並んだそいつらに向かって飛んだ七佳は、頭をガードしていた両腕を広げて突っ込んだ。

ドゴォツという痛そうな音を立て、敵二人は盛大なリアットをダブルで食らい吹っ飛んだ。

「あ、あいつらは！？」

倒れた敵の姿を見てヨシオさんが驚愕の声を上げた。

「知ってる奴なのか？ ヨシオさん」

そいつらはさっきまでの変態とは違い、上半身も服を着ていた。ダボツとしたTシャツに、トランクスが見えるくらいずらして履いたGパン。ジャラジャラと首や腕にアクセサリーをつけ、片方はキヤップを被っている。いかにも今時の不良と言った感じだ。

「カネダセ、オッサン」

間を空けず別の機械の陰から出て来た他の不良が、ヨシオさんに向かって言った。

「また性懲りもなく……。こいつらは、俺をしつこく狙っていたオヤジ狩りの連中だ」

「何だって!？」

ということは、ヨシオさんはオヤジ狩りと称したCBTの奴らと日々戦っていたのか？ それならいかにも儲かってなさそうな中年ホストの彼が何度も襲撃されるのも納得がいく。目的は金じゃなくて、連れ去って標本体にすることだからだ。

そして後からゾロゾロと不良達が出て来た。全部で5人。それぞれ手にナイフやメリケンサック等の武器を持っているが、異様なことに、顔は皆同じだ。

「カネダセ、オッサン」

「まだそんなことを言っているのか？ いい加減にしろ」

「カネダセ、オッサン」

「そんなことをしてばかりでは、世の中やっていけないぞ」

「カネダセ、オッサン」

「こらっ、年配者の説教には耳を傾けるものだ!」

さっきから不良達は口々に同じ言葉を繰り返す。もしかして、これ以外の台詞を喋れないのだろうか。

「カネダセ、オッサン」

「社会に不満があるのは分かるが、若いのだから人生投げちゃいかん……」

「ちょっと待てヨシオさん! 何マジで説教してるんですか!」
武器を構えながらずいずい寄って来る不良に、尚も言い募るヨシオ

さんを見兼ね、俺はストップをかけた。

「彼らに更正こうせいの余地を与えているんだ。こんな夜中に帰らずウロついて、親御さんおやじはきつと悲しんでいる！」

「どこまで天然なんですか！ C B Tの中で襲って来てるんだから、人造人間ですよ！ 少しは流れを読んでくださいっ!!」

「何っ!? 一体どういう流れだったんだ!?」

「……全員同じ顔、同じ台詞。さっきの変態よりは人間に近いですけど、十分異様な連中じゃないですか……」

人が良いにも程があるぞ。普通なら最初にオヤジ狩りされた時に怪しむだろ……

「なら今までやってきた愛の鉄槌てつづいは無駄だったというのか……!」

「愛の……?」

「どんな悪餓鬼でも、愛情を持って叱れば分かってくれると思っていたのにっ!」

「……分かる程脳は発達してないみたいですね」

熱く悔しがるヨシオさんに対して、俺が素っ気ない言い方になってしまったのは仕方がない。この人は性格上、ホストより生活指導の先生の方が向いていそうだ。横で話を聞いていたまりさんは、さっきから黙っていると思っていたら、笑いを堪こらえてプルプル震えているだけだった。

「説得が通じないのなら致し方ない。こいつらは俺がカタをつける」

そう言って俺を庇うように前へ出たヨシオさんは、全く格好良く見えなかった。

七佳と洋一

不良と対峙したヨシオさんは、鉄玉をいくつか鼻の穴に詰めた。本人は大真面目なのだろうが、因縁の対決を前に全く緊張感を感じられない。

「君達人造人間に足りないのは、人としての感情だ。それがなければ、どんなに話し合っても分かり合えることはないだろう。素になったオリジナル君となら、あるいは違っていたかもしれないが」彼はオウムのように同じ事しか言えない不良のクローン人造人間に向かって、また朗々と説教をし始めた。どうでもいいから、やるなら早くして欲しい。モタモタしている間に才田が次の人造人間を仕掛けてくるかもしれないのだ。

「よって君達に酌量の余地はない。この嘉尾爽汰が、家庭裁判所に代わって天誅を下す！」

「わお！ ヨッシーカーっこいい！」

「カネダセ、オッサン」

まりさんには受けたようだが、不良達は相変わらず無表情にじりじりと間を詰めてくるだけだ。

ヨシオさんは片鼻ではなく両耳を塞ぎ、口から大きく息を吸って肺を膨らませた。

「ふふんぬっ！！」

そして左から右へ顔を勢い良く振りながら放たれる鉄玉達！ 乱れ撃ちとも言えるそれらはまず、5人の内の3人に命中した。

「ハハハッ！ 何度同じ技にやられたら気が済むのかな？ 学習したまえ！」

「不完全な人造人間に学習もクソもないと思いますけど……」

「巧君、言葉の綾をいちいち取っていては、大きな人間になれないぞ。フハハッ」

だが撃たれた3人は、鉄玉の衝撃で一度後ずさるも、痛がる様子

もなくまた体勢を整えた。やはり変態と同じく痛点がないのか。だが撃たれた部分が赤くなったままだから、瞬時に治るようなシンポテではないのだろう。とは言え、ヨシオさんの攻撃は一発で致命傷まではいかない。痛がってくれなければ面倒な戦いになりそうだ。

「どうするんです？ 向こうはまだ平気そうですね」

「そうだ。いつもこんなもんさ。奴らの攻撃をかわしつつ、何度も鉄玉を撃ち込むと、その内倒せる」

「そ、その内？」

悠長な作戦に顔を顰めたその時、撃たれていない残りの2人が構えた。と思ったら、異常なスピードでこちらへ突進してきた。

ドオオン！ ドオオン！

俺とヨシオさんを庇うように盾となったまりさんの背中に、不良2人は連続でタックルし、順番に吹っ飛んだ。

「あぐう……！ 何この衝撃。変態以上だわ」

「こいつらのシンポテはスピードや！」

まりさんが顔を歪ませた時、最初に不良達をぶっ飛ばした七佳が叫んだ。

「素になった奴を知ってるのか！？」

「よお知ってるわ！」

そう言う七佳の横で、最初にWラリアットを食らった不良2人はそのそと起き上がりだす。多少ふらつきながらも表情はない。

「カネダセ。オッサン」

「あたしはオッサンちゃうしっ！」

どうやら不良はヨシオさん捕獲用のためだけに造られたのだろうか、七佳にも同じ台詞を言って突っ込まれた。

「洋一と同じ顔しとってもなあ、お前らはただのからくり人形じゃっ！」

そして七佳は起き上がりたての二人の胸倉を両手で掴み上げ、それぞれに思い切り頭突きを食らわせた。

「うりゃ！ どりゃっ！」

堪らず目を回して気絶した二人を、七佳は泣きそうな顔で投げ捨てた。

「阿呆な不良やったけど、オヤジ狩りなんかする奴ちゃうかったのに……」

一方、こちらも七佳の事情をこれ以上聞く余裕はなかった。鉄玉を受けた3人が、ナイフやメリケンサックを手に迫り来る。一人はまりさんが受けたが、足が早すぎて他は追いつかない。

「ウアツチヨー！！　アタ、アターツ！」

甲高い掛け声と共に、ヨシオさんが不良の手を跳ね除けた。この不良達と戦うことに慣れているようで、彼も負けず劣らず中々のスピードだ。昔少林寺拳法でも習っていたのだろうか。早送りのような両者の攻防戦は、カンフー映画のようだ。

攻撃を払って僅かに距離を取っては、鼻から鉄玉を飛ばす。今までこうやって地道にオヤジ狩りを蹴散らしていたんだな。そりゃうんざりして富利異盟損に入りたくなるだろう。

それにしてもさっきから不良達はヨシオさんばかりを狙う。やはりヨシオさん捕獲用で機転が利かせられないタイプなのか。まりさんにタックルして逆に吹っ飛ばされた2人も、いつの間にか復活して攻撃に加わるから、まさに多勢に無勢常態。”俺がカタをつける”とか言っていたが、一人でどうこうできそうには見えない。

「チエストオ！！」

後ろからヨシオさんに襲い掛かろうとしていた不良の顔に、まりさんが横から豪快なフックをお見舞いした。倒れ込んだその腹へ更にエルボー・ドロップ！　だが七佳のシンポテ頭突きのように完全に気絶させることはできなかったようで、そいつはまりさんの肘の下で尚も起き上がろうとがいている。

「タクミン！　こいつ押さえてるから、眠らせて！」

「お、おう」

やっと出番だ。俺何もすることねーじゃん、と悲しくなってきたところだった。

そして、まりさんとヨシオさんが倒した不良を俺が眠らせる、という手順で敵が残り2人になった時、頭突きで気絶させた不良を忌々しげに睨みつけていた七佳が、何も言わずに立ち上がるのが目に入った。

「あ、おい！ 一人で先に行くとは危ねえぞ！」

勝手に奥へと走って行くのを呼び止めたが、七佳は振り返りもせず機械の陰に消えた。

「タクミン追って！ あと2人なら、私とヨッシーで何とか押さえるから！」

「構わず行くんだ巧君！ 俺はブルース・リーの映画を研究して、カンフー真似は得意なんだ！ こんなところでやられはしない！」

「習ったんじゃないんですか！？ 真似って言われたら余計心配になりますよ！」

「キヤー今こっち見ないで！ ヨッシーが鼻血出し始めたの！ 大丈夫、私もついてるから！」

「わ、分かった！ 血は勘弁してくれ！」
俺は慌てて七佳の後を追った。

機械の奥には大きな円柱型の水槽が並んでいた。嫌な予感は当たり、中には目を閉じた人間が、立てられた状態で入っていた。標本体か、作りかけの人造人間か。どちらにせよ気味の悪いことこの上ない。

「七佳！」

俺はある水槽の前で立ち止まっていた七佳の肩を掴んだ。

「……ほんま、胸糞悪いわ」

「この水槽がか？」

ボソッと呟いた七佳の視線は、水槽の中の人間にぶち当たった。青く薄暗い電灯に照らされたその顔は……

「さっきの……不良？」

「せやな。きっとこれが標本体にされた本人や。あの腕にある根性焼きの跡、知ってるわ。人造人間には付いてなかった」

七佳はいくつものチューブで繋がれた不良を、瞬きもせず睨んでいた。

「スピードのシンポテは、筋肉に関係する。あたしと似てるねん。だから、洋一とはよくつるんだ」

「こいつは洋一って名前なんだな」

「うん。すぐ人を信用する、悪になり切れん阿保なヤンキーやった。あいつの口車に乗せられて、あたしから離れて行ったんや。自分で判断した結末やから、しゃーないねんやろうけどな、実際偽者を見たら腹立つわ。喧嘩っ早いけど、カツアゲするような奴とちゃう。あんな出来損ないとちゃう。あんなっちゃうねん……」

「だからお前、人造人間のクローン技術が確立されたら、犠牲者の数を軽く超える同族が造れるって泉堂が言った時、怒ったのか？」
聞くと七佳は目を閉じてため息をつき、軽く2度頷いた。

「本人とすり替わって、何食わぬ顔で偽者が暮らしてるう思たら、正直怖かった。ラリアット食らわした相手の顔よく見た時、ほんまに心臓が縮こまったわ。まあ、幸いまだ出来損ないやったけどな。これ以上技術は進化して欲しないわ。偽者なんか、いらん」

何となく、言いたいことは理解出来た。七佳と洋一っていうこの不良が、どこまで親しかったかは分からない。だが、自分の知ってる奴がある日突然、敵の息が掛かった偽者とすり替わったら……もう誰を信用していいのか分からなくなるだろう。

「彼氏を才田に取られたんだな」

「彼氏ちゃうわケッ！」

ここでようやく七佳は俺を見た。

「ムキになって否定するとますます怪しいぞ。才田は男だが、その

辺のアイドルより綺麗な顔してっからなあ。道理であいつの正体を
知る前から、あんなに突っ掛かってたわけだ」

「キモイこと言ーなや！」

「女の嫉妬は見苦しいぞ。しかも男相手に」

「あーんーたーはあああ！ 一回再起不能になるまでシバいたろか
ああ！！」

いつもの調子に戻った七佳は、俺の胸倉を掴んで巻き舌気味の口調
で言った。

「その怒りは俺じゃなくて、才田にぶつけとけ」

「え？」

「敵のボスと戦う前に沈んでんじゃねーよ」

俺は一瞬緩んだ七佳の手を払い、顔からはみ出した頬の肉を摘み上
げた。

生き物は大切に（前書き）

動物さんと戦うシーンがあります。ご注意ください。

生き物は大切に

不意に唸^{うな}り声が耳に入った。人間のものではない。血に飢^うえた獣のような……

ぐわるるっ!!

「巧！ 伏せえ！」

背後から咆吼^{ほうこう}が迫ると思うや否^{いな}や、七佳が急に険しい顔で叫ぶ。本能的に危機を察知し、俺は何も考えずその場にしゃがみ込んだ。

ギャウンッ!!

「えらい気の荒い番犬やのう」

顔を上げて七佳の視線を辿^{たど}る。そこには鼻を床に擦り付けるドーベルマンがいた。

「……犬？ 今度は人造犬だとか言うんじゃねーだろうな」

「いんや、鼻っ柱殴^うったら普通に痛がつてるし、こいつはただの犬やろ」

「素手でか！？ ……前から思ってたがお前、猿からじゃなくてゴリラから進化した部類だろ」

「助けてもらっというてよおほざくな。進化やなくてシンポテや。元オリンピック選手の親から生まれたサラブレッド言^ゆうたやろ。そんなことより、いよいよボスに近づいてきたで」

ドーベルマンを睨^{にら}みつけたまま、七佳は不敵に口元を吊り上げた。

そしてドーベルマンの方も鼻の痛みがマシになったのか、再び唸りながら臨戦態勢に入った。更に水槽の陰からまた新たに2匹の敵がそろりと歩み出てくる。

「な……何だと！？」

俺は思わず声を上げた。何故ならその2匹は、いかついドーベルマンでも、貫禄^{かんろく}たっぷりのブルドッグでもないからだ。

流行りのプードル……いやこれはまだスタンダードだからある程度の大きさがある。若干戦う気がなくなるが、トイやティーカップ

じゃないだけマシだ。

問題はもう一匹。それは小さなフェレット。もう犬じゃねーし。噛まれたら痛そうだが……

「おい、どうボスに近づいたのか、説明してほしいんだが」

「才田はマルチリンガル。人も動物も問わず話せるシンポテやって言^ゆいたやろ。こいつらはきっと部下^{のら}や」

「なるほど。そういや前に才田は、野良達^{のら}を使って同族の情報を集めてるって言ってたな」

「マジでか！？ くっそー、せやからあいつ、あんなに営業成績良かったんか！」

「別にもういいじゃねーか。これからは俺が同族引き付けるんだからよ。とにかく、ドーベルマンもプードルもフェレットも野良だつてんなら、皆捨てられたペットだったのを才田が仲間にしたってわけか」

泉堂や栗林に付け入った時と似ている。相手の負の感情に滑り込み、言葉巧みに取り込んでいく。人間だけでなく、言葉の話せない動物をも手玉に取れるということなのか。

バウウッ！

突然、プードルが飛び掛ってきた。狙いは七佳！

「ぬぁんとお！」

七佳はそれを避^よけ、着地したプードルの背後に素早く回り込んで、綿飴^{わたあめ}のような尻尾をむんずと掴んだ。

「食らえ！ 保健所スイングッ！」

両手でしっかりと尻尾を掴んだまま、七佳はその場で回転した。遠心力でプードルの体が浮き上がる。こいつ、犬相手にジャイアント・スイングかけてやがる！

「だりゃっ！」

綺麗に3回転した後、解き放たれたプードルは、臨戦態勢で隙^{すき}を窺^{うかが}っていたドーベルマンに突っ込んだ！

がう！ ぎゃうう！

2匹一緒に折り重なって吹っ飛んだ。

シャツ

次はフェレットが俺に向かって床を蹴った。何とかかわすも、相手はイタチ。素早く体勢を整えてはまた飛び掛ってくる。

「うわっ！」

今度は避け切れなくて、咄嗟に腕を振り払うと、運良く手が当たった。フェレットが床に叩きつけられて転がる。ぼうっとしている暇はない。俺はフェレットが起き上がる前にその小さな首根っこを摘み上げた。

「巧！ 動物愛護スリーピングや！」

「分かっている！ 変なネーミング付けるんじゃない！」

七佳の横槍に若干イラッとしながらも、俺は手の中でもがくフェレットの鼻先に指を近付けて眠らせた。

グルルルル……

やっと3匹倒したというのに、更に複数の唸り声が聞こえた。

水槽の横からやる気満々の柴犬とゴールデンレトリバー。機械の上には凜と立つ黒猫と、やる気なさそうに寝そべりながらこちらを見詰めるペルシャ猫。そして出てくる意味があるのか、床をのんびり這う大きめの緑亀数匹。

「あんた、才田を追え！」

七佳の言葉にぎょっとして振り向いた。

「はあ！？ 一番才田をぶっ飛ばしたいのはお前だろ。それにまだ何匹隠れてるか分かんねえのに、一人で……」

「ぶっ飛ばしたいけど才田の目的はあんたやねん！ 野良を全部倒すなんてキリがない。あいつが何でこんなことしたんか、事情を聞いた後、問答無用でシバいて来て！」

そう言って七佳は動物達の方へ走った。

「七佳！」

「大丈夫！ あんたがあいつの口車に乗せられてまうことは絶対にないって、信じてるから！ 早よ行けっ！」

こちらを見ずに言いながら、手始めに柴犬^{しばし}へ拳を繰り出す。一人で戦うその姿を見て、俺も今から一人で才田とケリをつける覚悟を決めなくちゃならない、と思った。

「分かった！俺も、ゴリラの腕力が世界最強だって、信じてるからな！」

「あたしはサラブレッドやあ言^ゆーてるやろっ！」

背中に「ドッグトレーナー・クラアーツシュ！」という、気の抜けそうなネーミングを聞きながら、俺は更に奥へと進んだ。

青白い照明で薄暗い上に、機械がごちゃごちゃしていて見晴らしの悪い中、俺は必死で才田の姿を探した。

奴がこんなまどろっこしい戦いを仕掛けてきた理由は、薄々感づいていた。タイプの違う敵を順番に送り込めば、戦いに向いていない俺が最終的に一人になると踏んだのだろう。実際思惑通りになっ

てしまったが。

「やっと来たんだね」

突然の呼びかけに振り向くと、機械の上に足を優雅に組んで腰掛ける才田がいた。どうやら見落として通り過ぎていたらしい。間拔けな話だ。

「……随分と手の込んだことしてくれるじゃねえか。思い切り面倒くさかったぞ」

「仕方ないじゃないか。こうでもしないと、君にはいつも誰かくっついて来るんだもの。僕は君をスカウトしようとしてるんだよ。交渉は1対1じゃないと、第3者が入ったら余計な口を挟まれてやりにくい」

「スカウト……まだ諦めてなかったのかよ」

才田も案外しつこい男だ。それとも”失敗しましたあ、テヘッ♪”じゃ済ませられない命令なのか。

「僕にはもう時間がないんだ」

俺の考えていることが分かったかのように、才田は答えた。

「何だよ、時間って。俺のスカウトが失敗したら、ペナルティでも科せられるのか？ それかお前自身が標本体にでも？」

敵の時間なんて知ったことじゃねえ、と茶化すように言うと、才田は視線を横に逸らして薄く笑った。

「僕はもう既に標本体になってるよ」

「……は……っええ！？」

驚いて二度見する俺を気にも留めず、才田は横に逸らした視線を上げた。

それを辿った先にあつたのは……

「さ……才田が……入ってる……？」

俺は慌てて水槽に駆け寄った。他の水槽の後ろ、一番奥に設置されたそれは、硝子が少し汚れていて、古びたものだった。その中に入っていた人間の顔は、紛れもなく才田。違うところといえば、肌の気があるかないか。

水槽を啞然と見上げる俺の隣に、才田がやってきた。硝子にそつと手を当て、自分を見つめるその顔に表情はない。

「僕は才田陽路のクローン。CBTが作り出した人造人間の第一号で、偶然できた唯一の成功例なんだ」

淡々と語る彼の雰囲気、今まで戦ってきた人造人間のような異様さはない。どこからどう見ても、人間だ。

「昔からCBTは、製薬会社を営む傍ら、内緒でクローン技術の研究を行っていたんだよ。大々的にすると世間から批判されるからね。クローンに興味を持った富豪や政治家、そういう富と権力のあの人から支援を受けつつ、世界に公表しない独自の技術を開発していた。日本人のオタク的性質は凄いよ。いつの間にか外国の技術を

追いついてしまった。世界に先駆けてマウスのクローンを作ること
に成功したその年、今から23年前、CBTのクローン研究室室長
の息子、才田陽路は交通事故で頭を強く打ち、植物状態になった」
そこで無表情だった口を僅かに歪めた才田は、硝子から手を離し、
近くにあったパイプ椅子に座った。

「父親は嘆いた。相当優秀な息子だったらいいからね。でも回復の
見込みがないというのは、医者じゃなくなたって、長年生物のクロー
ン技術に関わってきた父親には分かった。だから無駄な延命措置は、
すぐに取りやめさせたんだ。そして仮死状態のまま息子をこの研究
室に運び、今まで動物でしか成功していなかったクローン技術で、
息子をもう一度作ることにした。姿形が同じで優秀な息子を、そっ
くりそのままね」

才田の目付きが一瞬で変わった。色んな感情が瞳の中で燦々している
ようだ。

「ま、見た目は同じでも、僕は本物ほど優秀には育たなかったみた
いだけだ」

そして才田はパイプ椅子の背もたれに体を預け、小さくため息をつ
いた。

父親の異常な思想で作られたクローンである彼は、自分の存
在をどう思っているのだろう。その瞳の奥に窺えるのは、悲しみと
憎悪と……だがそれだけではない生みの親への切ない愛情も少しだ
け、混じっているような気がした。

人造人間の居場所

「……自分が人造人間だから、でんでんタウンに住む同族が本物の人間でなくても構わないってことか」

危うく同情しかけたが、才田が人の心に付け入るのが上手いということ进行い出し、俺は未だ寂しそうに揺れる瞳を睨みつけて言った。「ま、そうだね。人工的に造られた存在という同じ境遇だから、人造人間の方が合うかもしれない。C B Tに送った標本体は、田ノ中や泉堂君達みたいな癖のある性格じゃない人を選んだし。まだ僕ほど人間に近いものは作れてないけどね。焦り過ぎなんだよ、父さん達は」

「焦り過ぎ？」

聞き返すと、才田はそれまで瞳に出していた感情を引っ込め、思わせぶりに頷いた。

「僕は細胞分裂から始まって、人間の赤ん坊が形成されるために本来掛かる時間を、省略することなく使って造られた。水槽から出た後も、人間の子供と同じスピードで成長してきたんだ。卵子を使わず、標本体の細胞だけで僕が出来たのは本当に偶然で、その技術を再現しようと父さんは、幼かった僕を連れて、先進国各地の資料を調べに回った。独自でコソコソ開発したクローン技術を再現するために世界を回るなんて、皮肉なものさ。その時に僕は自分の能力に目覚めたわけなんだけど」

「言葉が通じない外国だからか？」

「そう。それに短期間で引っ越すから、友達もできやしない。仕方なく野良の動物に話しかけてたら、いつの間にか意思疎通が出来るようになってたのさ」

友達がいなくて動物に喋りかけるなんて、今の社交的な才田からは想像できない。電子のようにトイレの花子さんになるよりはずっとマシだが。

「そうやって各地で集めた資料を基に、細胞の一部から人間を形成するという技術はC B T内で確立された。でも支援してきた富豪達は、僕という偶然の成功例だけでは満足せず、結果を急かせた。その結果というのが、さっきまで君達が戦っていた人造人間さ。細胞分裂を早め、成長促進剤を打ちまくって……そりゃあんなになるわけだよ」

「成長を早めて省略したから、不完全な人間もどきが出来たのか……。だが何で特殊能力に拘るんだ？ クローンなら、普通の人間だって良かったわけだろ？」

「細胞分裂の失敗が続いていた時、父さん達は僕的能力に目を付けたんだ。もしかしたら、特殊能力を持つ者の方が成功しやすいかもしれないって。実際どうなのかは分からないけど、それ以来標本体は特殊能力者に限定されてる。支援者達も、普通のクローンを造るより興味を持ったみたいだよ」

支援者もロクな奴じゃないな。才田は”興味を持った”なんて言い方をしたが、悪く言えば面白がってるだけだろう。人の人生を何だと思ってるんだ。オリジナルだけじゃない。才田のように人格をしっかりと持ってしまったクローンがこの先出来たら……

顔を歪ませた俺とは対象的に、才田は飄々としたものだ。

「そこまで知ってて、お前は平気でC B Tに加担するんだな。お前はオリジナルの父親が息子と同じように育ててくれたからいいさ。だが、もし他の成功例が出来たら、そいつらは居場所も存在意義も見出せないじゃねえか……っ！」

反吐が出そうになって、それを何とか堪えながら言った。それでも才田は眉一つ動かさない。

「居場所と存在意義を与えるためのでんでんタウンだよ。周りは皆特殊能力を持っている、皆同じように人工的に作られた存在。それは僕の居場所を作るためでもあるんだ。父さんは所詮オリジナルに劣る僕を、本当の息子とは思っていない。造られてからずっと近くにいたから、態度や言葉で微妙に感じ取れるんだ。子供は敏感だから

らね。まあ、失敗例達よりは大事に扱われてきたとは思うけど」

「自分のような存在を増やしたくない、とは思わないんだな」

「……君って、そんな偽善的な性格だったわけ？　僕の見当違いかな。田ノ中に影響されちゃった？」

才田は馬鹿にしたように乾いた笑い声を上げた。

ガッ……

綺麗な顔に、俺は拳こぶしを叩き付けた。一瞬才田は体を傾けたが、堪えて椅子から落ちることはなかった。

「その田ノ中に、お前をどつき回せと言われてるんだ」

「……野蠻だね。僕と本物の人間である君達とは、理解し合えないようだ。志牙君しがの同族を引き付ける体質は、外を出歩くことで意味を成すのであって、水槽の中の標本体じゃ駄目だからね。手荒なことはしないと言われてるんだ。でも仕方ない。スカウトが無理なら、実力行使だね」

才田が右手を部屋の隅に向かって上げた時、何か小さいものが動くのが見えた。

パタ…パタタ…カタカタッ……

薄暗くてよく見えないが、小動物が床を駆け回っているような……音はどんどん増えていく。部屋の隅には何かの塊のような影が出ていた。

「ね……ずみ？」

「正解。野良も研究用のマウスもモルモットも、皆僕の友達さ」

き、気持ちわりい！　目を凝らすと、溝鼠とぶねずみみたいなものから清潔そうな白いマウスまで、色んな色と大きさの鼠達が今か今かワキワキと主人の合図を待つかのようにたむろしている。

「お前がそんな真面目に協力しなかったって、いずれ技術は進化して成功例は出てくるだろ！　俺には研究者や支援者達より、お前の方が焦ってるように見えるぞ！」

強気に言いながらもジリジリと才田から距離を取るために後ずさる。「アハハッ、そうかなあ。でも実際時間はあんまり残されてないし、

僕も少々焦ってるかも」

「さっきも自分には時間がないとか言ってたな……」

「ああ、そうだよ。人工的に細胞分裂を繰り返したら、やっぱり遺伝子に無理が出るんだよ。だから僕は普通の人間ほど生きられない。寿命が1年後なのか10年後なのかは分からないけど、あまり長くはないと、自分で感じるんだ。それまでに一人でも多くの成功例に会いたい。話をしたい。君の言うとおり、僕も焦ってるかもね」

そこで才田は顔から笑みを消すと、上げた右手を振り下ろした。

鼠達へのGOサインということは一目瞭然^{いちもくりようぜん}。鼠が駆け出すのを見る前に、俺は後ずさっている時に目を付けた物の方へ走った。

「クソッ！ 外れろ！」

使う機会などそうそうない消火器は、まず壁から取り外すところから苦戦した。その間にバダバダバダ……という静かな突進音はどんどん近づいてくる。

ようやく振り返って構えた頃には、鼠の軍勢がすぐ目の前まで迫っていた。

「うわあああ！」

顔を背けたくなったがそうも言ってられず、必死で消火器を放った。プシャアアーーーーー

白煙に混じって鼠達の悲鳴が飛び交う。

「あーあ、煙が火災報知器に感知されなきゃいいけど……」

のた打ち回る鼠の向こうから才田の声を聞いた時、ピーポンピーポンとサイレンが鳴り出した。

「ほら、ね？」

「や、やべえ！」

音を聞きつけて会社に残った研究者達が駆けつけたら、せっかくこっそり侵入した意味がなくなる。それに自動的に消防へ通報が行ったら大騒ぎだ。

サアーーーーー

「え？」

「あ……」

急に部屋の中に雨が降り出した。見上げると、天井にある複数の報知器から出ている。大粒の雨は容赦なく精密そうな機械に降り注いだ。

「な、何か結果的には機械が壊れてラッキー……なのか？」

データのバックアップは取っているだろうが、こんな特殊な機械をすぐに揃えられるわけがない。しばらく人造人間の製造は中止せざるを得ないだろう。

才田は報知器が放水タイプとは思っていなかったのか、降り注ぐ雨を呆然と眺めていたが、我に返るのを待ってやる義理はない。まだ消火器の餌食になっていない鼠達がいるのだ。俺はすぐに踵^{きびす}を返して、七佳達のいる方向へと走った。

弱小主人公は最後の最後で活躍する

走って程なく、柴犬相手に寝技をかけている七佳を発見した。

「おいっ！ そんなのは放っておいて、逃げるぞ！」

「何や？ さっきえらいピコピコ音がしとったけど……」

「とりあえず才田はどついた！ 火災報知器の放水で機械も多分壊れた！ だがこの後才田の小さなお友達が大量して来る！」

「はあ？」

起き上がって首を傾げる七佳の腕を引っ張り再び走ると、背後からバダバダバダ……というあの音がした。つい今しがたのことが蘇り、背筋に悪寒が走る。才田が我に返ったか！？

「うわあっ！ 小さな友達って、鼠かいな！」

ギョッとした声を上げた七佳は、シンポテを使って逆に俺を引っ張って走った。

次に見えたのはヨシオさんとまりさん。こっちも何とか二人で敵を倒せたようだ。まりさんがティッシュでヨシオさんの鼻を拭いている。

「二人とも走れ！！」

自称サラブレッドのスピードに半ば足が浮いた状態で走っている俺は、前方にいる彼らに何とかそれだけ叫んだ。二人も俺と七佳の後ろから迫り来る群れに顔を引き攣らせ、急いで走った。

月明かりに視界が開けた時、みかんと電子がいた。みかんが首根っこに乗って押さえているマツチヨ変態はぐったりだ。もしかして酸欠常態なんじゃ……と思ったが、そんなことを気にしている余裕はない。

「みかんちゃん！ シンポテを解くんだ！ 逃げるぞ！」

一番前にいたヨシオさんがみかんを担ぎ上げ、扉の方へ向かった。そしてまだ少しふらつく電子の手をまりさんが引っ張る。

「あう……」

「あ、電子ちゃん！」

急に立ち上がって走った電子の足が絡まり、焦って引っ張っていたまりさんと手が離れた。

「まりりん先に行って！」

まりさんの後ろから来た七佳はそう言って、俺を引っ張るのは逆の手で、電子の手を取った。だが足が思うように動かない電子を馬鹿力で引っ張ったところで、それは引きずっているだけだ。それでも何とか部屋の外まで出て扉を閉めれば、鼠の軍勢を遮断できる。

あともう少しというところで、七佳の手と引きずられながら倒れ込んだ電子の手が離れた。

「わあっ！」

勢いに乗っていた七佳と俺は、廊下で待っていたまりさん達に激突し、転がった。電子は一人だけまだ部屋の中！

「ひょおお！」

押し寄せる鼠達に、電子は必死で抵抗しようと力^{りき}んだ。

……ツポフン、……ツポフン

黒髪が膨れては萎^{しぼ}み、膨れては萎^{しぼ}み、エンストを繰り返す。

「電子……！」

俺は咄^{とつ}嗟^そに部屋へ駆け込んだ。もう電子を引きずり出している時間はない。鼠達が倒れたままの電子に飛びかかった！

その時俺は何も考えていなかった。体が勝手に動いたのだ。もう自分が戦闘では足を引っ張るだけだとか、デリケートだとか、そんなことはどうでも良かった。

ただ勝手に手が電子の上に這い上がった数匹の鼠を振り払い、勝手に腕が床に縮こまった電子の体を抱え込んで覆いかぶさった。

そこで初めて思考が回復した。鼠達はもう俺の背中に乗ってきている。こいつらを退けるにはどうしたらいいのか。俺には臭いのシンポテしかない。鼠の嫌いな臭い……鼠の嫌いな臭い……鼠の嫌いな臭い！

目を瞑^{つむ}って集中した俺の身体の奥で何かが収束し、全身の毛穴が

開く感覚がした。

目を開けると、そこに鼠はいなかった。

「むぐるわあ！　げーっほげほ！」

屈みこんだ胸元で、電子の悶え^{もた}苦しむ声がした。

「おい、大丈夫……うぐっ、ごほっ！」

物凄い臭いだ。これが鼠の嫌いな臭いなのか？

「巧！　電子！　……うわ、何やこの強烈な薄荷臭^{はっかしゅう}！　うわ臭っ！」

「いやあん、チョー目に沁^しみるう」

「むむむ……これはさっき負傷した鼻の粘膜にもクるな……」

「お、お兄ちゃんやり過ぎやって！……ゴホゴホッ」

廊下から駆けつけた他の奴らも、部屋に入るなりいきなり顔を顰^{しか}めた。俺が全力で放った臭いは、鼠だけでなく、人間にも刺激臭となるほど濃いものだったようだ。

「ワ、ワタクシは平気ですうう……ゲホッ。巧さんの臭いならどんな臭いだって……グエホッ！　う、受け入れるのがヤンデレですからあああッゲホゲホオ！！」

「いや、そこまでして受け入れなくても……」

涙目で咳き込みながらもしがみ付いてくる電子を、無理矢理引き剥がす余力はなかった。

「とにかく、今のうちにさっさと扉を閉めて、ここを出るぞ。火災報知器が作動したんだ。騒ぎになると厄介だ」

そう言って部屋を出る。電子も走らなければ歩くくらいできるようだ。

途中火災報知器の音を聞きつけて階段を上ってくる研究者達を、

物陰に隠れてやり過ごし、消防車の音が近づいて来る頃には、CBTの敷地の外に出る事が出来た。

そしてそろそろと鳥槻荘まで歩いているのだが、どうも皆俺から距離を置く。電子以外。

「……そんなに臭えか、俺は」

横目で軽く睨みながら言ってるやつだ。

「え、いやだって、あの臭いは巧から出たからか知らんけど、まだ近寄ると……ね」

「べ、別にタクミンが臭いって言うんじゃないってえ、鼠を追っ払う時に出した臭いが……」

「俺は鼻の中を負傷してさえないなければ平気なのだが……」

「ほら、自分から出る臭いは気にならんでも、他人からしたら気になるって言ーやん」

「つまり、俺は臭えんだな」

皆があたふたと釈明するのを、俺はピシヤリと切った。

「巧さんは臭くありませんよ。ちよっと刺激的で危険な香りなだけですよ」

「電子、それは端的に言うのと、臭えってことだ」

歩きにくいくらい腰にへばり付いてくる電子を小突く。

月がだいぶ傾いてきた、夜明けが近い。才田の話は後にして、今はとにかく眠りたい。

そう思いながら歩き続けた。

結局CBTで俺達が起こした騒ぎは、単なる小火^{ぼや}として、新聞に

小さく載った程度だった。駆けつけた消防が標本体を見たかどうかは分からないが、いずれにせよまた権力が働いたのだろう。夜中の侵入者については何もなかったことにされていた。

才田が人造人間だったことを聞いた七佳の驚きようは凄かった。才田ほど完成された人造人間が造られるということは、偽者の友人を目の当たりにした七佳にとって、一番嫌な事だろう。だがその機械の一部も水浸しで壊れた。それが原因かは知らないが、ここしばらく人造人間どころか、ミラーグラスをかけた研究者達も見かけない。当面はC B Tもおとなしくなるだろう。

あれから才田は俺達の前に現れていない。あいつはちゃんと、自分の居場所を見つけられたのだろうか。C B Tでは難しいかもしれないが。氣に掛けてやる義理はなくとも、氣にはなる話だ。

みかんは2日ほどまりさんの部屋に寝泊りしていたが、学校が始まると言って大阪に帰っていった。卒業したら富利異盟損ふりいめいそんに就職するらしい。物好きなのは思ったが、これから先、またC B Tが出てくるとも限らないし、T N Hはまだ健在だ。みかんにとっては、普通の会社に就職するより安全かもしれない。

そして俺達人権戦隊は、副業で生活費を稼ぎつつ、今日も秋葉原のどこかでシンポテを持つ者を探している。

戦いはまだ終わっていない。

がんばれシンポテレンジャー

負けるなシンポテレンジャー

弱小主人公は最後の最後で活躍する（後書き）

あとがきあります

あとがき

はい！

シロツメの趣味丸出し作品、『しんぽてえ！?』完結です！「戦いはまだ終わっていない」とか言っときながら、お話は完結です！

コメディなのかパロディなのか、どこまで引用レベルなのかよく分からず、思うがまま本能のまま書きなぐって参りました。書いてるシロツメは、めちゃくちゃ楽しかったです、ハイ。このあとがきまで読む気になったアナタは、シロツメと趣味趣向が似てるかもしれない（へーへ；）

終盤シロツメの個人的な多忙により、更新が止まってしまいました。が、書き始めたからには完結させたいと、常にヤキモキしております。

ラストは「え、何も解決してないのに!？」という終わり方でしたが、最初からそういう予定でした。というのも、この作品でシロツメが一番書きたかったシーンが、ヨッシーVS栗林のところだったんです。そーです、あの豆鉄砲と太陽拳の応酬を書きたかったがために、『しんぽてえ!?』を執筆したと言っても過言ではないうっ！あの回を書いてる時は、特にノリノリでした。その収集をつけるために、CBT↓才田と巧の対決、の流れを組みました。くだらねー……と思った方、その通り、くだらない駄作なのですよ（笑）実際パロディしまくって、もしこの先、法的に云々の通達が来てしまった場合、サクッと消しちゃうかもしれません。そんな作品に最後までお付き合いいただいたアナタ、ほんとうにありがとうございました。

また次に書きたいと思っている新作はあるのですが、もっと真面目に書く予定です。とはいえ、アップは今の多忙が落ち着き次第ですが……。気長に待っていただける方は、どうぞお楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5183s/>

しんぽてえ！？

2011年8月18日22時56分発行